

京都府遺跡調査概報

第 25 冊

芝 山 遺 跡

1 9 8 7

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施するようになって、はやくも6年が過ぎようとしています。私達は、常に、より精密な調査を心がけ、より正確な記録を作成し、これらを後世に伝えるため、日夜努力しているつもりであります。そして、その方法の一つとして、「京都府遺跡調査概報」を年度毎に刊行しているほかに、「京都府埋蔵文化財情報」や「京都府遺跡調査報告書」を刊行しています。

昭和61年度においては、当調査研究センターでは41か所の発掘調査を実施しましたが、本書ではそのうち芝山遺跡の調査概報について報告します。そして、他の遺跡の調査については、さらに数冊の冊子にまとめています。本書を含めて、これらが関係各位の参考にお供され、斯学向上の一助となれば幸いです。

本書に掲載した調査の実施にあたりましては、発掘調査を委託された京都府土木建築部をはじめ、京都府教育委員会・城陽市教育委員会等の関係諸機関の御協力を受けただけでなく、酷暑・極寒の中で多くの方がたが熱心に作業等に從事していただきましたことを明記して、これらの方がたに厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は、「芝山遺跡」である。
2. 芝山遺跡の所在地，調査期間，経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
芝 山 遺 跡	城陽市寺田南中ノ芝	昭60. 5. 21 昭61. 3. 25 昭61. 5. 6 昭61. 9. 2	京都府土木建築部	小池 寛

3. 本冊の編集には，調査課企画資料担当が当たった。

目 次

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の概要	4
4. 検出遺構	5
5. 出土遺物	35
6. 小 結	59
7. おわりに	64

挿図・付表目次

付表 1	遺構番号対照表	2
第 1 図	調査地位置図	3
第 2 図	地区設定図および周辺地形図	5
第 3 図	A地区, 地区設定図	6
第 4 図	測量図(杭No.39~No.42間)	6
第 5 図	1号墳実測図	7
第 6 図	1号墳周溝内土壇実測図	8
第 7 図	3号墳実測図	9
第 8 図	3号墳埋葬主体部実測図	9
第 9 図	3号墳溝内壇状施設実測図	10
第 10 図	測量図(杭No.36~No.38間)	11
第 11 図	4号墳実測図	12
第 12 図	5号墳実測図	13
第 13 図	6号墳実測図	14
第 14 図	6号墳埋葬主体部実測図	14
第 15 図	7号墳・土壇墓 2 実測図	15
第 16 図	7号墳埋葬主体部実測図	16
第 17 図	8号墳実測図	16
第 18 図	8号墳埋葬主体部実測図	16
第 19 図	9号墳埋葬主体部実測図	17
第 20 図	土壇墓 1 (合口甕棺墓) 実測図	17
第 21 図	土壇墓 2 実測図	18
第 22 図	土壇墓 3 実測図	18
第 23 図	土壇墓 4 実測図	19
第 24 図	土壇墓 5 実測図	19
第 25 図	竪穴式住居跡 1 実測図	20
第 26 図	測量図(杭No.40~No.43間)	21
第 27 図	竪穴式住居跡 2 実測図	22
第 28 図	土壇 1 実測図	22

第 29 図	測量図(杭No.38~No.41間)	23
第 30 図	竪穴式住居跡 3 実測図	24
第 31 図	竪穴式住居跡 4 実測図	24
第 32 図	竪穴式住居跡 5 実測図	25
第 33 図	竪穴式住居跡 6 実測図	25
第 34 図	竪穴式住居跡 7 実測図	26
第 35 図	遺構概観図	27
第 36 図	遺構平面図(杭No.38~No.39間)	28
第 37 図	遺構平面図(杭No.39~No.41間)	30
第 38 図	遺構平面図(杭No.41~No.43間)	31
第 39 図	礫充填土壇実測図	33
第 40 図	土壇 4 実測図	33
第 41 図	井戸枠平面図および東側面図	34
第 42 図	溝 5 実測図	35
第 43 図	灰釉陶器柱穴内出土状況図	35
第 44 図	D地区平坦部平面図	36
第 45 図	1号墳出土遺物実測図	37
第 46 図	3号墳埋葬主体部出土遺物実測図	38
第 47 図	3号墳出土遺物実測図	39
第 48 図	4号墳周溝下層出土遺物実測図	40
第 49 図	5号墳周溝上層内出土遺物実測図	41
第 50 図	各埋葬主体部出土遺物実測図	43
第 51 図	土壇墓 1 出土遺物実測図	44
第 52 図	各土壇墓出土遺物実測図	44
第 53 図	竪穴式住居跡 1 出土遺物実測図	46
第 54 図	竪穴式住居跡 1 出土遺物実測図	47
第 55 図	竪穴式住居跡 2 出土遺物実測図	47
第 56 図	土壇 1 出土遺物実測図	48
第 57 図	各竪穴式住居跡出土遺物実測図	49
第 58 図	柱穴内出土遺物実測図	49
第 59 図	礫充填土壇出土遺物実測図	50
第 60 図	土壇 4 出土遺物実測図	50

第 61 図	井戸内出土遺物実測図(土器).....	51
第 62 図	井戸内出土遺物実測図.....	52
第 63 図	遺物拓影図.....	53
第 64 図	井戸内出土遺物実測図(木製品・種子).....	54
第 65 図	溝 2 出土遺物実測図.....	55
第 66 図	溝 5 出土遺物実測図.....	56
第 67 図	土坑 3 出土遺物実測図.....	56
第 68 図	包含層出土遺物実測図.....	57
第 69 図	D地区包含層出土遺物実測図.....	58
第 70 図	出土石器類実測図.....	59
付表 2	古墳規模比較表.....	60
第 71 図	古墳～飛鳥時代遺構変遷図.....	61
第 72 図	井戸梓木組模式図.....	63

図 版 目 次

- 図版第 1 (1)A 地区調査前全景(東から) (2)A 地区完掘状況(東から)
- 図版第 2 (1)1～3 号墳(下方が北) (2)3 号墳(下方が北)
- 図版第 3 (1)4～9 号墳ほか(上方が北) (2)6～9 号墳ほか(南東から)
- 図版第 4 (1)3 号墳埋葬主体部(東から)
(2)3 号墳壇状施設遺物出土状況(南から)
(3)3 号墳周溝内遺物出土状況(南から) (4)土塚墓 1 (東から)
- 図版第 5 (1)6 号墳埋葬主体部(西から)
(2)8 号墳埋葬主体部遺物出土状況(北から)
(3)9 号墳埋葬主体部(北から) (4)土塚墓 5 (南から)
- 図版第 6 (1)竪穴式住居跡 1 (南から)
(2)竪穴式住居跡 1 遺物出土状況(東から)
- 図版第 7 (1)8・9 号墳, 溝 1, 竪穴式住居跡群(下方が北)
(2)竪穴式住居跡 5 (東から)
- 図版第 8 (1)土塚 1 遺物出土状況(北から) (2)土塚 4 (北から)
- 図版第 9 (1)井戸全景(東から) (2)井戸完掘状況(西から)
- 図版第 10 (1)納内・棧・楔(西から) (2)給水口(西から)
(3)斎串出土状況 (4)井戸完掘状況
- 図版第 11 出土遺物
- 図版第 12 出土遺物
- 図版第 13 出土遺物
- 図版第 14 出土遺物

芝山遺跡発掘調査概要

1. はじめに

芝山遺跡の発掘調査は、京都府土木建築部道路建設課が施工している山城総合運動公園城陽線道路建設に伴う事前調査である。山城総合運動公園は、昭和63年に開催予定の国民体育大会に競技用施設として利用されることになっているが、現行の道路事情では円滑な運営が困難なため城陽線が計画された。建設予定地は、遺跡内のほぼ中央を縦断するため、京都府土木建築部道路建設課と京都府教育庁文化財保護課がその取り扱いについて協議し、当調査研究センターとの間で委託契約を行い、実施したものである。

調査地は東西600mに及ぶため、西からA・B・C・D地区に分け、全体の様相を把握するために昭和60年5月21日から同年10月12日まで試掘調査を行った。A地区では、試掘トレンチ全面で遺構を検出した。B地区では資材置場造成時に削平を受けており、遺構・遺物は検出できなかった。C地区では明確な遺構を確認しなかったが、一部で多量の遺物を含む包含層を確認し、拡張し遺物の採集に努めた。D地区は調査地の最東部に位置し、調査地北方を流れる大河原川(築留川)の旧河道と、その南側に隣接する平坦面で溝・柱穴等を検出した。B～D地区で遺構・遺物が集中する部分については、試掘調査期間内で拡張し調査を終了した。A地区では、全面で遺構を検出したため、2,800m²のうち1,600m²について、昭和60年10月19日から昭和61年3月25日までの間、本調査(I次調査)を行った。現地説明会は、昭和61年3月8日に行い多くの見学者を得た。I次調査の結果を参考にし、A地区の1,400m²について昭和61年5月6日から同年9月2日の間、全面調査(II次調査)を行った。II次調査の現地説明会は同年7月26日に行った。調査面積は、A地区2,800m²、B地区500m²、C地区560m²、D地区1,100m²、総面積4,960m²である。

発掘調査は、当調査研究センター調査課、主任調査員 辻本和美、同調査員 小池 寛が担当した。また、本概要報告の執筆・編集は小池 寛が行った。

調査期間中、諸先生方の有益な御教示・御指導を賜わった。また、城陽市教育委員会をはじめ関係諸機関には、終始、御協力を頂いた。記して深謝する次第である。なお、現地作業・整理作業に従事して頂いた方々に感謝の意を表したい。^(註1)

本概要報告で使用する遺構番号は、既刊の現地説明会資料及び概要報告で使用した遺構番号を、城陽市教育委員会をはじめとする関係諸機関で協議し、最終的に決定したものである。従って、遺構番号については本概要に準拠することとする。ただ、後述する1号墳～3号墳については、概念規定上の問題もあるが、時期的な側面から方形墳とした。今後、^(註2)

付表1 遺構番号対照表

本報告	既報告	本報告	既報告	本報告	既報告
1号墳	古墳8	土塚墓1	土塚墓1	竪穴式住居跡1	竪穴式住居跡4
2号墳	—	土塚墓2	土塚墓2	竪穴式住居跡2	竪穴式住居跡5
3号墳	古墳5	土塚墓3	土塚墓3	竪穴式住居跡3	—
4号墳	古墳1	土塚墓4	土塚墓4	竪穴式住居跡4	竪穴式住居跡2
5号墳	古墳2	土塚墓5	—	竪穴式住居跡5	竪穴式住居跡3
6号墳	古墳3	溝1	溝1	竪穴式住居跡6	—
7号墳	古墳4	溝2	溝2	竪穴式住居跡7	竪穴式住居跡1
8号墳	古墳6	溝3	—	掘立柱建物跡3	掘立柱建物跡1
9号墳	古墳7	溝4	—	掘立柱建物跡4	掘立柱建物跡3
[—]は、Ⅱ次調査で検出した遺構であり、新たに番号付けを行った。				掘立柱建物跡5	—
				掘立柱建物跡6	掘立柱建物跡7
				掘立柱建物跡7	—

いわゆる、古墳時代の方形周溝墓の概念規定については考察する余地を残していると言え^(注3)る。また、4号墳～9号墳は群集墳として認識できるが、古墳群の名称は設定せず、芝山遺跡内で検出した古墳として取り扱った。^(注4)遺構番号の変更は付表1の通りである。

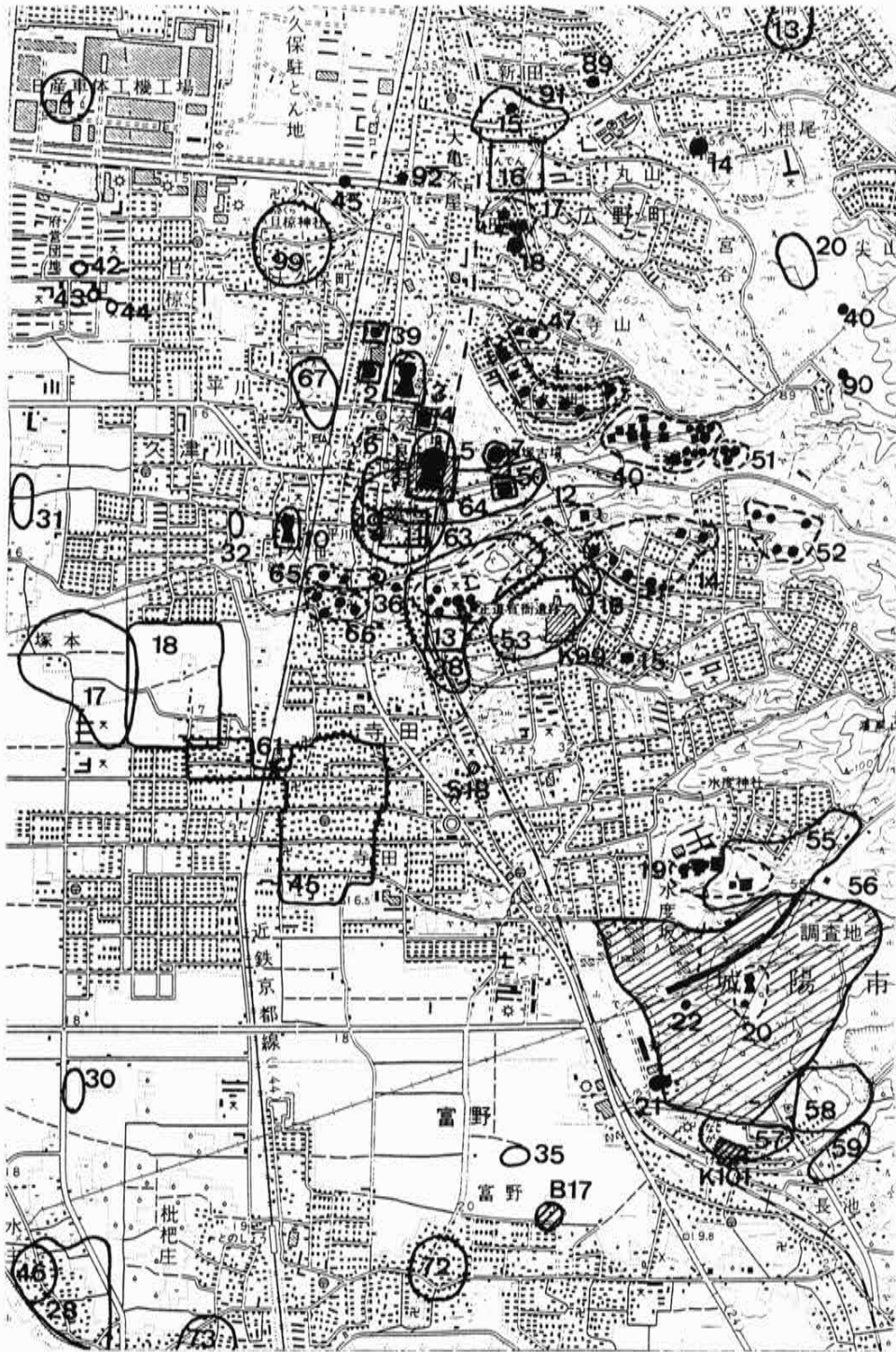
2. 位置と環境(第1図)

芝山遺跡は京都府城陽市寺田南中ノ芝に所在する。宇治丘陵から西方にのびる低丘陵の先端に立地し、大阪層群が基層となっている。遺跡の範囲は北限が大河原川、南限が森山にまで及び、宮ノ平遺跡・森山遺跡に隣接する。遺跡地内には梅の子塚古墳群などが所在し、また、丘陵裾部には旧北陸道^(注8)が走る。調査地からは大住車塚古墳等が位置する丘陵や木津川の沖積地が一望でき、墓地や住居を選地する上で極めて好条件であったと考えられる。

次に周辺の遺跡について縄文時代から古墳時代を中心に概観する。

縄文時代 芝山遺跡の南方に位置する森山遺跡では、縄文時代後期の竪穴式住居跡や弥生時代・古墳時代の土器が出土しており、周辺での出土が少ないことから当時の様相を考える上で重要な遺跡として認識されている。現在、史跡指定を受け現地保存されている。

弥生時代 森山遺跡以外では、沖積地に所在する塚本遺跡^(注9)があげられる。発掘調査が行われたが、はっきりとした遺構は確認されなかった。しかし、耕作時に完形に近い状態の土器が確認されている。木津川の沖積地に位置する遺構面は、氾濫によって流失したと考えられているが、今後の調査で遺構・遺物が検出される可能性は高いと言える。芝ヶ原12



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

^(注10)号墳は古墳時代中期の円墳として考えられてきたが、最近の調査で弥生時代の墳丘墓であることが確認された。しかし、出土した鏡と土器の年代差が指摘され、新たな問題提起もなされている。森山遺跡の最近の研究成果によれば、宇治市の羽戸山遺跡・八幡市の幣原遺跡と同じく高地性集落の性格づけがなされている。

古墳時代 城陽市内には、久津川古墳群に代表される数多くの古墳群が所在する。4世紀代には、芝山遺跡内の梅の子塚古墳群や西山古墳群^(注11)・尼塚古墳群^(注12)・上大谷古墳群^(注13)等のいわゆる、久津川古墳群が形成されはじめる。5世紀代に入ると、下大谷古墳群^(注14)・平川古墳群^(注15)・宮ノ平古墳群^(注16)・芝ヶ原古墳群^(注17)等が築造される。特に、全長178mの規模を有する久津川車塚古墳^(注18)や芭蕉塚古墳^(注19)等の大型前方後円墳の存在は、久津川古墳群を築造した豪族の勢力基盤の安定を意味している。6世紀代には久津川古墳群にも後期古墳が点在するものの、その拠点は約2km南方に位置する冑山古墳群^(注20)・長池古墳^(注21)周辺に移行する。換言すれば久津川古墳群の終末期である。

飛鳥時代・奈良時代 飛鳥時代の遺物としては、正道廃寺から出土した素弁蓮華文軒丸瓦^(注22)等があり、正道遺跡^(注23)・芝ヶ原遺跡^(注24)等で集落が成立する。また、奈良時代には、正道廃寺^(注25)・平川廃寺^(注26)・久世廃寺^(注27)・正道官衙遺跡^(注27)等が成立し、山城地域に条里制が行われる。3寺院が近接して造営されることは、当地が交通の要衝の地であることと大きく係わっている。

芝山遺跡が所在する城陽市は、いままで、多くの研究成果が発表されている。しかし、芝ヶ原12号墳の解釈等、新たに提起された問題もあり、今後の研究に期待される。

3. 調査の概要(第2・3図)

今回の調査で検出した遺構は、主にA地区に集中している。そのため、他の地区については、D地区の平坦面についてのみ記述することとした。各地区の概要は、次の通りである。A地区は、調査地の西端部の丘陵に位置する。丘陵の幅は100m以上を測り、長さは140mである。トレンチは、その丘陵の中央を縦断している。遺構は全面に広がっており、道路建設用のセンター杭を基準にして、10m毎に北からa～d区、西から5～18区に分け、更に各々をI～IV小区に分けて調査を行った。遺構面は20cmから40cm堆積した表土直下で検出した。主な遺構は、古墳・土塚墓・竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土塚・井戸等がある。時期的には古墳時代から平安時代までであるが、遺物としては弥生時代の石器がある。B地区は、標高50mで調査地内で最も高所に位置するが、全面が資材置場になっており、造成時に3m以上の削平を受けたため、遺構・遺物を検出することはできなかった。しかし、昭和52年に城陽市教育委員会^(注28)が行った調査地と同一平坦面であることや、立地条件から考えると何らかの施設が存在した可能性は高いと言える。C地区は、この平坦面の北斜面にあたり、地盤が軟弱であるため遺構は検出できなかった。一部において遺物包含層を確認したのみである。D地区は最東端で大河原川の旧河道を検出し、それに近接

する微高地で溝・柱穴等を確認した。旧河道の時期は、出土遺物がなく決定できない。

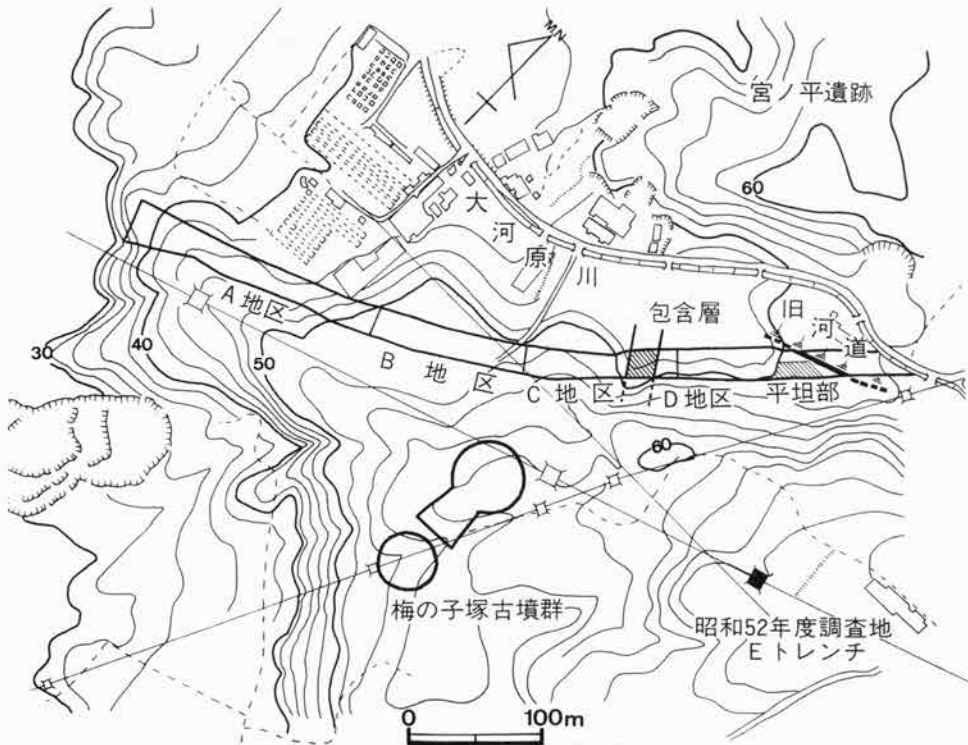
4. 検出遺構

(1) A地区(図版第1)

主な遺構は先述した通りであるが、古墳群については築造の順序を明らかにできることから、記述についてもそれに準拠した。なお、古墳の規模は、墳丘が削平され、築造当初の状態が不明なため、周溝の最深部で計測した。^(注29)

①古墳時代

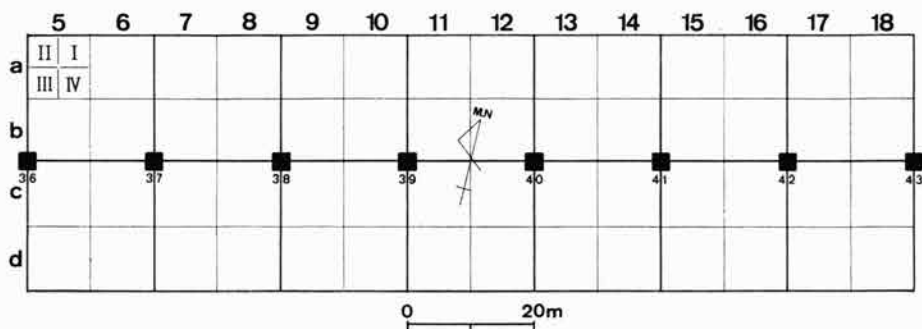
1号墳(第4・5・6図, 図版第2-1) 周溝の最深部で南北10m・東西10.4mを測る方形墳である。主軸線は北から西へ約30°振る。主体部は後世の削平を受け残存しない。後述する2・3号墳には主体部が残存することから、3基の中で最も墳丘が高かった可能性がある。周溝は、南西が「V」字形を呈し、幅は約2.4mを測る。また、北東は「U」字形を呈し、幅約1.3mを測る。周溝の埋土は、奈良時代の遺構が穿たれているため複雑であるが、基本的には築造直後に流入した濁赤褐色土(c層)が最下層に堆積し、中間層に暗茶褐色土(b層)・最上層に淡黒色土(a層)が堆積している。a・b層は、粘質土が主体を



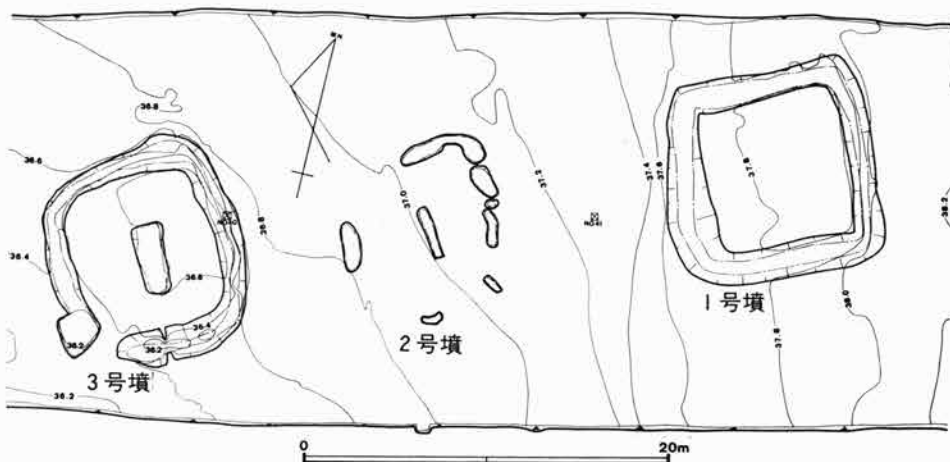
第2図 地区設定図および周辺地形図

占めており、比較的長い時間をかけて堆積したと考えられる。周溝からの出土遺物には、杯蓋・甕などの須恵器や鉄製品の斧(第45図、図版第11-7、同14-12)があり、いずれもb層から出土している。周溝東面のほぼ中央では、b・c層を切り込んで土坑(第6図)が掘り込まれている。土坑の規模は、長軸2.04m・短軸0.74mで、深さ0.24mを測る。土坑の埋土は、a層よりやや粘性を帯びている。坑内には、須恵器・甕(第45図3、図版第11-7)が散在しており、一括して投棄された状態で出土している。甕は、底部を欠いており、坑内に破片がないことから、埋納以前に故意に打ち欠いたと考えられる。古墳の周溝内に埋葬が行われることは、比較的多く見られ副次的な場合が多い。棺としては円筒埴輪・壺・甕等が頻繁に使用されるが、その多くは口縁部および底部の破片で蓋をしている。この土坑の場合は、堆積層であるa・b層を切り込んで掘られており、また、甕が散在していることから、埋葬後に一定の時間を置いた段階で、祭祀を行った土坑である可能性が高く、^(注30)土坑墓としては考えられない。

2号墳(第4図・図版第2-1) 1号墳と3号墳のほぼ中央で検出した古墳で、南北8.5m



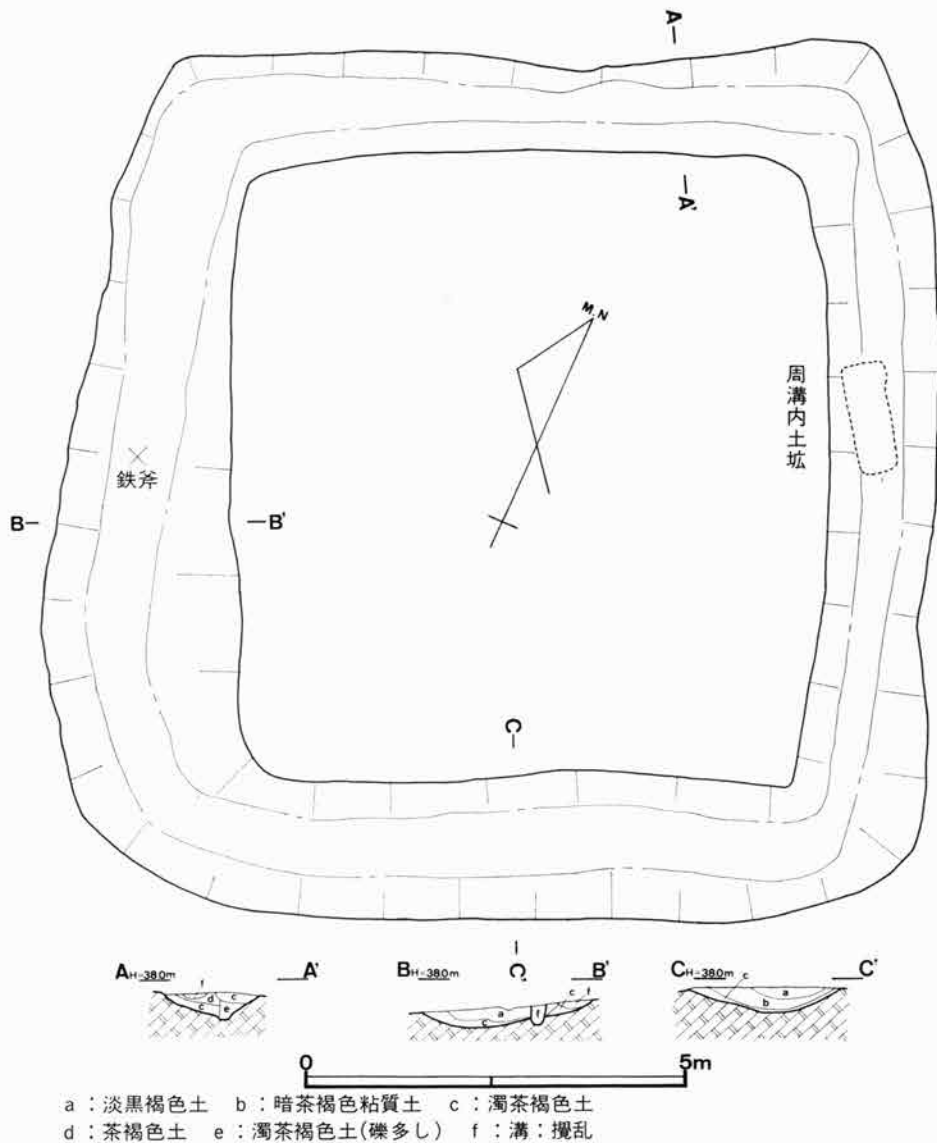
第3図 A地区、地区設定図



第4図 測量図(杭No.39~No.42間)

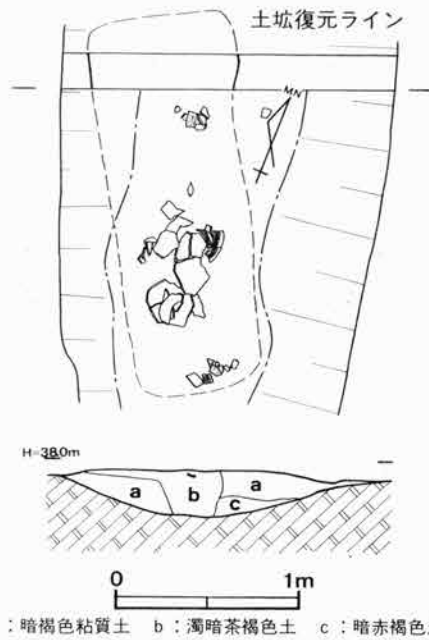
・東西8mの方形墳であり、主軸線は1・3号墳とほぼ同一である。主体部は、長軸2.8m・短軸0.7m・深さ0.3mの規模であるが、遺物は出土していない。周溝は、平均幅1m・深さ0.4mであるが、全周には巡っておらず、大半が分割されている。出土遺物はないが、1・3号墳と同時期であろう。

3号墳(第4・7～9図、図版第2・4-1～3) 南北11m・東西10mの方形墳で、主軸線は磁北から西へ30°振る。主体部の主軸線は、墳丘と同じで、長軸3.9m・短軸1.5m・深さ0.2mを測る。掘形の埋土は、濁赤褐色土(c層)であり、棺の埋設部では、下層に暗



第5図 1号墳実測図

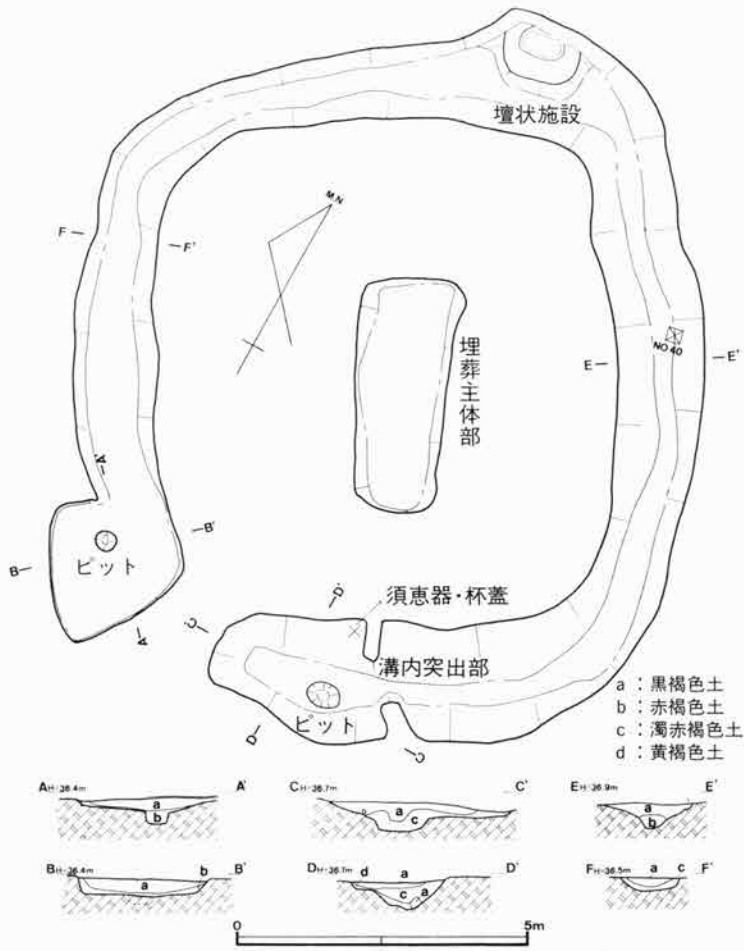
茶褐色土、上層に茶褐色土が堆積している。出土遺物は、蓋杯・有蓋高杯・壺等の須恵器であり、主体部の南端に集中している。一部、攪乱を受けているが、出土状況は埋葬時のままである(第46図)。棺の大きさは、復元値で3m×1mと推定でき、鉄釘の出土がないことから組み合わせの木棺と考えられる。周溝は、幅1.3~1.8m・深さ0.3~0.5mを測る。南方は溝が掘り残されており、陸橋状を呈している。この西側の溝端は、2.2m×2.08mの広さに掘り広げられており、中央に直径0.35mのピットを確認した。溝の縦断面から、周溝掘削と同時に穿たれたも



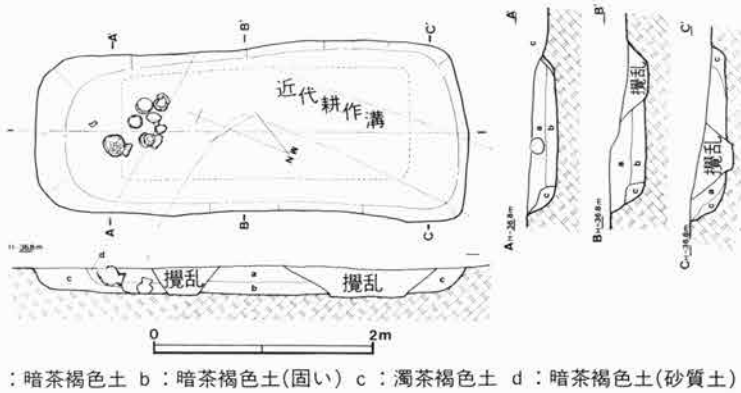
a : 暗褐色粘質土 b : 濁暗茶褐色土 c : 暗赤褐色土
第6図 1号墳周溝内土壇実測図

のである。一方、東端は溝幅が1.3mを測るが、端から2.8mの部分に溝内に突出するように掘り残された部分(溝内突出部)^(註31)があり、須恵器・杯蓋(第47図4)を検出している。全体の深さは0.4mであるが、溝内突出部から溝端までは0.7mと深く掘り込まれており、中央にピットが穿たれている。土層断面から何らかの柱が立っていた可能性が極めて高い。周溝の北方には、幅を2mに拡張し、周溝内外肩部に2.2m×1mの壇状施設を掘り残している。その中央には1m×0.5mの土壇を穿ち、蓋杯(第47図1~3)を埋納している。出土状況は、有蓋高杯の蓋が杯身とセットとなり、杯蓋のみを反転し据えている。埋土は、黒褐色土であり、溝の埋土と同じであることから、埋葬に係わる祭祀が終わった段階で埋納したと考えられる。

3号墳を周溝の形態および付随施設から考えた場合、埋葬主体部が完存することや陸橋状の施設があることから、低墳丘であると考えられる。また、周溝内の壇状施設には、須恵器の杯身・杯蓋が埋納されており、これらの要素を合わせると、弥生時代の方形周溝墓との類似性を指摘できる。年代的な側面から、直接的な系譜は引かないものの、それを素形とした伝統的な葬法として捉えなければならない一面をもっている。3号墳が築造された時期には、横穴式石室を主体部とする円墳が主流をなし、特に、盟主墳は、規模が大きくなる傾向があるが、この古墳のように規模・墳形等の点で相違点がある古墳については、築造技術についての検討が必要である。また、墳丘規模に表された社会的階級についても、



第7図 3号墳実測図



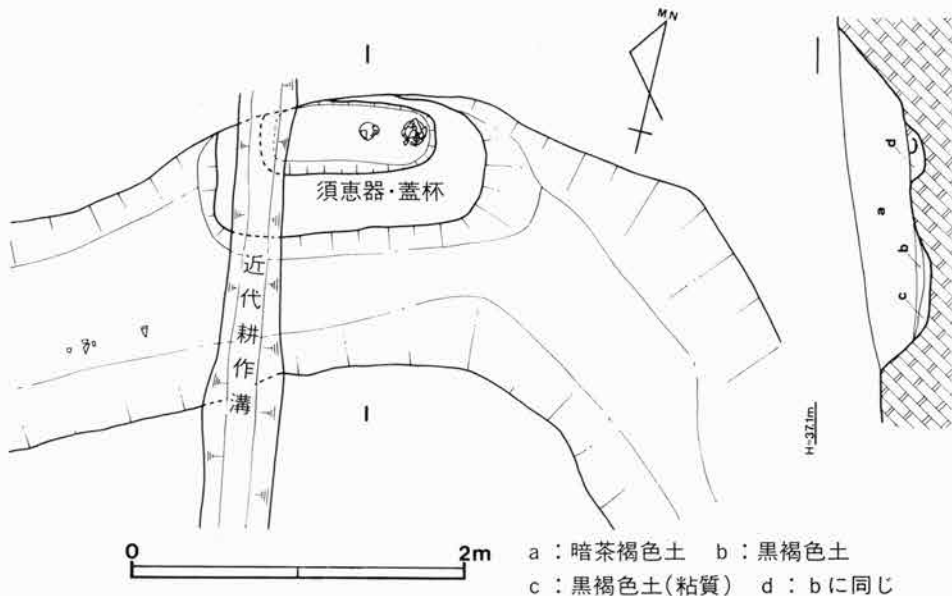
第8図 3号墳埋葬主体部実測図

円墳と混在することと併せて検討する必要がある。なお、陸橋状施設が位置する両端の溝は、構造的に大きな特徴があり、特に、西端の掘り広げた部分は、何らかの木製品を埋置した痕跡である可能性がある。また、その部分で検出したピットは、間隔が約4.8mを測る。ここではピット以外は確認していないが、陸橋状施設を挟むように穿たれていることから、直径30cm前後の木柱を立てていた可能性が高い。

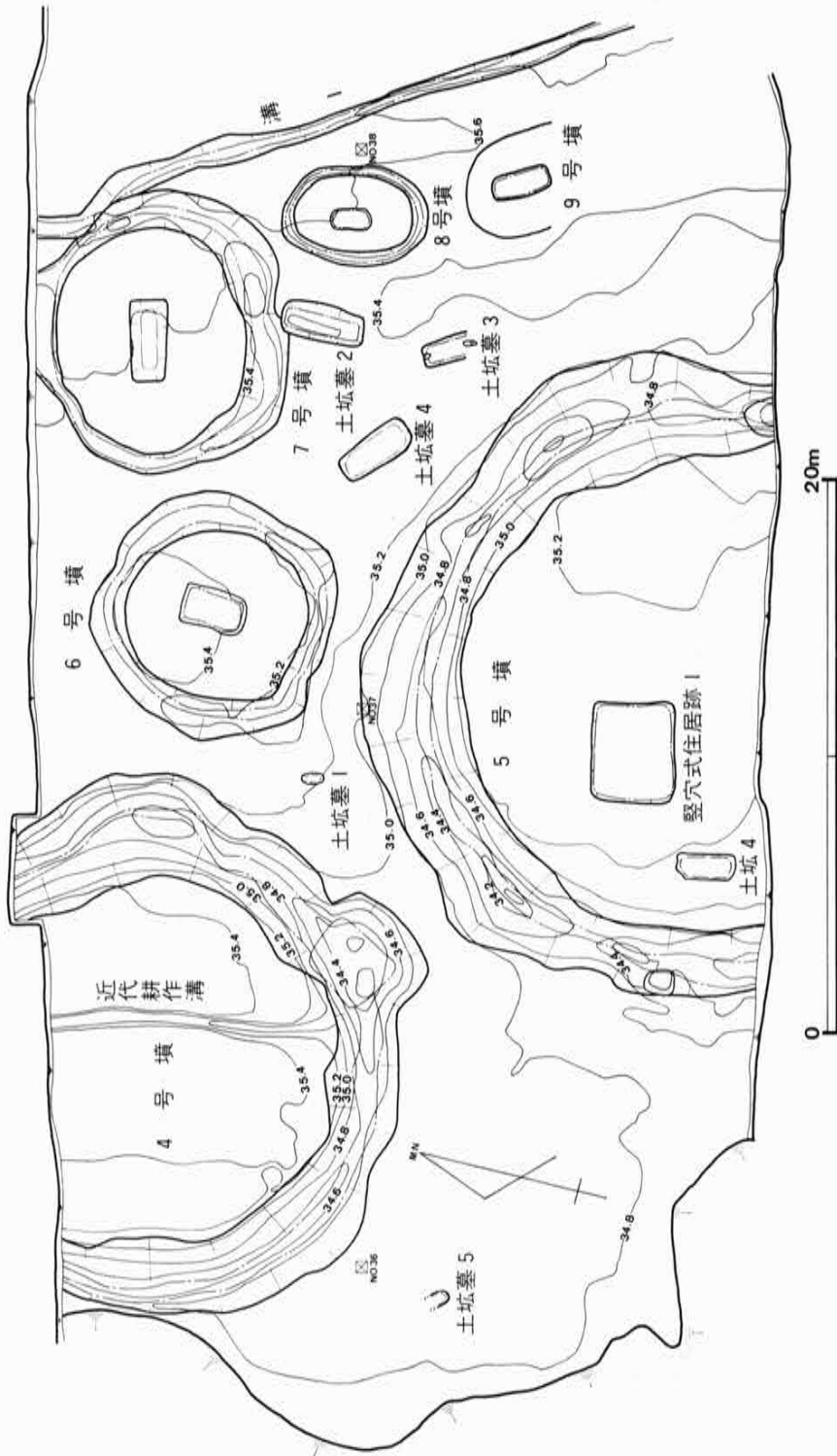
4号墳～9号墳・土塚墓群は尾根の先端に築造された墓群であり、後述する溝1以西に位置している。以下、各遺構について記述する(第10図, 図版第3)。

4号墳(第11図, 図版第3) 古墳の北側が調査地外になるため、正確な規模・構造については不明であるが、直径17.4mを測る円墳である。墳丘は後世の削平を受け残存しない。また、埋葬主体部は、周辺に石材等が確認されていないため木棺直葬である可能性が高い。周溝の幅は、最大で3.7m・深さが0.6m前後を測る。周溝南東部の外側肩部は、幅3.6m・長さ4.8mに掘り広げた部分があるが、特に、遺物が集中することもなく、性格については不明である。溝は、基本的には2層にわけられ、下層から甕・横瓶・杯蓋等の須恵器(第48図)が出土している。上層には奈良時代の遺物が多量に入っており、削平された時期を示すものである。また、奈良時代の遺物に混じって古墳時代の鉄鏃・鉄鎌等が入っている。これらは、埋葬主体部の副葬品であったものが、墳丘を削平し溝を埋める時に混入したものと^(註32)考えられる。

5号墳(第12図, 図版第3) 古墳の南半部分が調査地外になるため、4号墳同様、正確



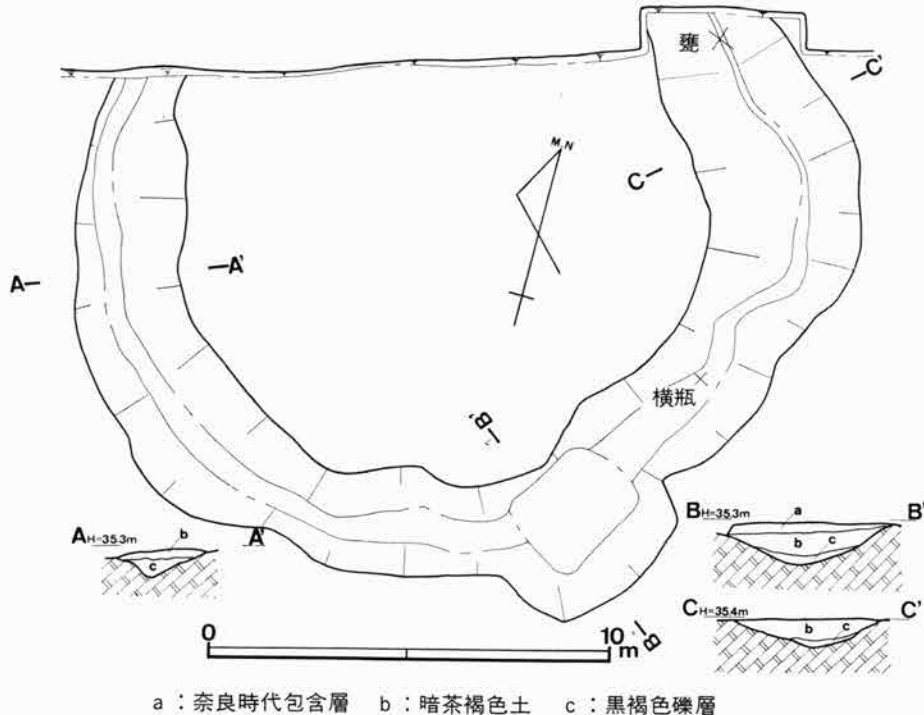
第9図 3号墳溝内墳状施設実測図



第10図 測量図 (杭 No.36~No.38 間)

な規模等については不明である。検出した部分で測ると、直径20m前後の円墳になる。墳丘は、後世の削平により残存しないが、西側に奈良時代の整地層が確認でき、層内に副葬品である鉄製品が包含されている状況や、周溝内の土量等から考えて、4・5号墳ともに高塚であった可能性が高い。周溝は、幅3.8m・深さ0.7mを測り、2層に分層できる。部分的に深く掘り込まれたところもある。周溝の西側底には、一辺約0.9mの土壇がある。埋土は、周溝下層と同じであり、同時に埋まったと考えられる。性格は不明である。墳丘は、削平されてはいるが、墳丘側肩部で2か所に焼土を確認している。焼土は、古墳の中心を基点に測角すれば、約90°を測り、4か所に存在する可能性が高い。築造時の祭祀に(注33)関係するものであろう。埋葬主体部については木棺直葬であったと考えてもよい。なお、5号墳の中央では、布留式併行の竪穴式住居跡を検出しており、墓地築造以前は住居域であったことがわかる。

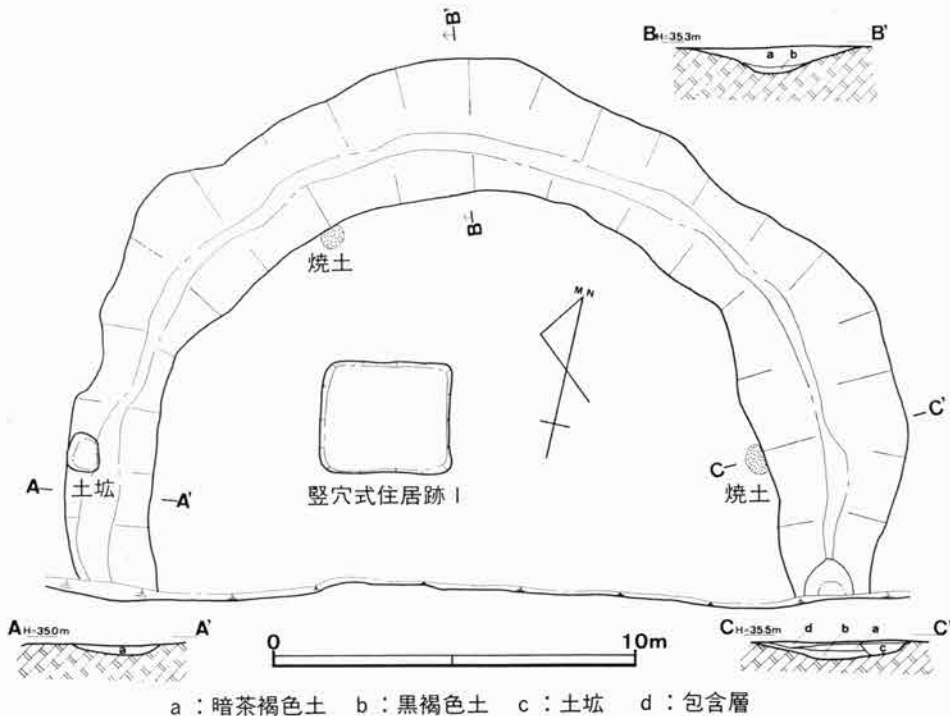
6号墳(第13・14図、図版第5-1) 4号墳の東側に隣接する直径7.4mの円墳である。埋葬主体部の規模は、長軸2.3m・短軸1.5mを測り、ほぼ完存している。主軸線は、磁北と一致する。主体部の掘形の埋土は、濁赤褐色土(b層)で、比較的厚く堆積している。遺物は、北側で須恵器・壺(第50図2)が埋葬時の状態で出土し、南側では須恵器・蓋杯(同3・4)が口縁部を床面に置いた状態で出土している。壺は、埋葬時の状態を保っていること



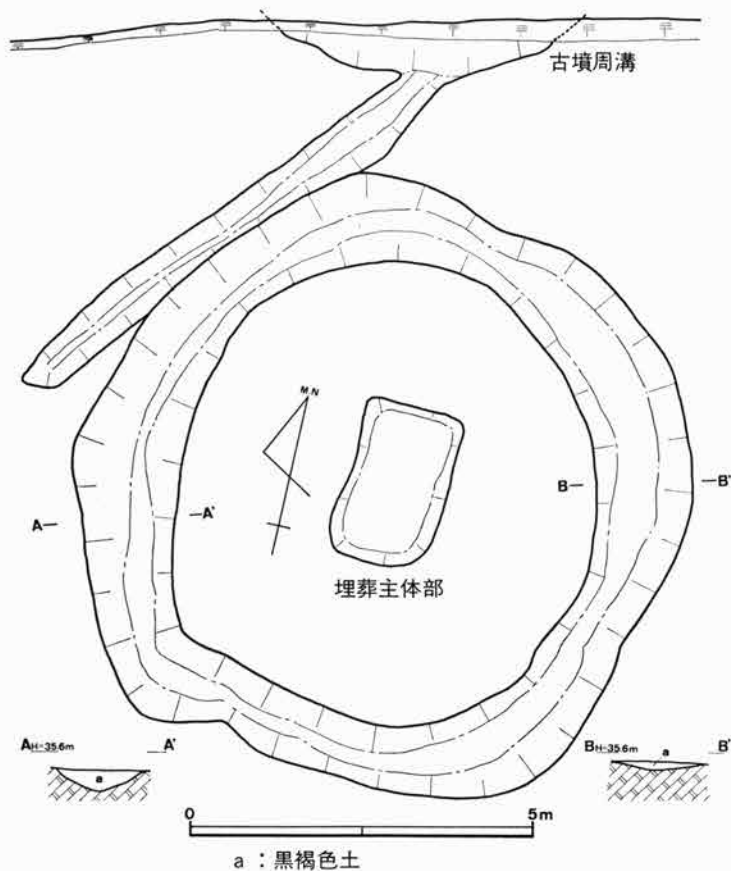
第11図 4号墳実測図

から、棺外遺物であったと考えられるが、蓋杯は、出土状態から土器枕の可能性も考えておかなければならない。^(註34) 周溝は、平均幅が0.7m・深さ0.3mを測る。上部が削平されているが、築造当初とあまり変わっていないと考えられる。埋土は、黒褐色土が主体である。6号墳は、埋葬主体部が完存することなどから、1～3号墳と同じく低墳丘であった可能性が高い。なお、この古墳の北側のトレンチ端で、ほぼ同じカーブを描く溝をごくわずかに検出しており、隣接するところに、同規模の古墳が存在することをうかがわせている。また、その溝と6号墳を直線的に結ぶ溝が穿たれているが、性格等については不明である。

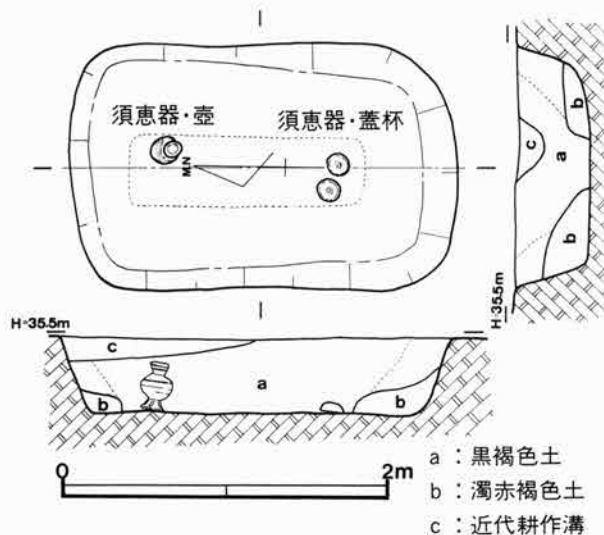
7号墳(第15・16図, 図版第3) 飛鳥時代の溝1と6号墳との間に位置する古墳で、南北8.1m・東西9.3mを測る円墳である。埋葬主体部の主軸線は、北から東へ77°を振り、平面プランは長方形である。規模は、東西2.9m・南北1.4m・深さ0.5mを測る。主体部の掘形の埋土は、濁赤褐色土で、棺埋納部は、下層に黒褐色土、上層に茶褐色土が確認できる。特に、下層において白色粘土を「L」字形および直線的に確認していることから、棺の周囲に8cmの厚さで貼り付けたと考えられる。この白色粘土の位置を基準に棺の規模を復元すると、長軸2.2m・短軸0.66mとなる。下層からは横倒しの状態で須恵器・広口壺(第50図1)、西側で鉄製品・刀子(第50図10)を検出している。出土状態から広口壺は



第12図 5号墳実測図



第13図 6号墳実測図



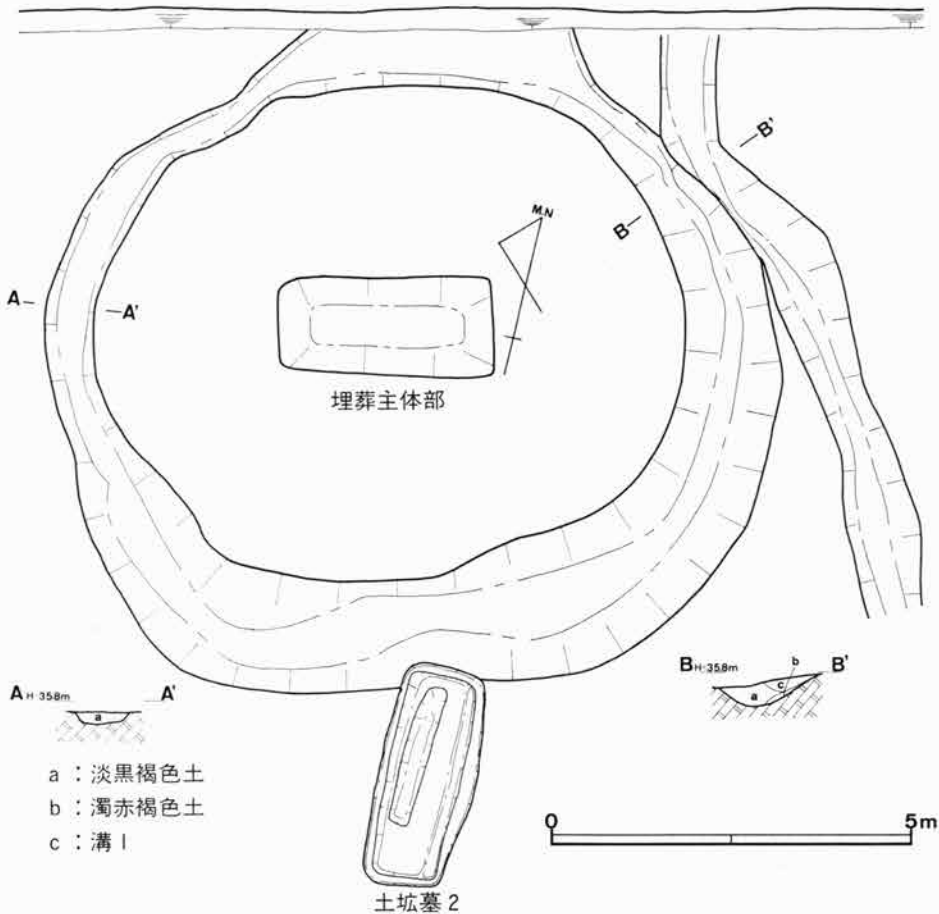
第14図 6号墳埋葬主体部実測図

棺外に副葬され、刀子は棺上ないし直接装着されていた可能性が高い。周溝は、0.6~1.8mの幅で掘られており、深さは0.3m前後である。周溝内から遺物は出土していない。周溝の北東部は、飛鳥時代の溝1によって切られているが、極端には変形しておらず、溝1を掘り込む時点までは、周溝は、墓域を画する機能をもっていたと考えられる。なお、周溝の南側では、溝の一部を切り込んで土坑墓2が位置している。

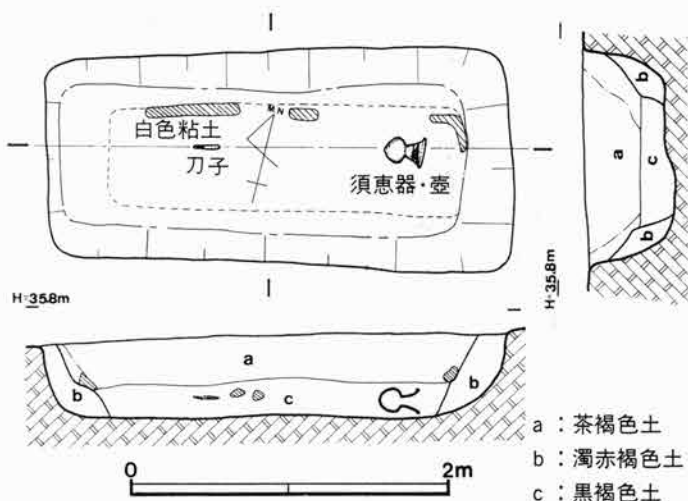
8号墳(第17・18図, 図版第5-2) 7号墳の南側で検出した古墳で、南北5m・東西3.2mを測る楕円形の小円墳である。埋葬主体部は、北から西へ15°振る主軸線をもち、長軸1.5m・短軸0.84mの隅丸長方形を呈してい

る。墓坑の埋土は、深さ16cm程度のため、不明な点も多いが、上層に暗茶褐色土(a層)、下層に茶褐色土(b層)が堆積しており、一部で掘形の茶褐色粘質土(c層)を検出している。墓坑の中央部底面は、比較的平らに削られており、それを根拠に棺の大きさを復元すると、長軸1m・短軸0.5mの規模になる。遺物(第50図5~7)は、南端で蓋杯・短頸壺の須恵器が出土している。短頸壺は、掘形の埋土であるc層上面に据えられた状態で出土しており、棺外遺物であろう。また、杯蓋は、b層中で検出しており、棺上遺物であった可能性が高い。周溝は、幅0.5m・深さ0.3mを測る。墳丘は、低墳丘ではあるが、主体部の残存状況から、ある程度の高さをもっていたと考えられる。棺の復元値から考えると、小児用の墳墓であった可能性が高い。

9号墳(第19図、図版第5-3) 周溝は、残存状態が悪く、部分的に溝底を確認したにすぎず、規模等については不明な点も多い。おそらく、8号墳と同じく楕円形であった可能



第15図 7号墳・土塚墓2実測図



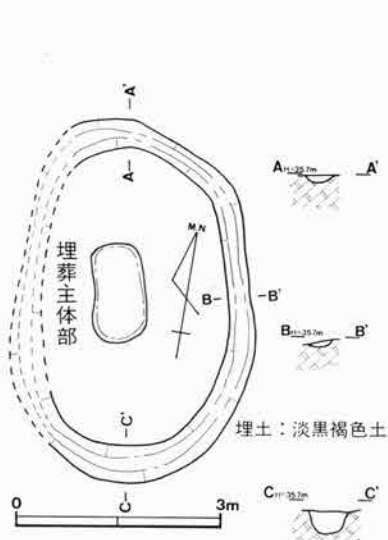
第16図 7号墳埋葬主体部実測図

性が高い。埋葬主体部は、北から西へ28°振り、長軸4.4m・短軸1.6mの隅丸長方形である。墓坑の埋土は、棺の埋納部分で暗茶褐色土(a層)のみを検出した。副葬品(第50図8・9)は、北側に土師器・小型壺、南側で須恵器・短頸壺を各々据えられた状態で検出し

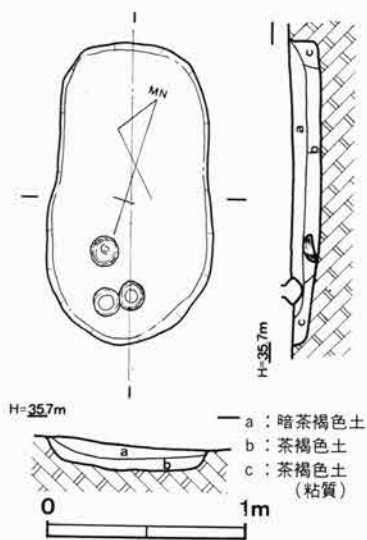
- a : 茶褐色土
- b : 濁赤褐色土
- c : 黒褐色土

ている。土器は、掘形の埋土上で検出している。土師器の直下では、直径48cm・深さ24cmの円形ピットを、須恵器の直下では、主体部の主軸線に直交した長軸64cm・短軸20cm・深さ16cmを測る楕円形ピットを確認した。ピットの埋土は、濁赤褐色土であり、基本的には掘形の埋土と同じである。小口板の可能性はピットの形態とピット直上に土器が副葬されていることから考えられず、用途については不明な点が多い。少なくとも埋葬行為以前に掘られたピットであることから、埋葬に係わる祭祀との関連で考えるのが妥当である。

土坟墓1(第20図, 図版第4-4) 4・5・6号墳の中央で検出したもので、合口甕棺墓



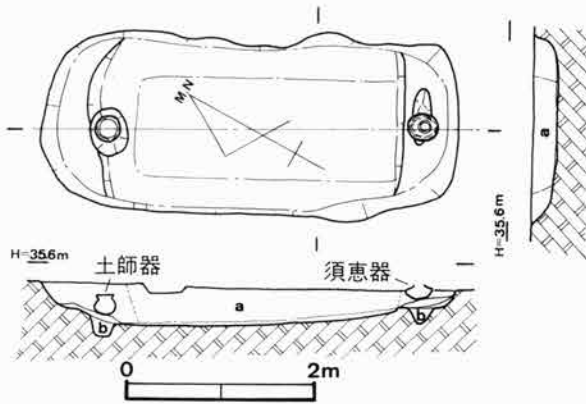
第17図 8号墳実測図



第18図 8号墳埋葬主体部実測図

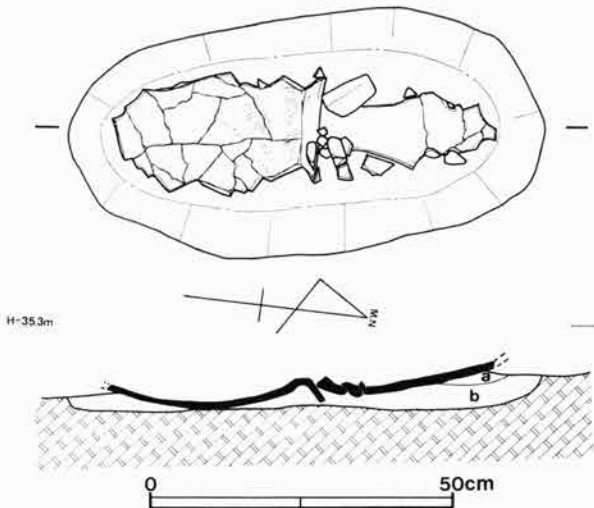
である。墓坑の主軸線は、北から西へ 8° 振る。長軸0.79m・短軸0.4mを測り、楕円形を呈している。埋土は、甕棺の安定をよくする目的で最下層に暗茶褐色粘質土を厚さ4cm塗り込んでいる。土師器・甕(第51図)は、同形の甕を口縁部で合わせているが、北側の甕は、口縁部を打ち欠き、南側の頸部内面に破面を当てている。残存率は悪い。^(注35)

土塚墓2(第21図) 7号墳の周溝の一部を切って掘り込まれており、墓坑の主軸線は、磁北とはほぼ一致する。墓坑は、南北3.14m・東西1.3mの規模で、底面には、北西部分に長軸2.18m・短軸0.6m・深さ0.22mの掘り込みがあり、その埋土は、赤褐色砂利土(d層)で、排水の機能があったものと解釈できる。墓坑の埋土は、黒褐色土層が主体を占める。



a : 暗茶褐色土 b : 濁赤褐色土

第19図 9号墳埋葬主体部実測図



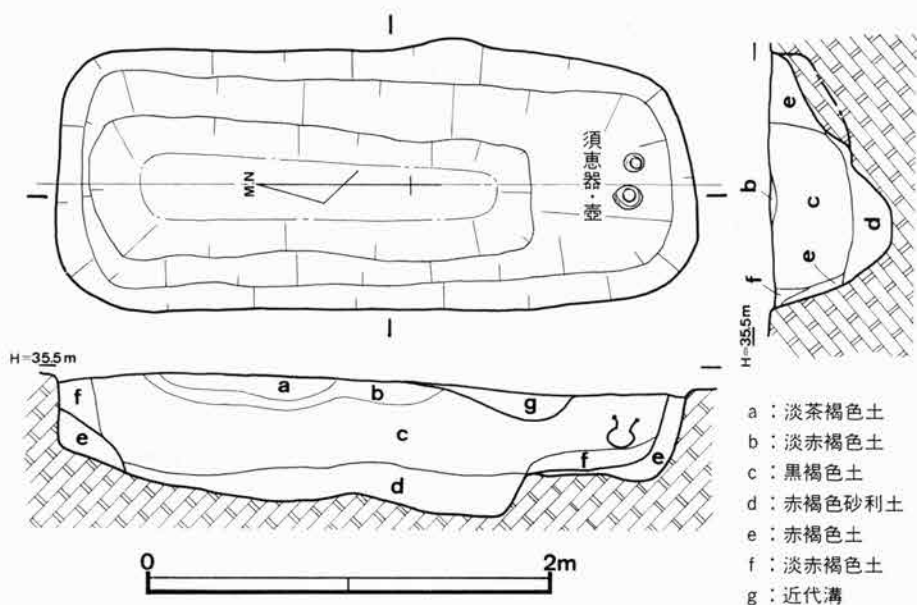
a : 暗茶褐色土 b : 暗茶褐色粘質土

第20図 土塚墓1(合口甕棺墓)実測図

副葬品は、南側で須恵器・壺(第52図1・2)を2点、据えられた状態で検出した。

土塚墓3(第22図) 墓坑の主軸線は、北から西へ 24° 振り、南東部が近代耕作溝で攪乱されているが、現存長は、長軸1.6m・短軸0.86mを測る隅丸長方形の平面プランを有している。墓坑の埋土は、暗茶褐色土(b層)・濁赤褐色土(a層)である。墓坑の北西部底面には、長径24cm・短径12cm・深さ14cmのピットが掘り込まれている。これは、9号墳の埋葬主体部でも検出している。性格は不明である。なお、主体部からの出土遺物は確認していない。

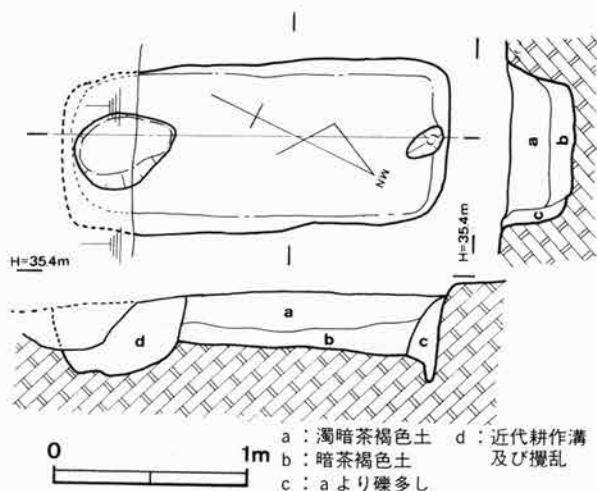
土塚墓4(第23図) 墓坑の主軸線は北から西へ 45° 振る。規模は、長軸2.64m・短軸1mを測り、隅丸長方形を呈している。墓坑の埋土は、暗茶褐



第21図 土 塚 墓 2 実 測 図

色土(b層)で、掘形部には濁赤褐色土(a層)が確認できる。底面中央には、少し掘り下げられた部分があるが、埋土はb層であるため、土塚墓2のように排水を目的としたものではない。出土遺物は、杯身・短頸壺の須恵器(第52図3・4)である。いずれもb層の中間位置で検出しており、棺上遺物であったと考えられる。底面の状態から、棺の大きさは、長軸1.84m・短軸0.84mと推定でき、鉄釘等を検出していないことから、組み合わせの木棺である可能性が高い。

土塚墓5(第24図・図版第5-4)尾根の先端で検出したものである。周辺は、4・5号墳を削平した土で整地しているため、墓塚の規模等については不明な点が多い。主軸線は、北から西へ38°振り、規模は短軸0.44mを測る。出土遺物は、小型壺・杯蓋の須恵器2点(第52図5・6)である。いずれも、底面に据えられた状態で出土していることから、



第22図 土 塚 墓 3 実 測 図

棺外遺物であろう。

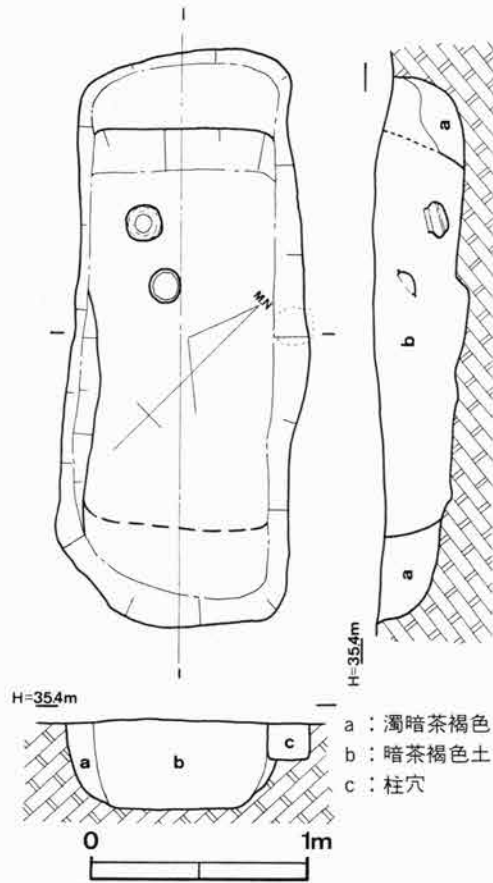
以上が検出した古墳・土塚墓の概要であるが、1～3号墳は低墳丘の方形墳、4・5号墳は高塚の円形墳、6・7号墳は低墳丘の円形墳、8・9号墳は、低墳丘の楕円形の小円墳である。土塚墓についても、主軸線は各々異なるものの鉄釘を検出していないことから組み合わせの木棺である可能性が高い。副葬品の種類では、須恵器が圧倒的に多く、器種としては壺類の多いことが指摘できる。これらの古墳・土塚墓は、隣接しているところに築造されており、いわゆる、群集墳として捉えることができる資料である。調査地は、幅が20mしかなく、周辺に同規模の古墳が十数基以上存在することは確実である。

竪穴式住居跡1(第25図・図版第6)

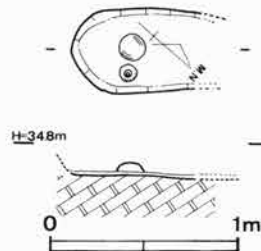
5号墳の北西部分で検出した住居跡で

ある。主軸線は北から東へ82°を振る。規模は、東西3.68m・南北2.94mを測り、隅丸方形を呈する平面プランである。床面には、2か所で赤褐色に焼けた焼土を検出した。周壁溝は、住居跡の東面が近代耕作溝で攪乱を受けているが、幅18cm・深さ16cmで四面に沿って掘られている。住居跡の埋土は、上層に暗茶褐色土(炭混入)が堆積し、下層では淡褐色粘土(b層)を全面で確認している。遺物が出土した面は、a層の中間層とb層直上の面で、a層からは壺・甕・高杯・小型丸底土器等の土師器および砥石が出土し、土器が集中する部分に限って炭が入っている。b層直上からは、壺・甕・高杯等の土師器が出土し、住居跡全面にばらつきが見られる。周壁溝の埋土は、黒色土を主体とし、少なくとも2層に分層できる。

この竪穴式住居跡の場合、層位的にはa・b層にわかれ、遺物の出土する面も確実に2面にわかれていることから、



第23図 土塚墓4実測図



第24図 土塚墓5実測図

b層に一括して包含されていた遺物群は竪穴式住居跡の造営当初の年代を表し、a層の遺物群は、住居跡の建て替え等に伴う年代を表している可能性がある。単純に遺物の型式だけを考えると、a層(第Ⅱ次床面)・b層(第Ⅰ次床面)で若干ではあるが型式差がある。床面には柱穴はなく、礎板で柱を受けていたと考えられる。また、焼土は確認しているものの、住居跡内にはカマドを検出していない。入口については、不明な点も多いが、北西部では炭層を検出しており、礫・砂利を検出した南東部である可能性が高い。同時期の住居跡は、今回の調査地では他にないため、群構成等はわからないが、一基で存在することも考えにくく、調査地以南に存在する可能性が高いといえる。時期的には布留式併行である。

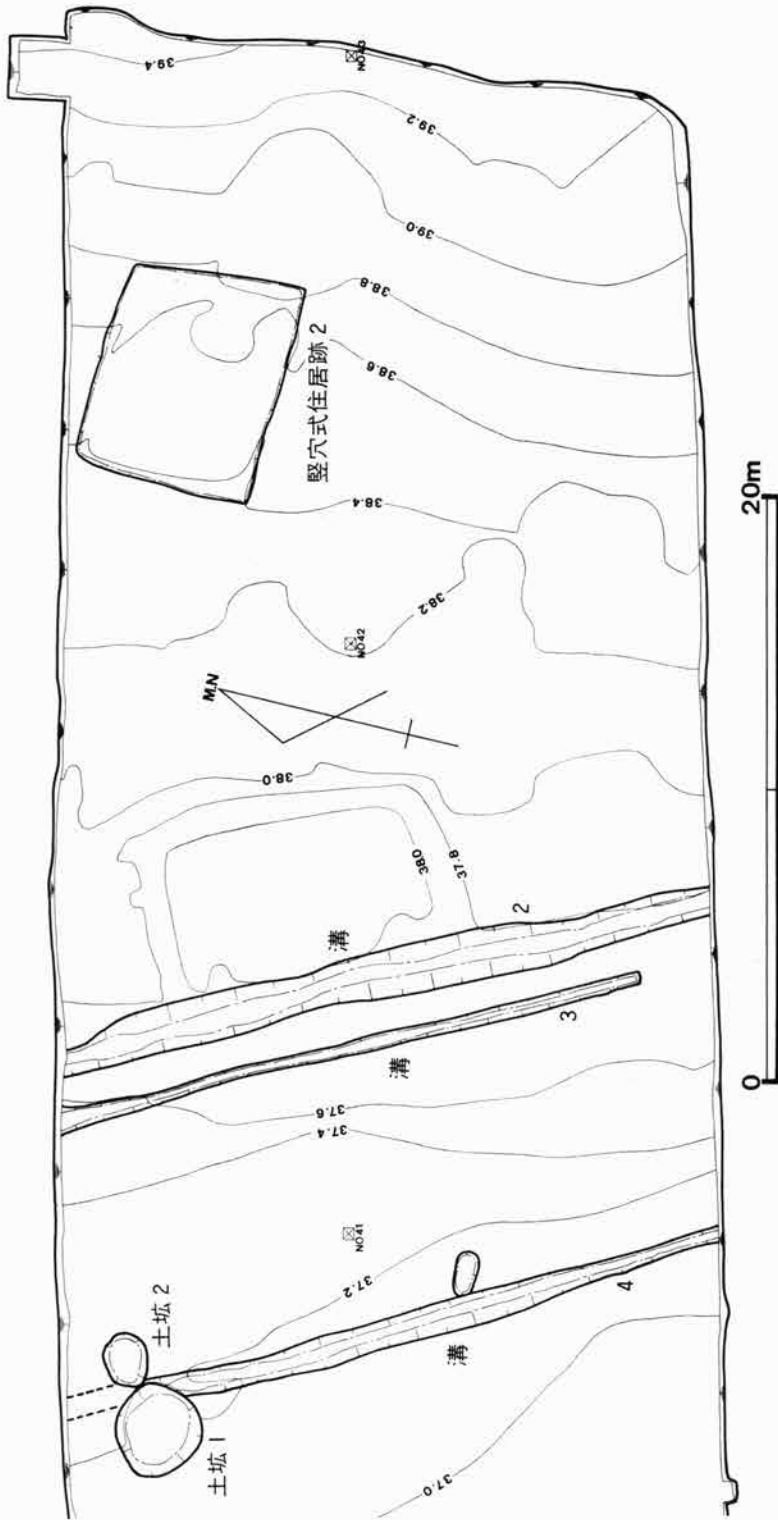
竪穴式住居跡2(第26・27図) 主軸線は、ほぼ磁北と一致し、南北6.16m・東西7.2mの方形プランを呈する住居跡である。床面には柱穴はなく、礎板等で柱を受けていたと考えられる。カマドは、北面中央に位置し、カマドの中心部に一辺16cmの柱状礫の支柱を立てている。炭層は、カマドの周辺で確認しており、炭層の中に須恵器・杯身片、土師器・甕の破片を多く確認している。周壁溝は確認していない。

溝2・3・4(第26図) 3条とも北から西へ28°振るもので、溝2は幅1.6m・深さ0.5

m、溝3は幅0.5m・深さ0.2m、溝4は幅1.1m・深さ0.4mを各々測る。溝の最深部で測ると、溝2と溝3の間隔は2.3m、溝2と溝4は12mを測る。特に、溝2は、上層が暗茶褐色土・下層が淡黒褐色粘質土であり、下層は、比較的長い時間をかけて堆積したと考えられるが、上層は、短時間で堆積した状況を示す。下層から須恵器・杯身が出土している。3条の溝以西では、時期を設定できない土坑を30



第25図 竪穴式住居跡1実測図(図中の数字は第53・54図と一致する)

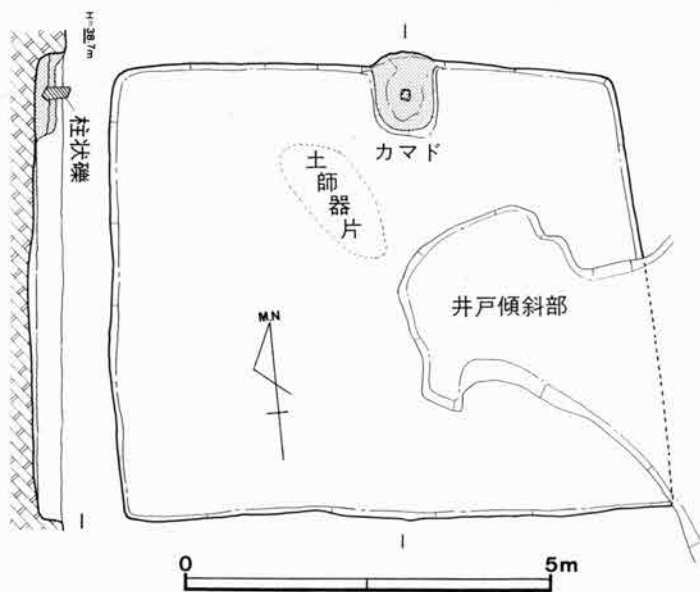


第26図 測量図 (杭 No.40~No.43 間)

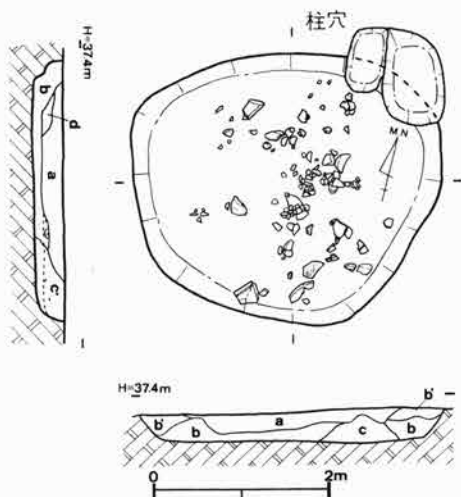
基以上確認しており、仮に、これを土塚墓と考えた場合、古墳時代の竪穴式住居跡2に代表される群とこれらの土塚墓を区画するために掘られた溝群であるとも考えられる。なお、年代についての問題があるが、道に伴う両側溝と仮定した場合、従来から栗隈越の推定地であり、また、

溝の位置が推定地と一致することから、その可能性についても消極的ではあるが指摘しておきたい。
(注36)

土塚1(第26・28図, 図版第8-1) 長径3.48m・短径3.12m・深さ0.3mを測る円形土塚である。肩部は、緩やかに傾斜し、底面は平らである。最下層である暗茶褐色土(c・d層)には、多量に炭を含んでおり、層中から平瓶・杯身等の須恵器や移動式カマド・鍋等の土師器・鉄滓が出土している。隣接する土塚2からは、須恵器・土師器等が出土している。土塚1は、移動式カマドが出土しており、また、炭が全面に広がっていることから考えると、確実に煮炊きを目的にしたと考えられるが、時期的な側面から共同炊飯とは考えにくく、移動式カマドを使用した祭祀が行われた可能性がある。なお、土塚1は竪穴式住居跡2・溝2~4 とほぼ同時期であり、土塚墓群が成立した時期とも一致することから、埋葬に係わる祭祀との関連で考えることも可能であろう。

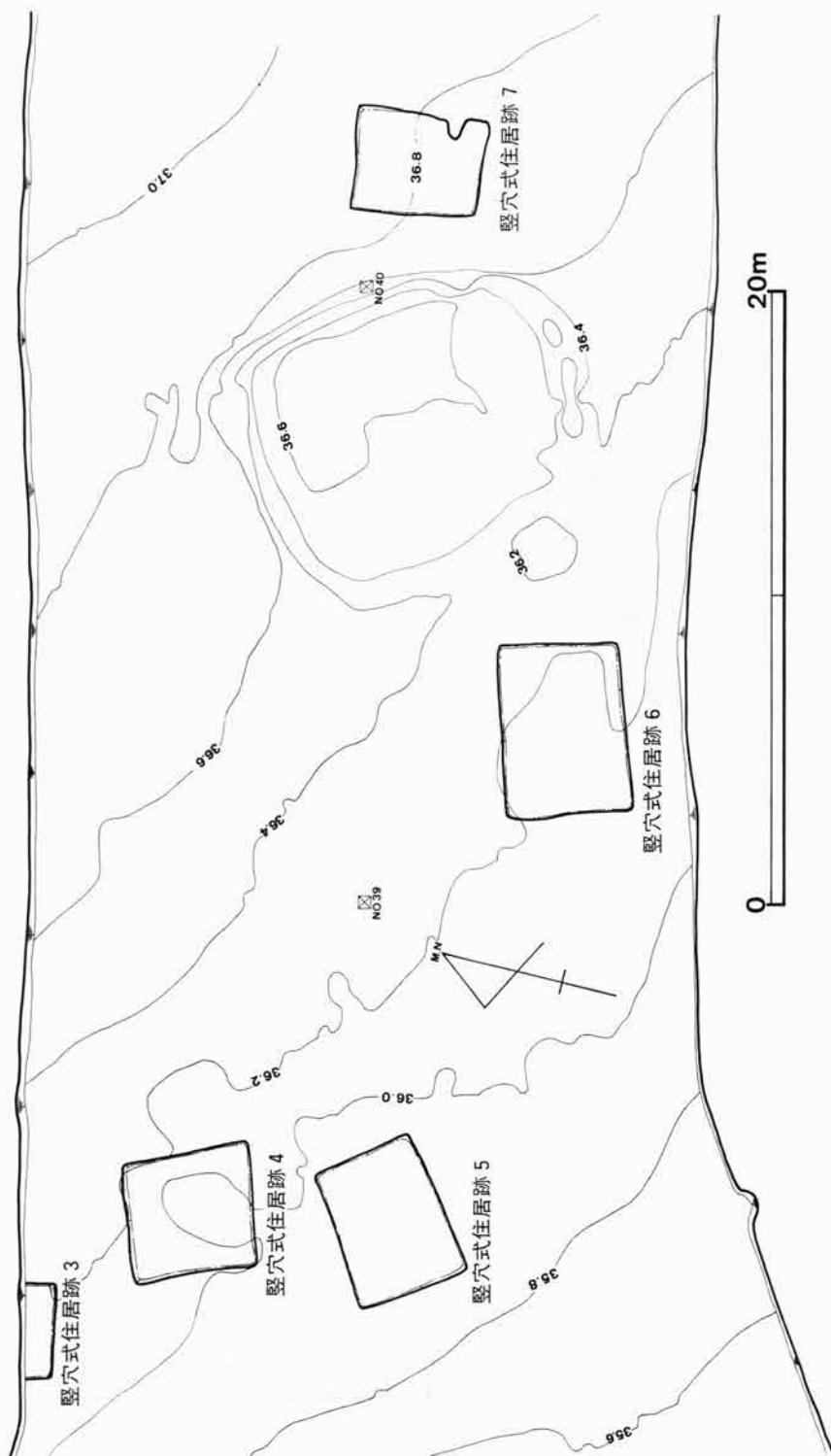


第27図 竪穴式住居跡2 実測図



a: 淡茶褐色粘質土 b: 淡茶褐色砂質土(炭含む)
c: 暗茶褐色土(炭多く含む) d: 淡茶褐色土

第28図 土塚1 実測図



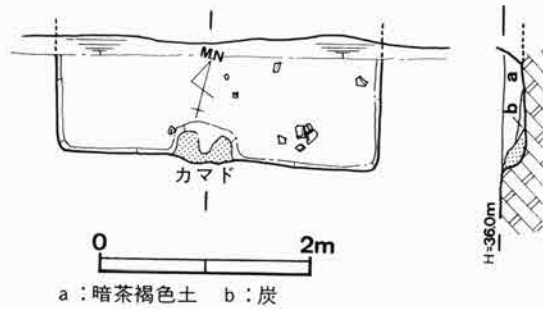
第29圖 測量圖 (杭 No.38~No.41 間)

②飛鳥時代

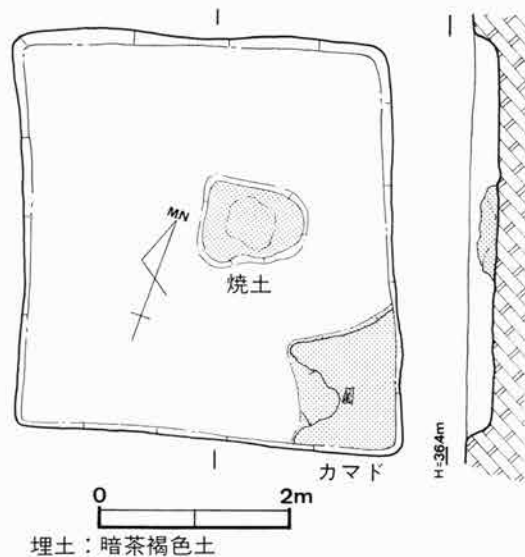
竪穴式住居跡3(第29・30図) トレンチ端で部分的に確認したにすぎず、全容はわからないが、東西3mを測る住居跡で、主軸線は北から西へ14°振っている。南面中央にカマドをもち、カマド周辺では、炭に混じって土師器・須恵器(第57図1・2)が出土している。周壁溝はなく、また、検出した床面では、柱穴は確認していない。おそらく、礎板等で柱を受けたと考えられる。

竪穴式住居跡4(第29・31図) 主軸線が北から西へ19°振り、南北2m・東西1.9mの長方形の平面プランを有している。カマドは、南東隅に位置し、周辺には焼土が広がっている。遺構検出面から床面までは、15cmを測り、埋土は一層である。床面には、一部に褐色の粘土を敷いた部分があり、床面凹凸を粘土により整地したものと考えられる。住居跡中央には、長径42cm・短径36cmの楕円形炉跡が確認できた。また、炉の中央には、直径24cm・深さ9cmの円形に掘り込まれた部分がある。出土した遺物は、ごくわずかではあるが、土師器・甕がカマド上面から出土している。床面には柱穴がなく、また、周壁溝はめぐっていない。

竪穴式住居跡5(第29・32図、図版第7-2) 主軸線は、北から東へ56°振り、長軸4.8m・短軸3.6mの規模を測る住居跡である。遺構検出面から床面までは24cmを測る。カマドは、北東面のほぼ中央に付けられており、周辺には焼土・炭が広がっている。床面は、凹凸が目立ち、整地するために赤褐色土を張り付けている。床面からは、土師器・須恵器片等(第57図3~8)が出土している。周壁溝は、南側隅を中心に北東面に幅34cm・深さ12cm、南西面には、幅46cm・深さ14cmだけ掘られている。



第30図 竪穴式住居跡3 実測図



第31図 竪穴式住居跡4 実測図

る。溝内から須恵器・杯蓋が出土している。遺構検出面から、奈良時代の柱穴が掘り込まれ、床面下20cmにまでおよんでいる。しかし、床面では、住居跡に伴う柱穴は確認していない。出入口については、周壁溝とカマドの関連から北西側に位置したと考えられる。

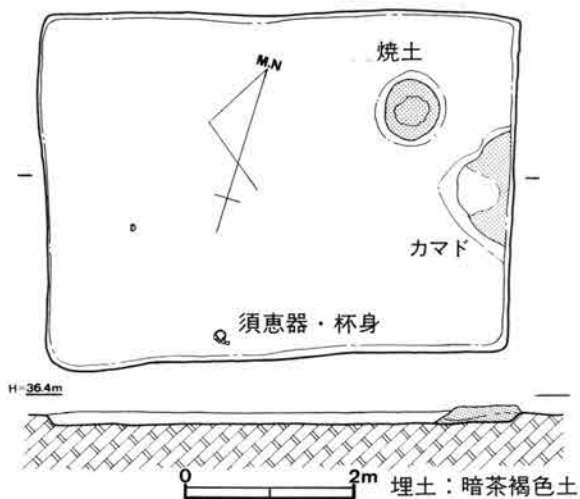
竪穴式住居跡6(第29・33図) 主軸線は、北から東へ73°振り、長軸5.5m・短軸4.8mを測る。平面プランは長方形を呈する住居跡である。カマドは、東面中央に設けられており、カマド周辺には、柱状礫が2個床面に据えられている。床面には、柱穴はないが、部分的に凹凸を確認している。また、床面直上では、須恵器・杯身(第57図9)1点を検出したにすぎない。周壁溝はめぐらない。カマドの北側には、直径64cmの炉跡があり、その中央部は直径40cm掘り込まれている。

竪穴式住居跡7(第29・34図)

住居跡群の中で、最も東側に位置する住居跡である。主軸線は北から西へ7°振る。南北は、4.2m・東西は3.4mを測る規模である。壁高は、5cmしか残存しておらず、周壁溝は巡っていない。カマドは、南東隅に設置されているが、カマドの北壁に接する部分は、幅44cm・壁からの長さは68cm程度、掘り残しており、周辺には炭層が広がっている。床面では、柱穴は検出していないが、住居跡のほぼ中央には直径20cmの平坦な面をもつ円礫が据えられており、礫の周辺40cmの範囲には砂利が敷き詰められている。その性格については、何らかの作業場に関係があると考えられるが、上部構造との関連を考えた場合、円礫で柱を受けていた可能性がある。出入口については、北西

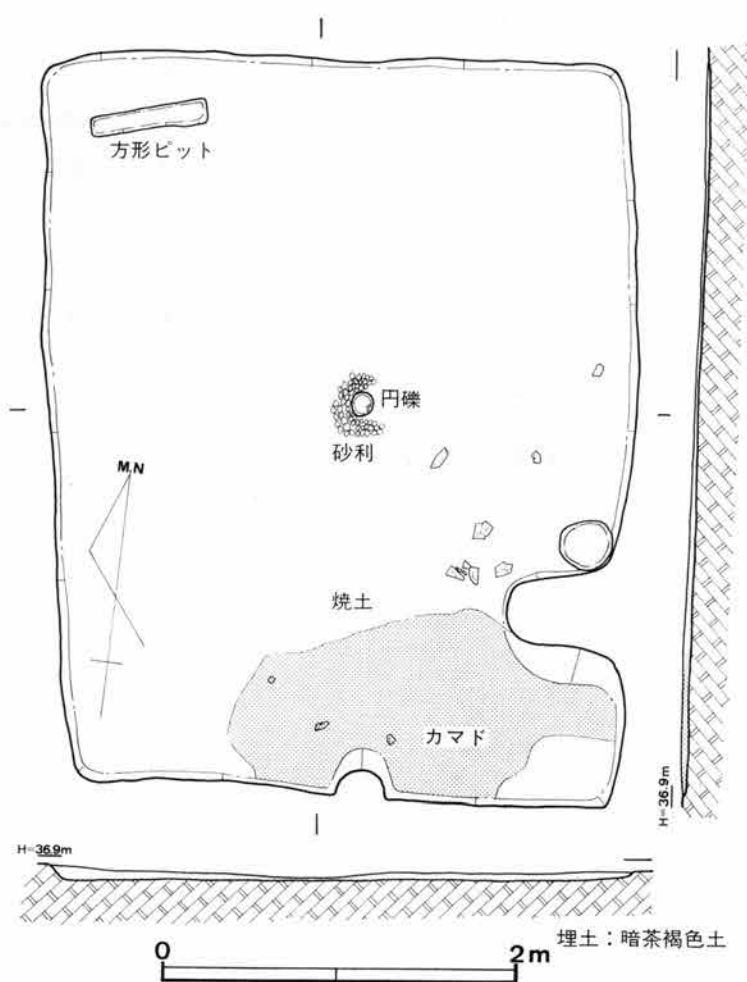


第32図 竪穴式住居跡5実測図



第33図 竪穴式住居跡6実測図

隅部に長さ60cm・幅12cmの方形の掘り込みがあり、また、その南側が固くしまっていること等から、この部分に想定できる。他の住居跡に比べて、カマドの設定の方法や中央部の礫・方形の掘り込み等がある点で違いが見られる。京都府下においては綾部市西町北大坪遺跡検出のSB8501に類似例がある。^(注37) 構造的な面で、今後、多くの問題を残していると言える。



第34図 竪穴式住居跡7実測図

以上が、飛鳥時

代の住居跡であるが、これらの住居跡を線で結ぶと、ほぼ円形を呈していることから、中央に広場があった可能性がある。

溝1(第10図) 7～9号墳の東側に隣接して掘り込まれている。一部、蛇行するものの、ほぼ直線的であり、主軸線は北から西へ30°振っている。幅は1m・深さは0.16mを測る。溝の一部は7号墳の周溝を切り込んでいる。溝の主軸線は、コンターラインにはほぼ並行しており、地形を考慮に入れて掘り込まれたと考えられる。西方へ位置する古墳と東方へ位置する住居跡を区画するために掘られたものである。溝内からは、飛鳥時代の住居跡からの遺物と同時期のものがごくわずかに出土している。

③奈良時代

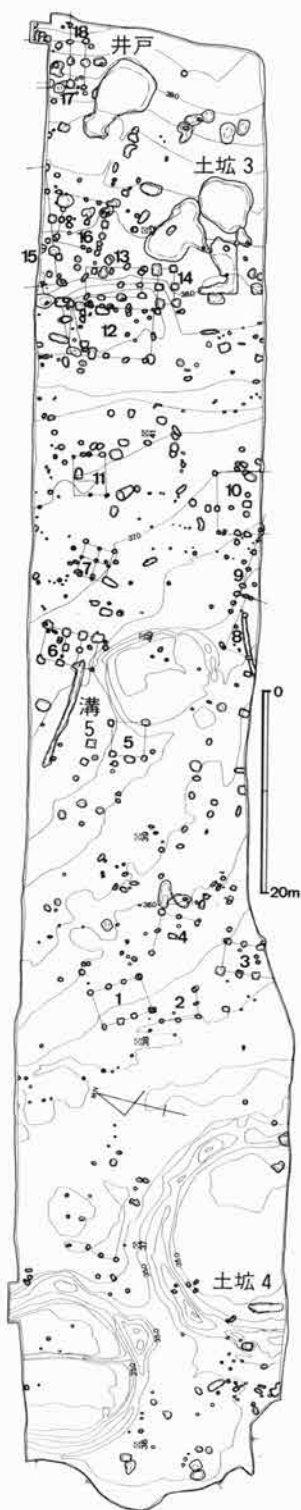
奈良時代の遺構としては、掘立柱建物跡・土坑・溝等がある。これらの遺構は、丘陵先

端の古墳や飛鳥時代の竪穴式住居跡等をすべて削平し、整地した後に造営されている。掘立柱建物跡(第35図)は、復元できた棟数が18棟を数える。概して飛鳥時代に掘られた溝1以東のものが残りがよく、柱穴自体の大きさも同じ傾向にある。溝1以西に掘立柱建物跡が少ない原因として、古墳を削平したことにより地形の凹凸が著しく、周溝の埋土が軟弱であったことや墓地の上に掘立柱建物跡を建てることを忌み嫌ったためと考えられる。掘立柱建物跡の柱穴の大きさを概観すると、一辺1mを測るものから、直径20~30cmのものまで、かなりのばらつきが見られる。

以下、各掘立柱建物跡について、規模・構造を中心に記述する。^(注38)

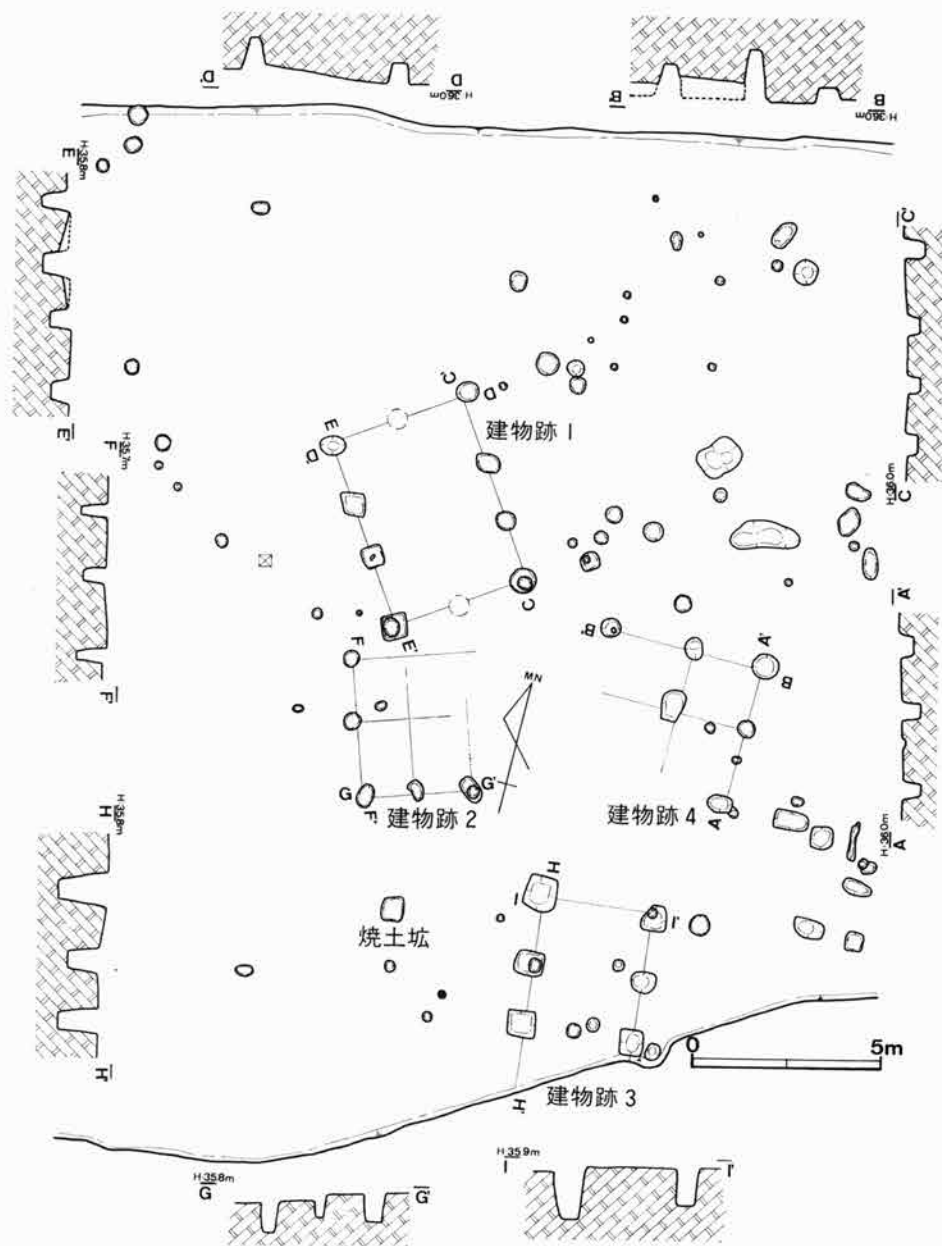
掘立柱建物跡1(第36図) 3間(5.04m)×2間(3.64m)の規模をもち、北西から南東に棟をもつ建物跡である。主軸線は北から西へ32°振る。桁行の柱間は1.76mを測る。梁間は、中央には柱穴がないが、2間と仮定すれば、柱間の長さが桁行の柱間とほぼ同じ長さになるため、柱穴を掘らない方法で柱を受けていた可能性がある。柱穴は、方形・円形の2種類があり、不統一である。方形掘形の一辺は56cmを測り、円形の掘形の直径は48cmを測る。掘形の規模・形態には違いがあるが、柱部の直径は20cm前後である。柱穴内から須恵器・土師器等の遺物が出土している。

掘立柱建物跡2(第36図) 建物跡1の南側に隣接して築かれている。2間(2.51m)×2間(3.68m)の規模で、南北方向に棟をもつ総柱の建物跡である。桁行の柱間は1.7mで、梁間の柱間は1.48mを測る。柱穴の大きさは直径48cmを測り、円形を呈している。柱穴内からの遺物は出土していない。



第35図 遺構概観図
(図中の番号は建物跡の番号と一致する)

掘立柱建物跡3(第36図) 一部確認できなかったが、2間(2.88m)×3間(3.52m)以上の規模を測り、主軸線はほぼ磁北と一致し、南北方向に棟をもつ。桁行は3間以上で、柱間は1.76mを測る。一方、梁間は、中央に柱がないが、全長を2分割した値が、桁行の柱間とほぼ一致することから、2間と推定した。柱穴の掘形は一辺68cmの方形を呈し、土師器・須恵器片が出土している。



第36図 遺構平面図(杭 No.38~No.39 間)

掘立柱建物跡4(第36図) 建物跡2の東側に隣接し、2間(3.76m)×2間(4.16m)の総柱の建物跡である。東面と北面を検出したにすぎないが、柱間は1.88mを測る。柱穴は直径66cmの円形の掘形をもつ。

掘立柱建物跡5(第37図) 建物の主軸線は北から西へ13°振り、1間(3.44m)×1間(3.2m)の小規模な建物跡である。1間分の長さとしては長すぎることから、建物跡1・4と同じく各々の面に柱穴を掘らずに柱を立てていた可能性が高い。柱穴の掘形は、一辺56cmの隅丸方形を呈している。柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物跡6(第37図) 3間(5.2m)×2間(3.24m)の規模を有し、主軸線はほぼ磁北と一致する建物跡である。桁行の柱間は1.64mを測り、ほぼ等間隔である。一方、梁間は、中央に柱穴がないものの、2分すると桁行の柱間と一致することから、建物跡1でも見られたように柱穴以外の方法で柱を受けていた可能性がある。柱穴の掘形は一辺80cmを測る。検出した建物跡の中でも、柱穴は比較的大きく穿たれており、この建物跡のもつ意味を考える上で重要である。

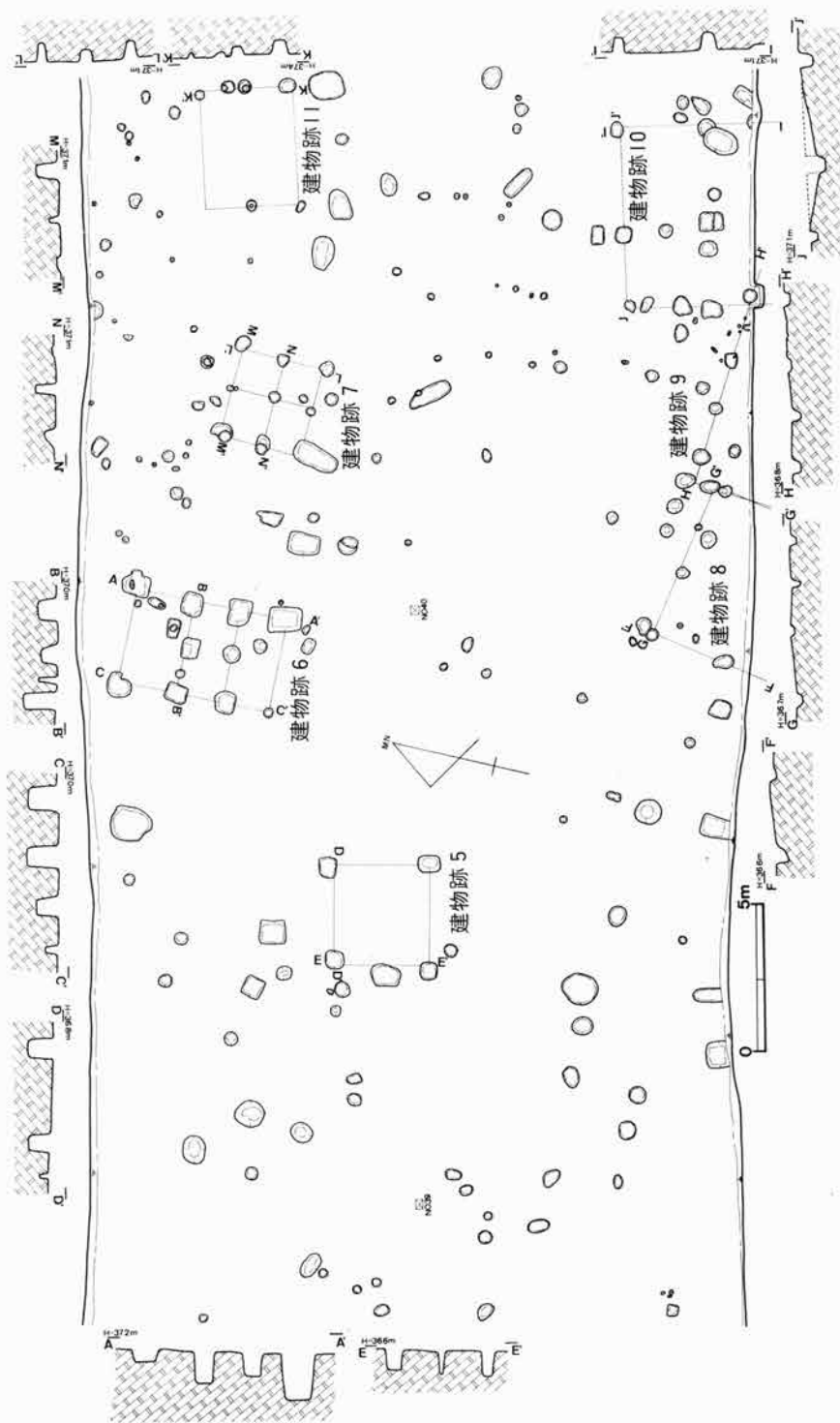
掘立柱建物跡7(第37図) 2間(3.04m)×2間(2.88m)の総柱の建物跡で、主軸線は、磁北とほぼ一致する。各々の柱間は、1.4mを測り、等間隔である。柱穴の掘形は直径38cmの円形を呈し、土師器・須恵器の細片が出土している。この建物跡の周辺にも同じ大きさの柱穴が存在するが、現時点では、建物跡と認識できない。

掘立柱建物跡8(第37図) 建物跡の約半分がトレンチ外になるため、全容はわからないが、北面は3間(5.36m)である。柱間の間隔は少しの違いがあるが、平均1.7mを測る。主軸線はほぼ磁北と一致する。柱穴は、直径48cmの円形の掘形をもつ。柱穴内から遺物は出土しておらず、年代を決定できない。

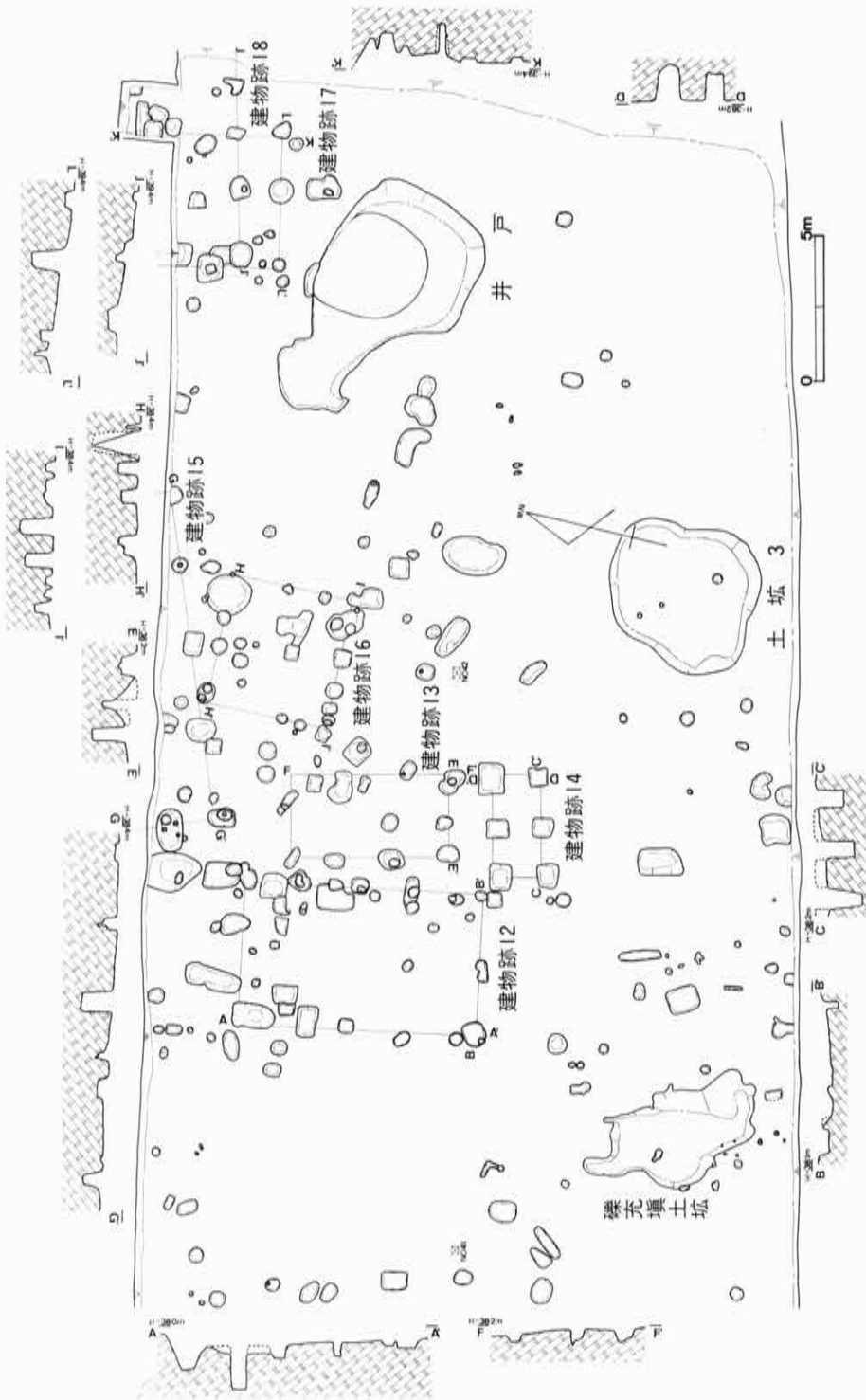
掘立柱建物跡9(第37図) 建物跡7と同じく北面の5間分(6.6m)を検出した。主軸線はほぼ磁北と一致する。柱間は、1.68mを測り、柱穴の掘形は直径40cmの円形を呈する。

掘立柱建物跡10(第37図) 建物跡8の東側に隣接した部分で検出した。主軸線は、北から西へ13°振る。規模は2間(6.08m)×2間(4m)以上になるが、1間分の間隔が長く、建物以外として考えなければならない一面をもっている。柱穴の掘形は直径48cmの円形を呈し、土師器・須恵器片が出土している。

掘立柱建物跡11(第37図) 建物跡の主軸線は、北から西へ13°振る。東西方向に棟をもち、2間(3.2m)×3間(3.95m)の規模である。全体が近代耕作溝で削平を受けている。桁行は、両端の柱穴しか検出できなかったが、全長を3間分とした場合、ほぼ梁間の柱間と同じ長さになることから3間と判断した。柱穴の掘形は、直径56cmの円形を呈するが、南東隅は少し大きく掘り込まれている。



第37図 遺構平面図 (杭 No.39~No.41 間)



第38図 遺構平面図 (杭 No.41~No.43 間)

掘立柱建物跡12(第38図) 4間(8.28m)×3間(4.96m)の規模を有し、主軸線は北から西へ13°振る建物跡である。南北方向に棟をもち、桁行の柱間は、2.16mを測り、梁間の柱間は、北面1.84m・南面2.72mを測る。柱穴の掘形は概して四隅が直径80cmに掘り込まれて、それ以外は直径56cmである。他の柱穴との切り合いも多くあり、時期設定を考える場合によい資料になる。柱穴からの出土遺物はない。

掘立柱建物跡13(第38図) 3間(5.36m)×2間(2.84m)の規模で南北に棟をもち、主軸線の方向は、北から西へ14°振る建物跡である。桁行の柱間は1.36mで、梁間の柱間は1.4mを各々測る。梁間の北面は、一部、耕作溝のため現存しない。柱穴の掘形は直径48~72cmを測る。遺物は出土していない。

掘立柱建物跡14(第38図) 1間(1.68m)×2間(3.52m)の小規模な建物跡で主軸線は建物跡12・13と同じ方向である。規模は小さいが、柱穴は、一辺1mを測り、柱間は桁行・梁間とも1.76mを測る。単独で成立した建物跡としても十分考えられるが、建物跡12・13との関連で考える必要がある。

掘立柱建物跡15(第38図) 建物跡の大半がトレンチ外になるため詳しい点は不明であるが、南面は、4間(11.4m)以上になり、柱間は3.1mを測る。柱穴の掘形は、直径88cmの円形を呈し、土師器・須恵器片が出土している。

掘立柱建物跡16(第38図) 主軸線はほぼ磁北と一致し、3間(4.56m)×3間(4.24m)の規模を有し、柱間は1.36mを測る。柱穴の掘形は、直径64cmを測るが、東南隅は直径70cmに掘られている。

掘立柱建物跡17(第38図) 桁行は検出した部分で3間(1.92m)を測り、梁間は2間(4.54m)を測る。

掘立柱建物跡18(第38図) 主軸線は建物跡17と一致し、南面を3間分(6.4m)確認したにすぎない。柱間は1.92mを測り、柱穴の掘形は直径80cmの円形を呈している。A地区の最東端に位置し、東方の斜面からの土砂流を考えれば、建物を建てるには適しておらず、他の性格である可能性もある。

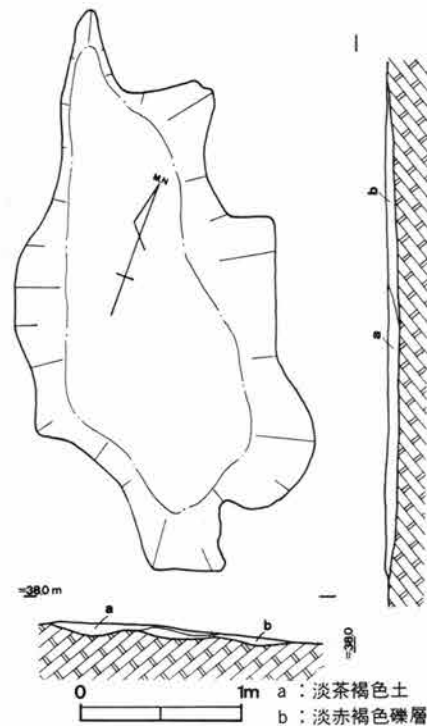
以上の建物跡を概観すると、①復元できたものは18棟であるが、確認した柱穴の数から考えると、建物跡の棟数はそれ以上になる。②建物跡の主軸線から大きくわけて、磁北と一致する一群・北から西へ13°振る一群・北から西へ30°振る一群にわけることができる。しかし、各々の群の新旧関係については、出土遺物もごくわずかであり、また、柱穴の切り合い関係も少ないことから明らかにできなかった。

礫充填土坑(第39図) 長軸が3.4m・短軸が1.6mを測る不整形の土坑で、上部が削平されており、深さは10cm程度しか残存していない。土坑内は、ほぼ全面に赤褐色の砂岩が

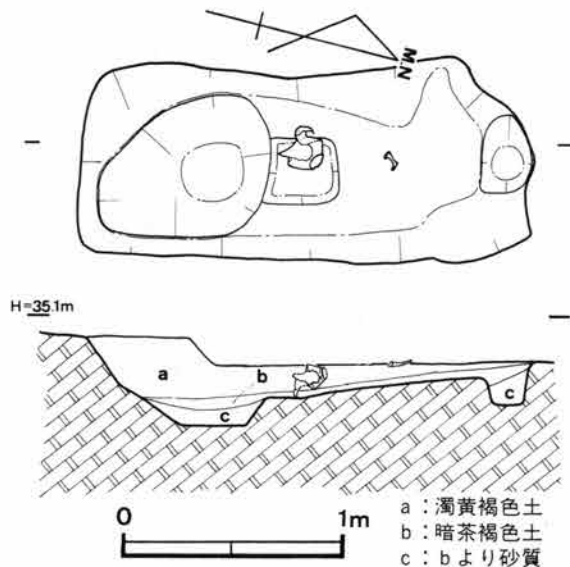
敷き詰められている。砂岩は、被熱のため軽くなっている。また、砂岩には、打ち割った痕跡が明瞭に残っており、坑内でその作業が行われたことを示している。坑内から石突^(注39) (第59図)が出土している。

土坑4 (第10・40図) 5号墳墳丘部西端で検出したもので、長軸2m・短軸0.86mの隅丸方形を呈している。長軸線の両端は、一部深く掘り込まれている。土坑中央で須恵器・壺(第60図)が出土している。

井戸(第35・41図) トレンチの最東端で検出したものである。井戸の掘形は、一辺5mの隅丸方形に掘られ、西側には長さ3.6m・幅2.4mのほぼ長方形のスロープが掘り込まれている。掘形の上層は、拳大の礫で充填され、上層下1.8mで井戸枠の最上部を確認した。井戸枠は、上部のみが腐食しており、他の横板および隅柱等は、ほぼ完存している。横板は、四面とも幅18cm・厚さ6cm・長さ160cmを測り、井げた組で積上げている。各面とも最下段には、建物の丸太・板材等の部材を転用し、横板の重量に耐えられるように造られている。東面の最下段には給水口^(注40)がある。井戸の底面には、軸線に沿って厚さ5cmの木材を「十」字形に敷いており、その両端は、四面の横板の下に入り込ませている。これは、底面が青灰色の粘土であり、その上に湧水面である砂利層が堆積しており、横板で砂利層を遮断



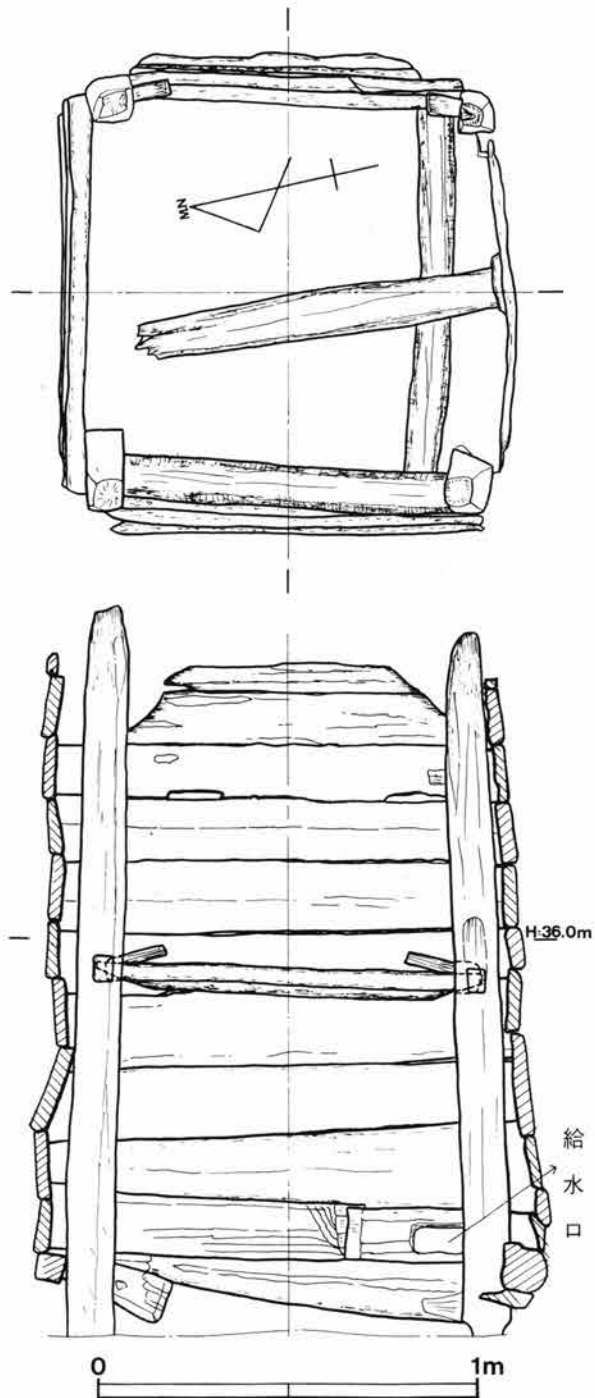
第39図 礫充填土坑実測図



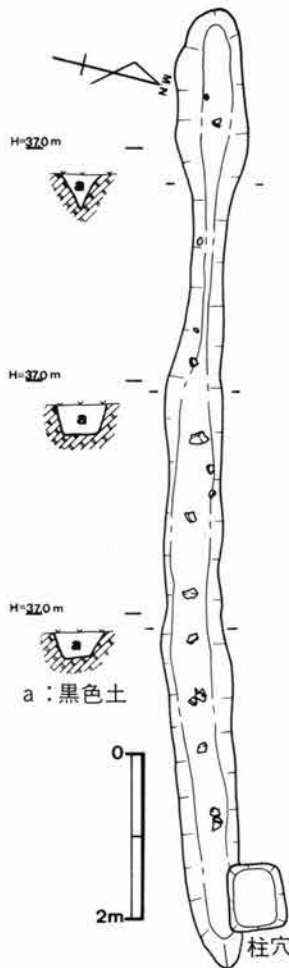
第40図 土坑4実測図

して、湧水を妨げることがないようにするための施設である。四隅の支柱は、底面の青灰色粘土層を20cm前後掘り込み埋設しており、支柱のほぼ中央にはほぞ穴を穿ち、断面扇形の横棧を各支柱に渡している。ほぞ穴と横棧には、各々の棧の上を楔で固定している。横板の最下段が直交する四隅の外側には、一辺12cm・長さ20cmの角柱を配している。井戸枠内のほぼ中間層と最下層から合計10数点の斎串が出土している。井戸枠の掘形には、枠で使用した同じ大きさの板材をも2面に敷いている。掘形上層から、多量の遺物が出土しているが、なかでも土馬・瓦は重要である。

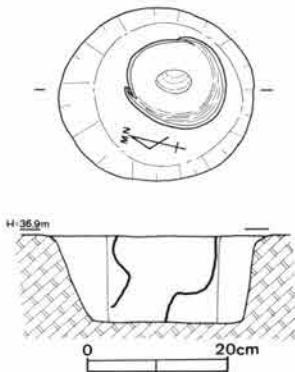
溝5(第35・42図) 長さ11.5m・幅0.72m・深さ20cmを測り、西方は「V」字形、東方は「U」字形を呈している。若干湾曲しており、主軸線は、北から東へ76°振っている。埋土は、礫が混じった黒色土が主体となっており、溝内最下層から須恵器・土師器(第66図)が出土している。溝の東部分は柱穴に切られており、先述した建物跡群のどの時期のものかと併存していたかを考える場合、有力な手掛かりとなる。溝は、完結しており、広義には排水を目的としているが、何処かへ水を流し出すものではなく、生活面に溜った水を



第41図 井戸枠平面図および東側面図



第42図 溝5 実測図



第43図 灰釉陶器柱穴内出土状況図

地下に排水するための施設であったと考えられる。なお、周辺に走るコンターラインにある程度沿っていることから、地形を十分考慮し掘り込まれたと考えられる。

④平安時代

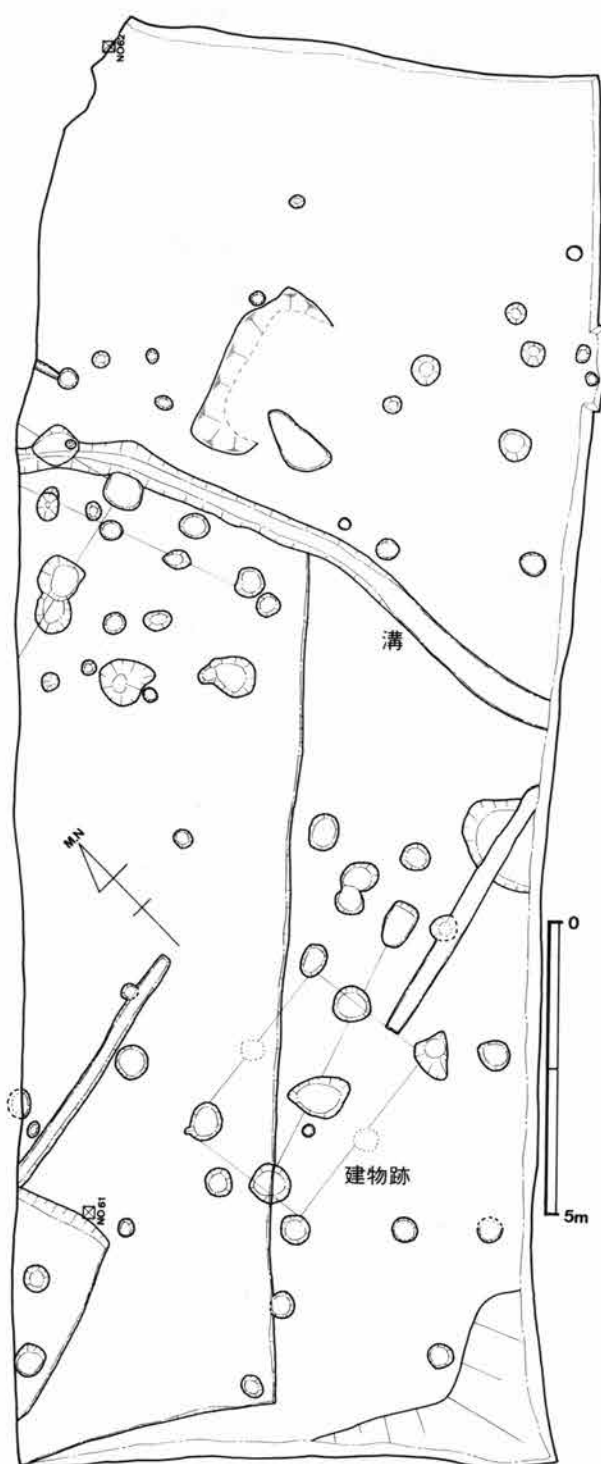
検出した遺構としては、灰釉陶器・壺を埋納した柱穴のみである。柱穴の掘形は、直径27cmの円形を呈しており、壺は、柱の抜き取り痕に口縁部を底に向けて入れられている。おそらく、建物の廃絶に伴う祭祀との関わりで考えるべきものである。調査地では、直径25cmの柱穴を数多く検出しているが、出土遺物がなく時期設定ができないのが現状である。可能性としては、平安時代と考えることもでき、今後、掘立柱建物跡として正確に復元する必要がある。

(2) D地区(第44図)

D地区の最東端では、現在、調査地の北方を流れる大河原川(築留川)の旧河道^(注41)の南肩部分を検出した。河道の埋土は褐色砂層であり、細かく分層できないことから、急激に埋没した可能性が高い。肩部および埋土からの出土遺物はなく、時期設定については、判断する根拠がない。その旧河道の南側に隣接する自然堤防状微高地からは、溝・柱穴・土壇・焼土壇を検出した。溝は、少し湾曲しながら北方へ流れており、大河原川へ流れ込んでいたものと考えられる。出土遺物の時期は6世紀後半から8世紀までである。柱穴は、直径20~60cmの大きさで、2間(2.44m)×3間(3.48m)の掘立柱建物跡を復元しうる。主軸線は、磁北に直交し、ほぼ大河原川に沿っている。なお、平地面からの出土遺物には、縄文土器・弥生土器(第69図)等があり、ローリングをあまり受けていないことから、現位置からは大きく移動していないと考えられる。

5. 出土遺物

1号墳周溝内出土遺物(第45図) 須恵器・杯蓋1は、口径15.5cmを測り、肩部に鋭い稜線が走る。口唇部は内傾し、



第44図 D地区平坦部平面図

肩部直上から笥削りが確認できる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡青灰色である。

陶邑古窯址群・田辺編年では^(注42)TK47前後に比定できる。甕

2は、口径25.2cmを測る。口唇部は、つまみ上げによって尖頭状である。口縁部外面には断面三角形の凸線が2条めぐり、凸線下に7条を一単位とする波状文が入っている。

胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。鉄斧4は、全長9.7cm・刃幅5cmで、柄挿入部は3cm×1.2cmの隅丸長方形である。

1号墳周溝内土埴須恵器・

甕3は、口径17.3cm・頸径12.8cm・胴部最大径28.3cm

・残存高26cmを測る。口唇部は尖頭状で、外面に断面三角形の凸線がめぐり、その直下に6条を一単位とする波状文を施す。

肩部はやや張り気味であり、球体に近い胴部を有している。

胴部は、叩きの後、一部ナデ消し、底部は焼成後に穿孔されている。

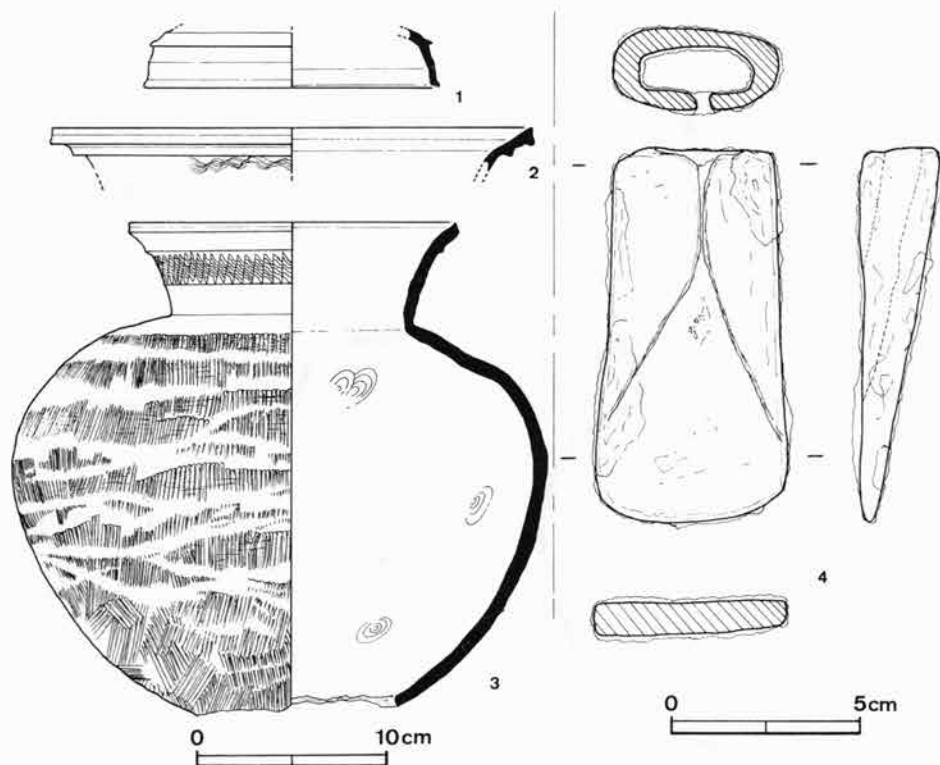
胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。

時期的には杯蓋と同じである。

3号墳主体部出土遺物(第

3号墳主体部出土遺物(第

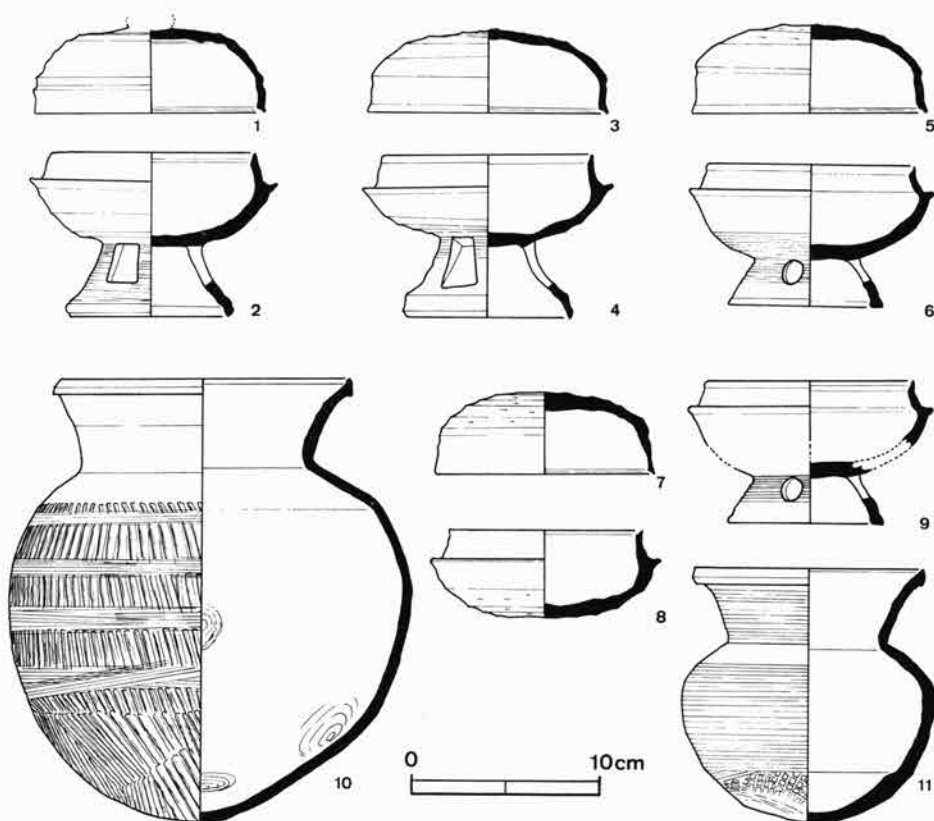
46図) 須恵器の有蓋高杯・蓋1は、口径12.1cm・残存高4.5cmを測る。内傾する口唇部をもち、肩部に稜線が鈍く走る。天井部に扁平なつまみが付く。胎土は緻密、焼成は不良、色調は淡青灰色である。2の有蓋高杯とセットで出土している。同3は、口径12.6cm・器高4.4cmを測り、内傾する口唇部をもつ。肩部には鈍い稜線が走る。胎土は緻密、焼成は不良、色調は淡青灰色である。同5は、口径12.4cm・器高4.6cmを測り、胎土等は3に酷似している。3と4、5と6がセットで出土している。高杯2は、口径10.8cm・受部径13.1cm・脚高3.6cm・器高8.7cmを測る。内傾する口唇部をもち、受部はほぼ水平にのびる。脚部は、外面カキ目で調整し、外湾しながら開き、屈曲し尖頭状の端部に至る。長方形の透かし孔が3方に入る。胎土は緻密、焼成は不良、色調は淡青灰色である。同4は、口径11.1cm・受部径13.2cm・脚高3.4cm・器高8.6cmを測り、2とほぼ同じ調整である。同6は、口径10.9cm・受部径12.8cm・脚高2.4cm・器高7.5cmを測る。内傾する口唇部をもち、受部は水平に短くのびる。脚部は、ほぼ外方に直線的にのび、端部に面をもつ。外面はカキ目調整し、円形の透かし孔を3方にもつ。胎土は緻密、焼成は不良、色調は淡青灰色である。同9は、口径11.2cm・受部径12.9cm・脚高2.4cm・器高7.6cmを測り、6と調整等が酷似している。杯蓋7は、口径11.6cm・器高4.4cmを測り、内傾する



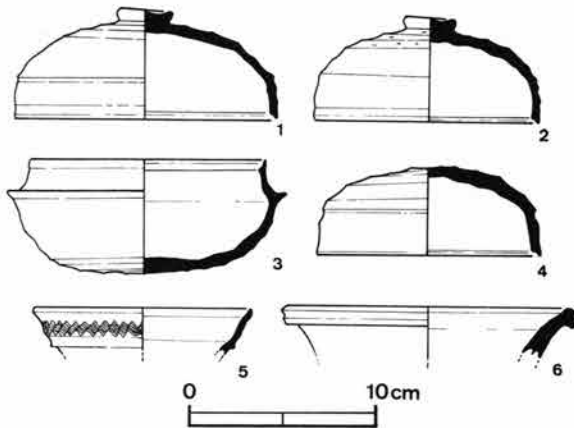
第45図 1号墳出土遺物実測図

口唇部をもち、天井部は平らである。肩部に鈍い稜線が走る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。杯身8は、口径10.2cm・受部径12.1cm・器高4.7cmを測り、内傾する口唇部をもつ。底部は、比較的丸く、篋削り痕を有する。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色を呈している。甕10は、口径15.2cm・頸径12.2cm・胴部最大径21.2cm・器高23.4cmを測る。口縁部は、外湾し、端部を肥厚させ面をもつ。胴部外面は1cm当たり2条の縦方向の叩き目を有し、ほぼ等間隔に1.2cm幅のカキ目が入る。胴部はほぼ球体を呈している。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。壺11は、口径12cm・頸径8.2cm・胴部最大径13.4cm・器高13.4cmを測る。口縁部は外湾し、口唇部を肥厚させ面をもつ。口縁部および胴部外面は、カキ目で調整するが、底部には格子の叩き目が残る。内面はナデ調整である。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。

3号墳溝内壇状遺構出土遺物(第47図1~3, 図版第11-3・4) 須恵器・杯蓋1は、口径13.8cm・器高5.8cmを測り、内傾する口唇部をもつ。天井部には扁平なつまみが付き、肩部に鈍い稜が走る。胎土は緻密、焼成は不良、色調は青灰色である。3の杯身とセット



第46図 3号墳埋葬主体部出土遺物実測図



第47図 3号墳出土遺物実測図
(1～3: 溝内壇状施設, 4～6: 溝内)

3号墳周溝下層出土遺物(第47図4～6) 杯蓋4は、坑内突出部から出土したもので、口径11.8cm・器高4.7cmを測り、内傾する口唇部をもつ。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。甕5は、口径11.4cmを測る。屈曲部外面に稜が走り、端部と稜線間に波状文を施す。胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡黒褐色を呈している。壺6は、口径15.6cmで、外湾する口縁部をもち、端部を肥厚させる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。主体部および周溝内出土の有蓋高杯・同蓋は、焼成が酷似しており、同じ窯の製品である。3号墳出土の土器は、若干の差があるが、おおむねTK47前後に比定できる。

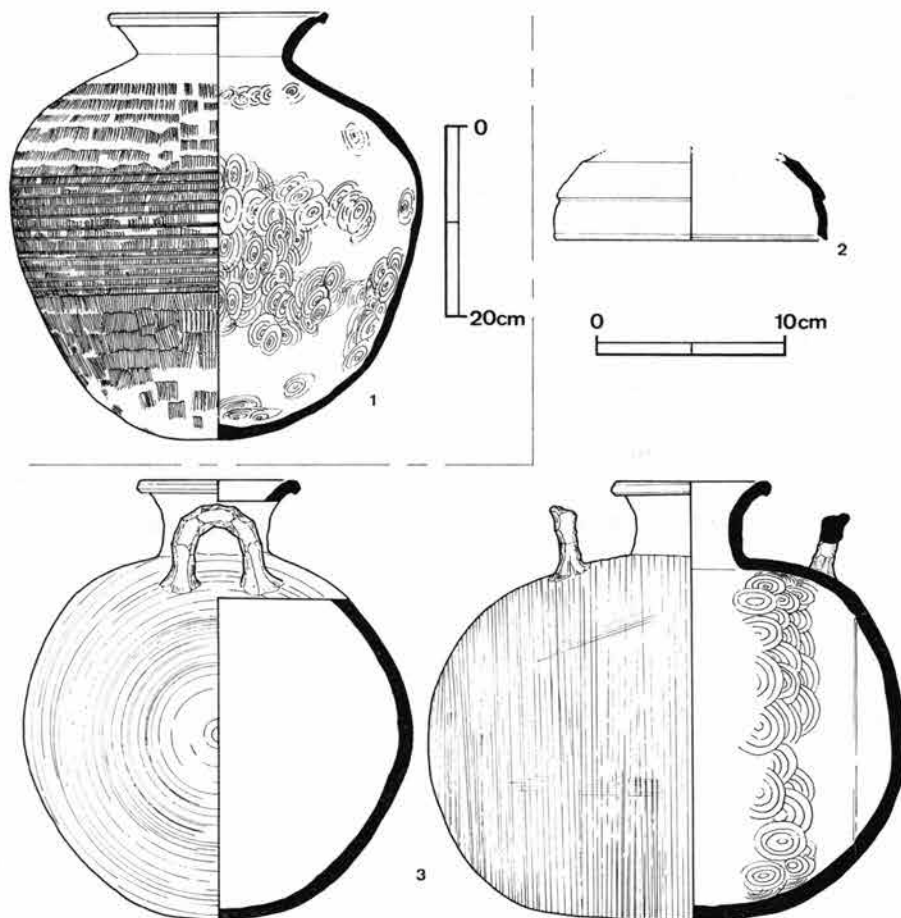
4号墳周溝下層出土遺物(第48図、図版第11-8) 須恵器・杯蓋2は、口径14.2cmを測り、内傾する口唇部をもつ。肩部には鋭い稜が走る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。MT15前後に比定できる。甕1は、口径22.6cm・頸径16.4cm・肩部径43.6cm・器高45cmを測る。口縁部は外湾し、端部は肥厚し、面をもっている。胴部外面は、縦方向の叩きである。胴部中央に13本のカキ目で横線を入れる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。横瓶3は、口径8cm・頸径5.4cm・胴部の長軸25cm・短軸20.6cmを測る。口縁部は直立し、屈曲した後、外湾する。口唇部は肥厚している。胴部外面はカキ目・内面には青海波文が確認できる。長軸の肩部には、環状の把手が直交して付けられている。^(注43)

5号墳周溝上層出土遺物(第49図) 須恵器・杯蓋1は、口径17.2cm・器高2.7cmを測る。天井部にはつまみが付き、口唇部は、下方へ短く屈曲する。胎土は密、焼成は良好、色調は青灰色を呈している。MT21前後に比定できる。蓋2は、口径17.2cm・器高2.5cmを測る。天井部は平らで、下垂する口縁部をもつ。杯身3は、口径15.8cm・高台径12cm・器高3.9cm。同4は、口径14.6cm・高台径10.8cm・器高3.6cm。同6は、口径15.4cm・高台径10.8cm・器高4.8cmを測る。3・4・6の胎土・色調等は2に酷似している。甕5

で出土している。同2は、口径11.9cm・器高5.5cmを測り、内傾する口唇部をもつ。1とは大きさには違いがあるが、調整等は同じである。杯身3は、口径12.5cm・受部径14.7cm・器高5.9cmを測る。外傾し、屈曲して直立する口縁部で口唇部は鋭く内傾する。受部はほぼ水平にのびる。胎土等は杯蓋1と同じである。

は、口径 14.6cm を測り、口唇部に面をもち、内面に稜が走る。外面は篋で磨いており、銅碗を模した可能性がある。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。壺 9 は、広口壺であり、肩部径 19.4cm・残存高 15.9cm を測る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は暗青灰色である。同 7 は無頸壺であり、口径 9cm・胴部最大径 16.4cm・器高 8.4cm を測る。底部は篋削りで成形し、口縁部外面は蓋の熔着痕が観察できる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。土師器・移動式カマド 10 は、焚き口側面・上面にひさしをもつ。外面は縦方向のハケ目で調整している。須恵器・鉢 11 は、底部のみで、底径が 7.8cm を測る。鉄鎌 8 は残存長 9.6cm・幅 2.4cm・厚さ 0.2cm を測る。

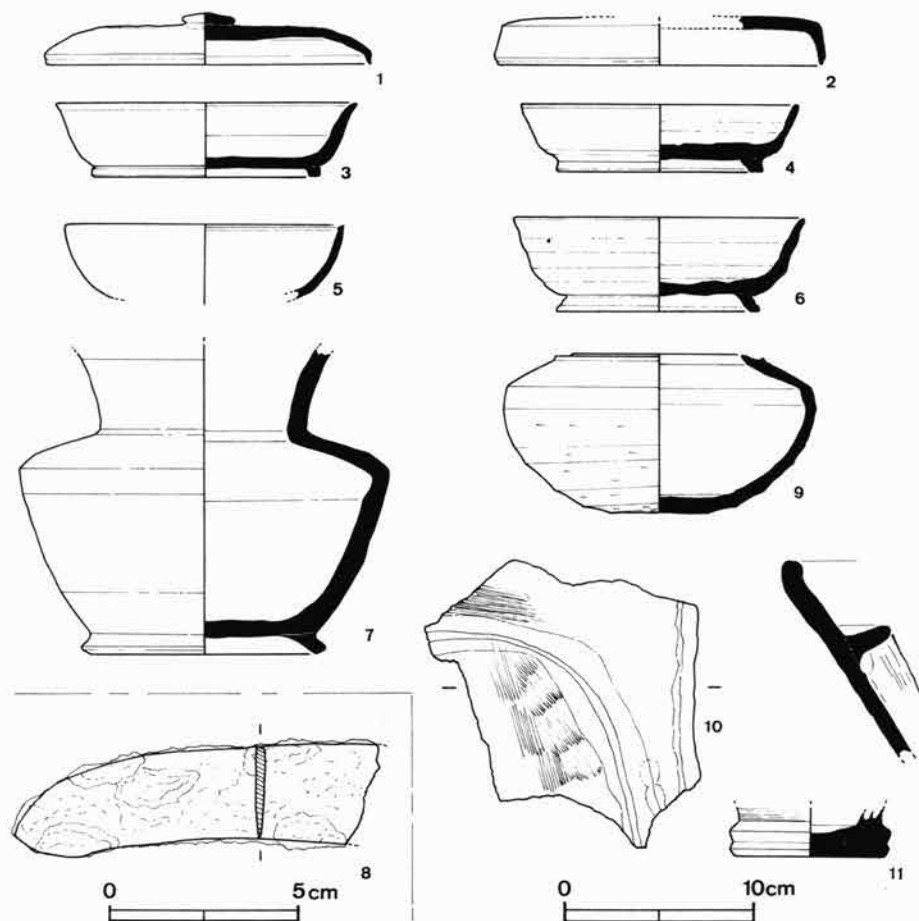
6号墳出土遺物(第50図) 須恵器・台付長頸壺 2 は、口径 10.3cm・頸径 7.2cm・胴部最大径 18cm・脚径 13.8cm・器高 26.7cm を測る。口縁部外面には下方に凹線がめぐる。ほぼ球体を呈する胴部は、肩部直下に 2 条の凹線を入れ、その間に斜交文を施している。胴部



第48図 4号墳周溝下層出土遺物実測図

下半は篋削りで成形している。脚部は、外湾し端部は肥厚する。中央には3条の凹線を施し、3方に長方形の透かし孔を入れる。底部内面には三日月形の圧痕が残るが、胴部に台を貼り付ける際のものと考えられる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。杯蓋2は、口径14.1cm・器高4.2cmを測る。口縁部内面には1条の凹線が入り、前段階の内傾する口縁部の退化したものと考えられる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色で、杯身4とセットである。杯身4は、口径12.3cm・受部径14.2cm・器高4.2cmを測る。内傾する口縁部をもつ。胎土・焼成は、2と酷似している。これらの遺物はTK10前後に比定できる。

7号墳出土遺物(第50図) 須恵器・広口壺1は、口径20.6cm・頸径9.1cm・胴部最大径18.1cm・器高25.2cmを測る。外湾する口縁部をもち、上方に2本の凹線が入り、その間に波状文を施す。胴部は、ほぼ球体で、外面はカキ目・内面は6cm幅に青海波文が観察できる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色を呈している。鉄製品・刀子10は、全長



第49図 5号墳周溝上層内出土遺物実測図

14. 6cm・刃部長9. 6cm・刃部幅1. 3cmを測る。茎部には木質が残る。

8号墳出土遺物(第50図) 須恵器・杯蓋5は、口径13. 2cm・器高4. 2cmを測る。天井部は比較的丸く、篋削りで成形する。口縁部内面に鈍い稜が走る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡青灰色を呈している。短頸壺6は、口縁部を欠く。最大径が13. 1cmを測る。7は、6同様、口縁部を欠き、最大径が13. 4cmを測る。6・7とも胎土は粗、焼成は不良、色調は淡青灰色を呈している。6・7は焼成等が酷似しており、同じ窯の製品である。なお、2点とも口縁部を欠いており、埋葬前に打ち欠いたとも考えられる。これらの土器はTK43前後に比定できる。

9号墳出土遺物(第50図) 須恵器・短頸壺8は、口径7. 7cm・胴部最大径14cm・器高9. 5cmを測る。直立する口縁部をもち、肩が張り、底部は比較的平らである。胎土は緻密、焼成は良好、色調は灰色である。土師器・壺9は、口径10. 2cm・頸径9. 4cm・胴部最大径12cm・器高11. 7cmを測る。外面は縦方向のハケ目で調整し、一部に指頭圧痕が残る。内面は、横方向のハケ目と底部はナデで調整している。一部に朱らしい赤色部分が観察できる。胎土は密、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈している。

以上が各埋葬主体部出土の土器であるが、壺類の副葬品が多いことが指摘できる。また、短頸壺の口縁部がいずれも打ち欠かれていることが指摘できる。

土塚墓1出土遺物(第51図) 土師器・長胴甕は、口径24. 5cm・頸径20. 6cm・胴部最大径27. 8cm・残存高27. 8cmを測る。口縁部は頸部から外湾し、口唇部が肥厚する。胴部外面は上半部が縦ハケ、下半部は、縦方向の篋削りで仕上げている。内面は、肩部には左上がりのハケ目が観察でき、他は、篋削りの後、ナデ調整である。土塚墓1からは、口縁部を欠いた同形の長胴甕が1点出土している。胎土は密、焼成は良好、色調は褐色である。

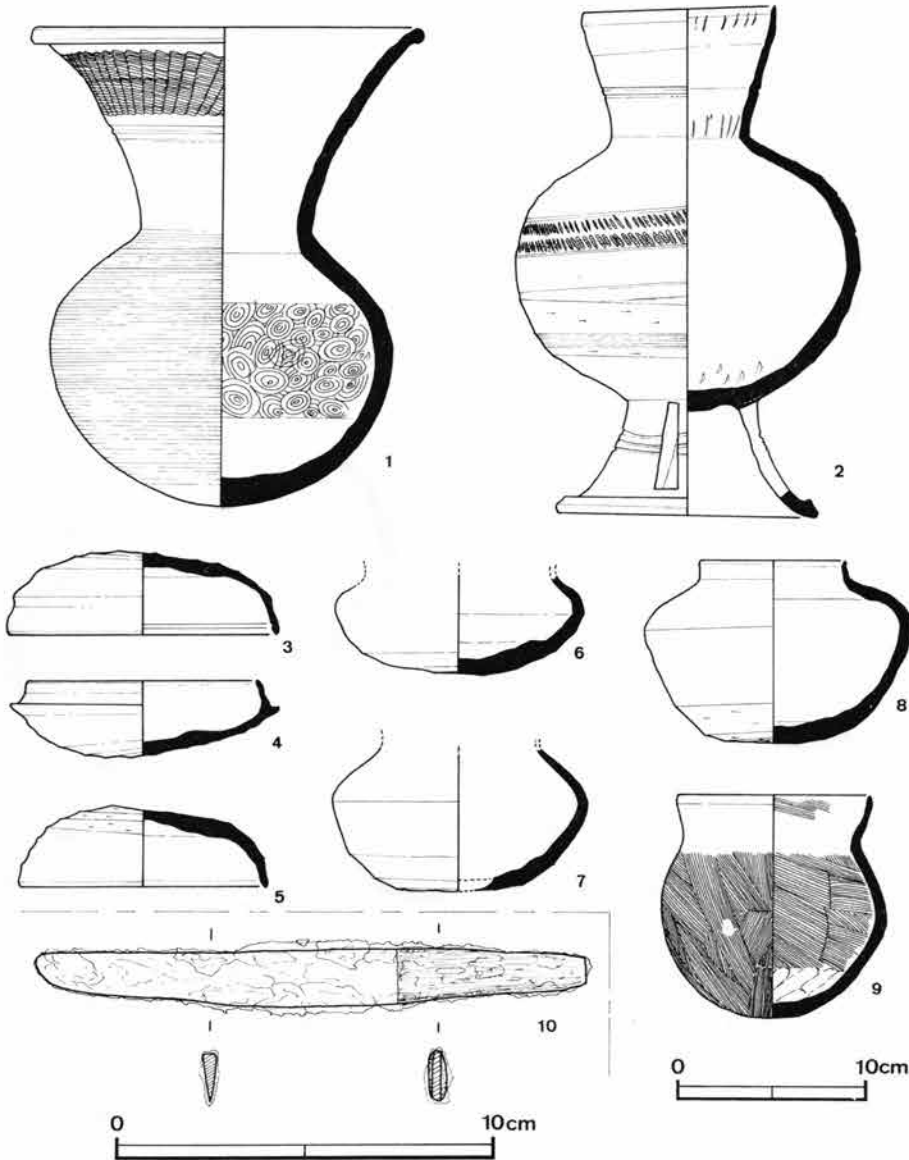
土塚墓2出土遺物(第52図1・2) 須恵器・壺1は、口径11. 6cm・頸径7cm・胴部最大径13. 2cm・器高16. 7cmを測る。口唇部は玉縁状である。外面はカキ目で調整する。同2は口径12. 7cm・頸径7. 7cm・胴部最大径14. 5cm・器高16. 8cmで、基本的な形態、手法は1と同じであるが、底部外面は篋削りで成形している。1・2とも胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。

土塚墓4出土遺物(第52図3・4) 須恵器・杯身3は、口径11. 1cm・受部径12. 8cm・器高4cmで、直立する短い立ち上がりをもつ。短頸壺4は口径7. 3cm・最大径15. 1cm・器高10. 6cmを測る。直立する口縁部で肩部が張る。3・4とも胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。TK209前後に比定できる。

土塚墓5出土遺物(第52図5・6) 須恵器・杯蓋5は、口径15. 1cm・器高4. 4cmを測る。小型壺6は、口径5. 7cm・頸径4. 8cm・器高9. 6cmを測る。口縁部は外傾し、肩部は

張る。底部外面は篋削りである。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。

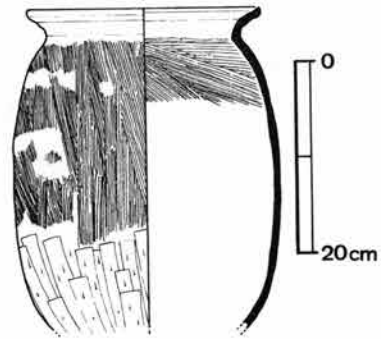
竪穴式住居跡1出土遺物(第53・54図) 土師器・壺1(図版第14-1)は、口径32cm・屈曲部径36.8cmを測る。外面はハケ目の後、縦方向の篋磨き、内面は横ナデで調整している。擬口縁は、扇形状の木目痕があり、胎土は密、焼成は良、色調は赤褐色である。同2は、口径18.2cm・頸径11.6cmを測る。直線的に外反し、端部に面をもつ口縁部である。外面は縦方向の篋磨きで、内面は一部で横ハケが確認できる。頸部内面には、指頭圧痕が残る。



第50図 各埋葬主体部出土遺物実測図

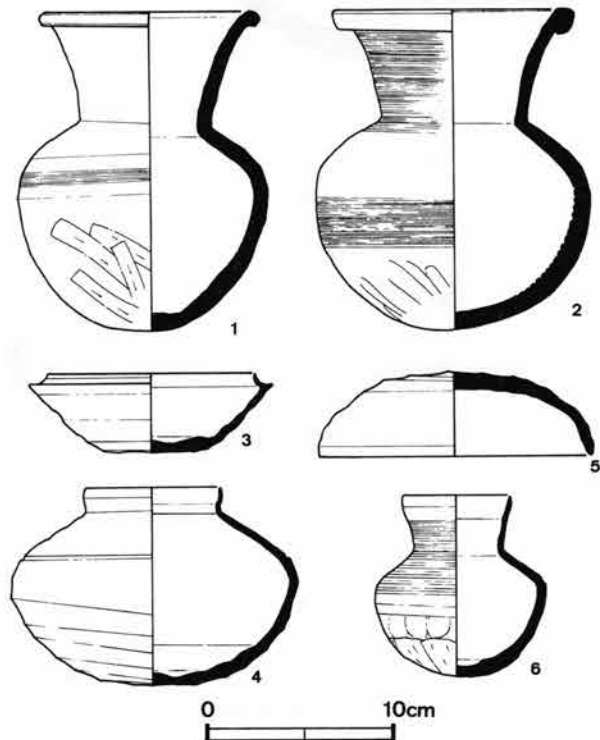
(1・10：7号墳，2～4：6号墳，5～7：8号墳，8・9：9号墳)

胎土は粗，焼成は良，色調は淡褐色である。3は，二重口縁である。口径20.4cm・屈曲部径17.6cmを測る。内外面とも摩滅が著しいため調整等は観察できない。胎土は粗，焼成は不良，色調は淡茶褐色である。4は，口径18.4cmを測る。頸部から外反し，屈曲する口縁部である。口縁部の器壁は1cmを測り，比較的厚い。内外面の一部に横ナデが観察できる。胎土は密，焼成は不良，色調は褐色を呈している。甕5は，口径15.3cm・頸径11.6



第51図 土塚墓1出土遺物実測図

cmを測る。口縁部は外反し，端部内面は肥厚する。現存部の肩部は，ほぼ直線的に張る。肩部外面は，横方向の細かい叩きが観察できる。胎土は密，焼成は不良，色調は暗褐色である。6は，口径12.4cm・頸径11.6cmを測る。口縁部は外反し，端部は肥厚する。胴部外面は横方向の叩きの後，一部，縦ハケで成形し，内面は，篋削りで指頭圧痕が残る。胎土は緻密，焼成は良好，色調は暗褐色である。7は，口径12.4cm・頸径10.6cmを測る。外湾し，屈曲し直立する口縁部である。外面は右上がりの叩き，内面は左上がりのハケ目を施している。胎土は密，焼成は不良，色調は暗茶褐色である。8は，ほぼ完形品であり，口径15.2cm・頸径11.6cm・胴部最大径19cm・器高24.2cmを測る。口縁部は外反し，端部は肥厚し面をもつ。胴部は楕円形を呈し，外面は横ハケの後，一部縦ハケ，内面は，篋削り，底部内面は指頭圧痕が残る。胎土は密，焼成は良好，色調は褐色である。9は，口径14.5cm・頸径11.2cmを測る。口縁部は，内湾気味で，端部は肥厚し面をもつ。



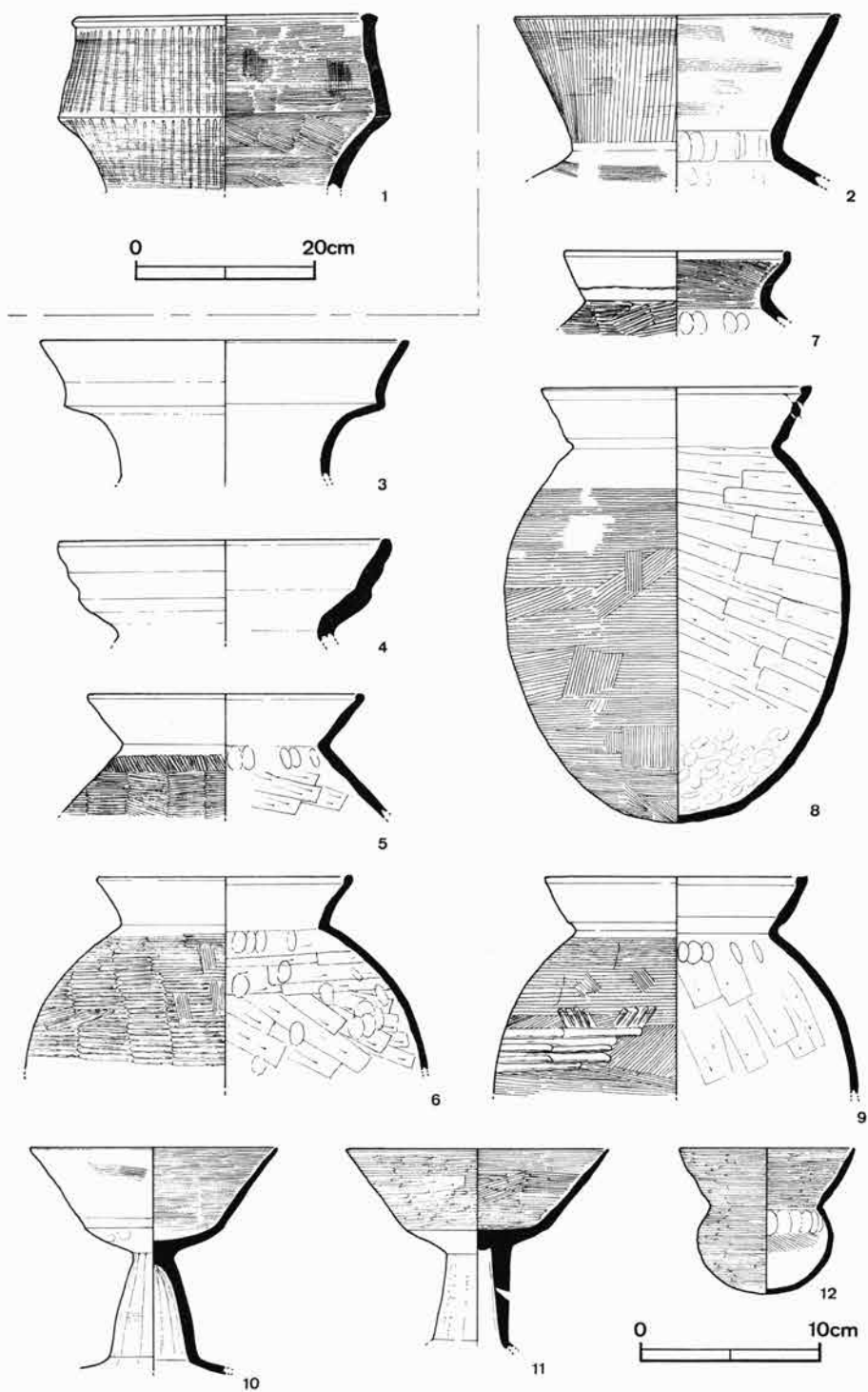
第52図 各土塚墓出土遺物実測図

胴部外面は、横方向の叩きの後、横ハケを施し、一部、縦ハケも観察できる。内面は、左上がりの筥削りで器壁を薄くしている。胎土は密、焼成は良好、色調は淡褐色である。高杯10は、口径13.6cm・杯部高は5.9cmを測る。杯底部から屈曲し、若干、外湾する。杯部内外面は細かい横ハケで調整している。脚部は、杯部と脚部の接合部を絞り込み、湾曲しながら開き、脚端部は屈曲し鋭く外反する。外面には縦方向にナデ、内面には絞り痕が残る。11は口径14.6cm・杯部高5.2cmを測る。平らな杯底部から屈曲し、直線的に外反する。内外面とも横方向の筥磨きで調整している。脚部は、直線的に下垂し、外面は、縦方向のナデが観察できる。胎土は密、焼成は良好、色調は暗褐色である。小型丸底壺12は、口径9.8cm・頸径6.4cm・胴部最大径7.6cm・器高は8.2cmを測る。口縁部は外反し、胴部はほぼ球体である。外面は、縦方向の筥磨き、内面及び口縁部は、縦方向の筥磨きで、頸部直下に指頭圧痕、胴部は、ハケ目で各々調整している。胎土は密、焼成は良好、色調は赤褐色である。石製品・砥石(第54図、図版第14-2)は、全長11.8cm・中央部の幅は3.6cmである。四面ともに研ぎ痕が比較的顕著に残っている。一方向の対角線の角部にも面をもち、粗い研ぎ痕がある。石材は凝灰岩である。

竪穴式住居跡1の出土土器は、個体数の把握ができず、正確な器種構成は不明であるが、甕の占める割合が最も高く、次いで壺の順である。おそらく、これらの器種で、全体の70%を占めるものと考えられる。高杯は、図化した以外に数点確認しており、小型丸底壺は1点のみである。遺構の断面から見た場合、第1次床面(下層)・第2次床面(上層)に分層できるが、土器から見た場合、第53図5・6の甕は、口縁部が面をもたずに肥厚する点や外面に細かい横方向の叩き目が観察できるのに対して、8・9は、口唇部に面をもち肥厚し、外面はハケ目調整している。これらから、若干の時期差を認定できる。

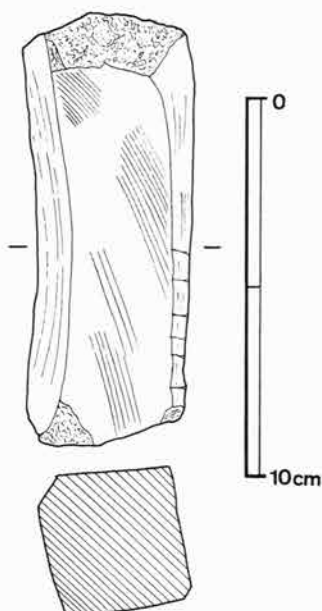
竪穴式住居跡2出土遺物(第55図) 須恵器・杯蓋1は、口径13.9cmを測り、直線的に下垂する口縁部をもつ。胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。2は、口径12.2cmを測り、天井部から屈曲し下垂する口縁部をもつ。胎土は緻密、焼成は良好、色調は灰褐色である。杯身3は、口径9.3cm・受部径11.6cmを測る。短く内湾する立ち上がりをもつ。胎土は密、焼成は良好、色調は淡青灰色である。これらはTK209前後に比定できる資料である。

土坑1出土遺物(第56図) 須恵器・杯蓋1は、口径13.4cm・器高4.4cmを測る。平らな天井部から屈曲し、下垂する口縁部をもつ。杯身2は、口径12.6cm・受部径15cmを測る。短く内湾する立ち上がりをもち、受部は上方に短くのびる。1・2の胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。土坑内に同器種がないことからセットであろう。平瓶3は口径6cm・頸径4.2cm・胴部最大径14.5cm・器高12.2cmを測る。口縁部は、直立した



第53図 竪穴式住居跡1出土遺物実測図

後に外反し、外面に1条の凹線がめぐる。底部は平らで、篋削り成形している。口縁部と胴部の接合部内面には明瞭な接合痕が残る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡青灰色である。土師器・鍋4は、口径37.7cmを測る。胴部から頸部で屈曲し、鋭く外反する口縁部をもち、端部に面をもつ。胴部外面は左上がりのハケ目、内面は横ハケで調整している。胎土は密、焼成は不良、色調は淡茶褐色である。同カマド5は、移動式カマドの把手部分である。土坑からは移動式のカマド片が多数出土しており、60%程度が復元できる状態である。外面は縦方向のハケ目で調整し、把手と同じ高さに突帯がめぐる。内面は一部にハケ目が観察できる。^(注44)

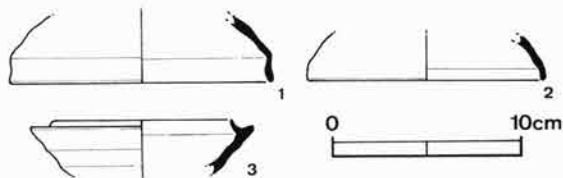


第54図 竪穴式住居跡1出土遺物実測図

竪穴式住居跡3出土遺物(第57図1・2) 土師器・甕1は、口径14.4cm・頸径12.2cmを測る。外面は縦

ハケ、内面は横ハケで調整している。胎土は密、焼成は良、色調は暗褐色である。須恵器・杯身2は、口径12.4cm・底径10cm・器高3.7cmを測る。底部は平らで、外湾気味の口縁部をもつ。胎土は密、焼成は良、色調は淡青灰色である。

竪穴式住居跡5出土遺物(第57図3~8) 須恵器・杯蓋3は、口径11.3cm・かえり径9.3cm・器高2.8cmを測る。天井部には宝珠形のつまみがつき、胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。杯身5は、口径14cm・底径12cm・器高3.8cmを測る。底部は平らで、外湾する口縁部をもつ。胎土等は1と酷似している。土師器・杯4は、口径10.5cm・底径5cm・器高2.7cmを測り、外面は横方向の篋磨きで調整している。同6は、口径10.3cm・器高3.1cmを測る。底部は比較的丸く、一部に指頭圧痕が観察できる。皿7は、口径10.7cm・底径4.8cm・器高3.2cmを測る。底部は平らで、口唇部は外湾する。4・6・7は、いずれも胎土が密、焼成が良、色調が暗褐色である。盤8は、口径24cm・底径17cm・器高2.6cmを測る。底部は平らで、口唇部は肥厚し、面をもつ。内面には、一部篋磨きが観察できる。胎土は密、焼成は良好、色調は赤褐色である。



第55図 竪穴式住居跡2出土遺物実測図

竪穴式住居跡6出土遺物(第57

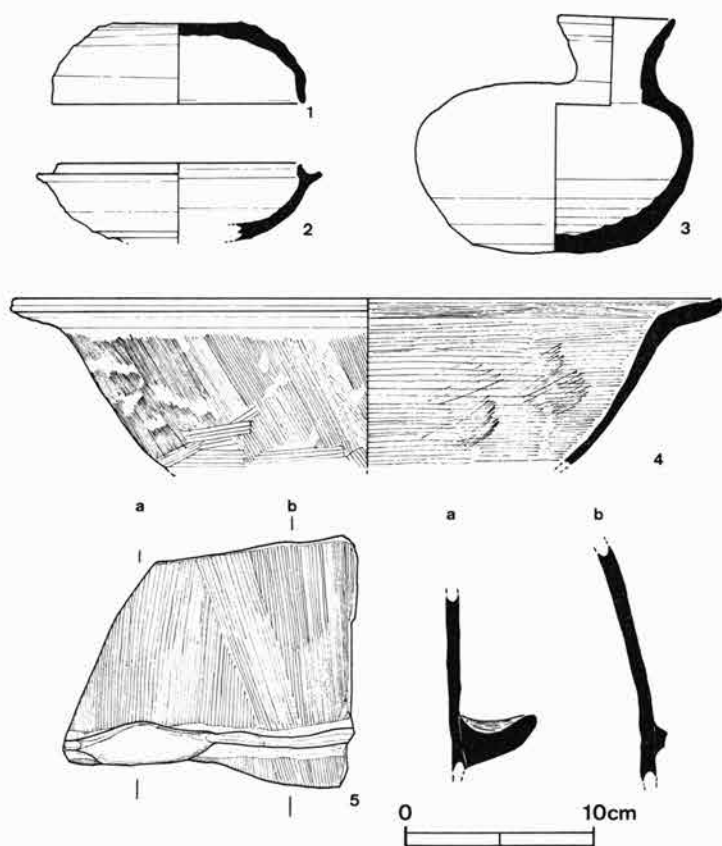
図9) 須恵器・杯身9は、口径13.4cm・高台径9.6cm・器高4cmを測る。平らな底部から、外反する口縁部をもつ。胎土は密、焼成は良、色調は灰色である。

竪穴式住居跡7 出土遺物(第57図10) 須恵器・杯身は、口径14cmを測るが、細片のため形態等は不明な点が多い。胎土は緻密、焼成は良、色調は暗青灰色である。

柱穴内出土遺物(第58図) 須恵器・杯蓋1は、口径16.8cm・復元器高は1.3cmを測る。口唇部は下方へ短く屈曲し、面をもつ。杯身2は、口径11.2cm・底径7cm・器高3.5cmを測る。底部は平らで、外反する口縁部をもつ。1・2とも胎土は密、焼成は良好、色調は灰色である。土師器・碗3は、口径16.6cm・器高5.4cmを測る。底部は比較的丸く、口唇部は屈曲する。底部外面はナデ調整で、内面には放射状の筥磨きが観察できる。胎土は密、焼成は良好、色調は赤褐色であり、口唇部に黒斑がつく。灰釉陶器・壺4は、口縁部・底部を欠いている。頸径6.6cm・胴部最大径14.4cmを測る。肩が張り、内外面にロクロナデの稜が走る。釉は、風化し観察できない。口縁部は、柱穴に埋納する段階で打ち欠いた可能性がある。胎土は緻密、焼成は不良、色調は灰白色である。猿投窯^(注45)のV期に比定できる。土師器・皿5

は、口径18.5cm・底径13.6cm・器高3.3cmを測る。底部は平らで、口唇部は屈曲した後外反する。内面には、放射状の筥磨きがある。胎土は密、焼成は良好、色調は赤褐色である。

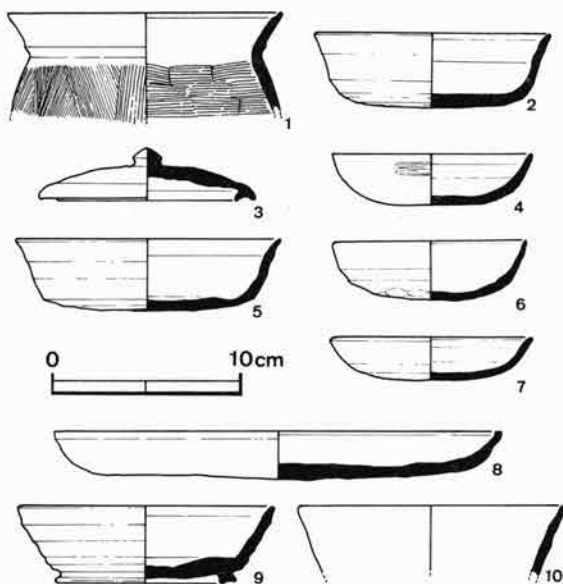
磔充墳土坑出土遺物(第59図、図版第14-11) 鉄製品・石突は、現存長8.5cm・最大幅3.9cm・最小幅2.6cmを測る。厚さ0.6cmの鉄板を円



第56図 土坑1出土遺物実測図

錐状に曲げたもので、重ね合わせ部分に段が付く。共伴遺物から奈良時代に比定できる。

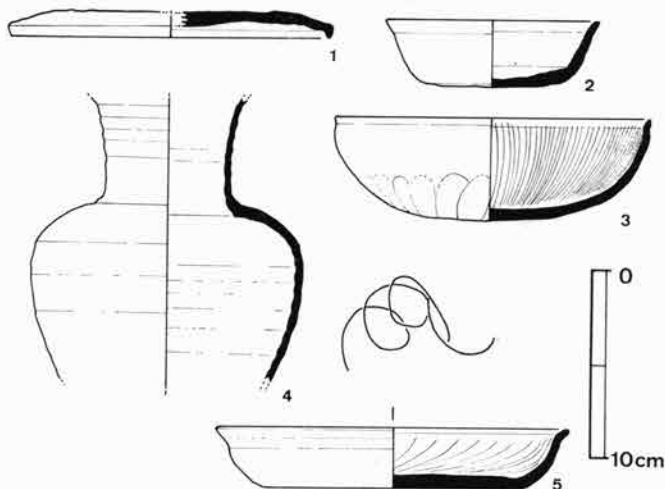
土坑4出土遺物(第60図, 図版第13-1) 須恵器・壺は口径20.6cm・頸径13.4cm・高台径8.6cm・器高16.3cmを測る。頸部から外反してのび、鋭く外湾し端部に至る。口唇部内面には稜が走る。肩部は、直線的で、胴部外面は篋削りで成形している。全体的にシャープにつくられている。胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は暗青灰色である。
(注46)



第57図 各堅穴式住居跡出土遺物実測図
(1・2: 住居跡3, 3~8: 住居跡5, 9: 住居跡6, 10: 住居跡7)

井戸内出土遺物(第61~64図)

土器(第61図) 須恵器・杯蓋1は口径14.6cmを測り、口縁部内面にかえりが付く。同2は、口径が14.9cmで、平らな天井部から下方へ屈曲し、口唇部には面をもつ。同3は、口径14.6cmを測り、平らな天井部から下方へ屈曲し、口唇部には面をもつ。同12は、口径19.3cmを測り、天井部は比較的丸く、口唇部は下方へ屈曲し面をもつ。これらの土器は、胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡灰色を呈している。杯身4は、口径12.9cm・高台径9.6cm・器高4.3cmを測る。内湾した後、屈曲する口縁部を有している。同5は、口径14.4cm・高台径10.6cm・器高4.1cmを測り、平らな底部から内湾する口縁部をもつ。同6は、口径19cm・高台径12.8cmで、形態的には5と酷似する。これらの杯身は、いずれも胎土は緻密、焼成は良、色調は淡青灰色である。

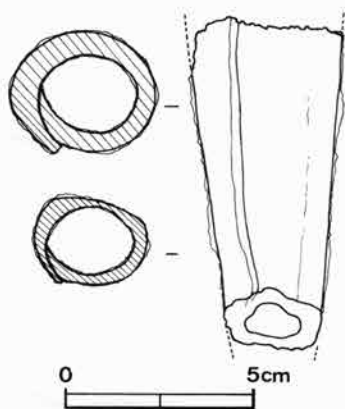


第58図 柱穴内出土遺物実測図

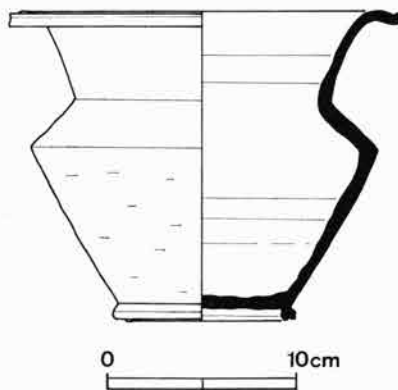
MT21前後に比定できる。壺7は、口径10.8cmを測る。直立する口縁部をもち、肩部が張る。同10は、肩部径25cm・高台径18.4cmを測り、肩部に鋭い稜線が走る。7・10の胎土は密、焼成は良、色調は青灰色である。同15は、底部径7cmで、糸切り底である。同17は、口径7.2cmを測り、屈曲し、口唇部に面をもつ。15・17は、胎土は緻密、焼成は良好、色調は青灰色である。鉢8は底径13.6cmを測り、外面は右上がりの叩き・内面は細かい叩きの後、ナデ調整を施す。胎土は密、焼成は良好、色調は暗青灰色である。18(図版第13-6)はいわゆる、鉄鉢型のもので、口径17.9cm・最大径20cm・復元器高10.8cmを測る。口唇部は内傾し面をもち、大きく内湾する肩部から尖頭状の底部に至る。外面に篋磨きが見られ、胎土は緻密、焼成は堅緻、色調は淡青灰色である。土師器・鍋9は、口径42cm・器高17.2cmを測る。屈曲し外反する口縁部で、端部は肥厚する。内外面ともハケ調整である。製塩土器11は、口径13.4cmを測り、外面に指頭圧痕が観察できる。胎土は粗、焼成は不良、色調は暗褐色である。高杯13は、口径30.8cmを測る。直線的に開く杯部であり、口唇部は肥厚し、黒斑がある。外面に篋磨きを観察できる。胎土は緻密、焼成は良好、色調は赤褐色である。16は、高杯の脚部で、外面を面取りしている。皿19は、口径13cm・底径6cm・器高3cmを測る。内外面ともに指頭圧痕が顕著に残る。灰釉陶器・壺14(図版第13-3)は、口唇部は欠くが、頸径5cm・胴部最大径14.3cm・高台径8cmを測る。胴部はほぼ球体で、一部、淡青色の釉が残る。胎土は緻密、焼成は良好、色調は淡褐色である。須恵器・甕(第63図4)は、外面を梯子状の叩き目で成形し、内面は顕著な青海波文が残る。この叩き目によって窯を限定できる資料である。

土製品・石製品・鉄製品(第62図, 図版第13-2・4)

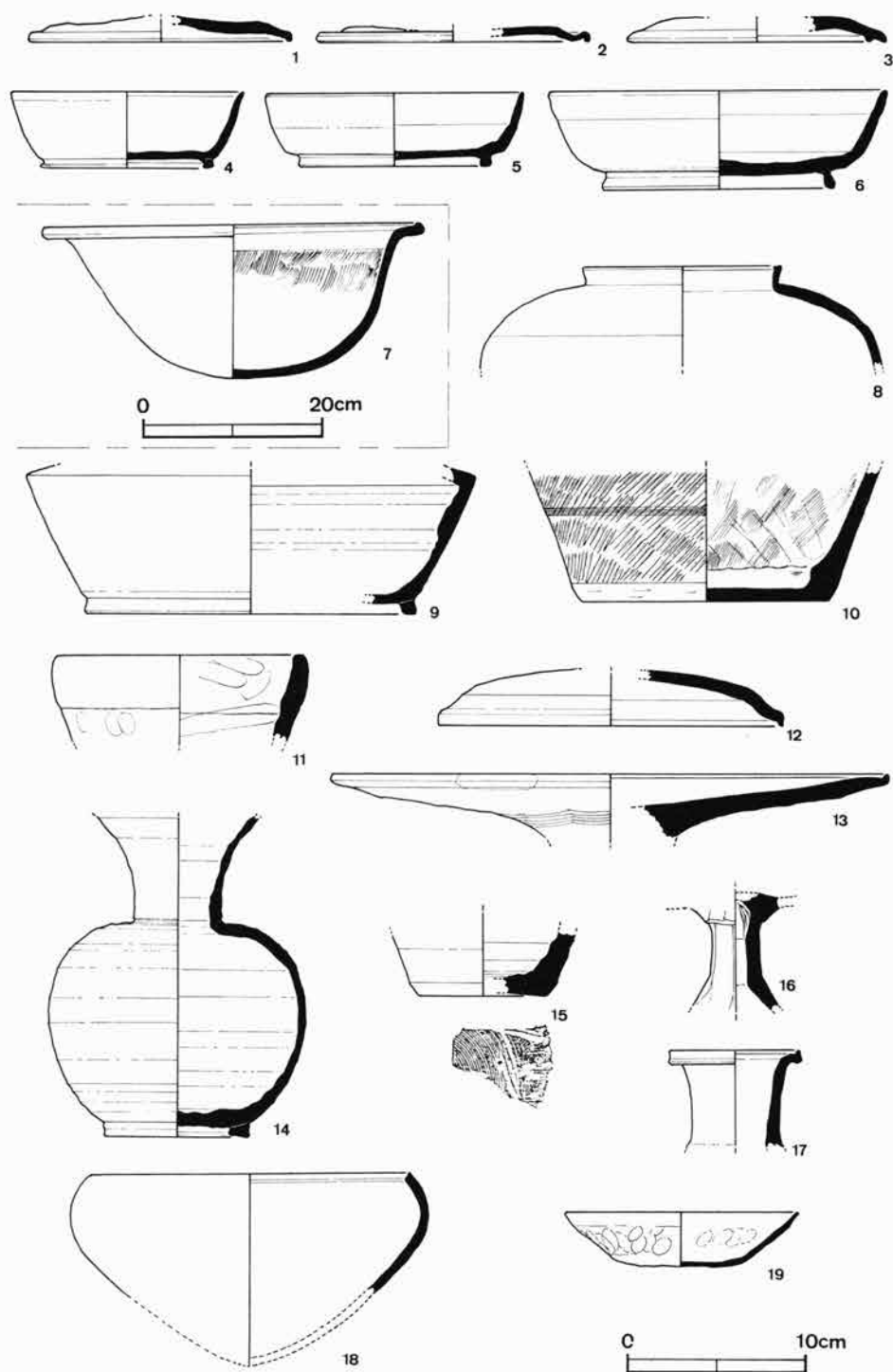
土馬1は、頭部のみ残存し、口部・目部・耳部は欠損している。焼成は良好である。石製品・磚2は、11cm×12.2cm×5.4cmを測る。一部欠損しているが、表面は丁寧に磨い



第59図 磔充墳土坑出土遺物実測図



第60図 土坑4出土遺物実測図



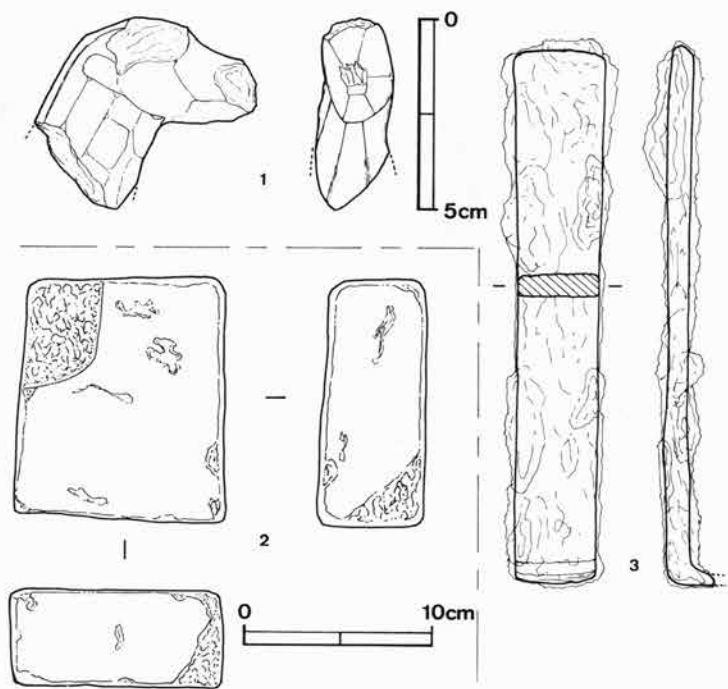
第61図 井戸内出土遺物実測図(土器)

ている。石材は凝灰岩である。鉄製品3は、全長14cm・幅2.1cm・厚さ0.5cmを測り、一方の端部は直角に屈曲する。用途は不明である。

瓦(第63図1~3, 図版第13-5) 軒丸瓦1は、複弁八葉蓮華文を主文とし、外区に鋸歯文を施す。瓦当面は直径15.6cm・厚み6.6cmを測る。平城宮式^(注47)6291A型式に該当し、城陽市内では、正道遺跡に出土例が見られる。平瓦2は、外面に縄目叩き目、内面は布目圧痕が観察できる。厚みは2.1cmである。同3は、外面に斜格子の叩き目、内面は布目圧痕が観察できる。端面は笠削りによって「冂」状を呈している。

木製品(第64図) 斎串1(図版第14-4~7)は、全長15.6cm・幅1.8cm・厚み0.2cm。同2は、全長17.4cm・幅1.8cm・厚み0.18cmを測り、切り込みの一方を欠く。同3は全長22.1cm・幅2.4cm・厚み0.18cm。同4は、全長22.2cm・幅2.3cm・厚み0.3cm。同5は、両端の一部を欠くが、全長22.1cm・幅2.4cm・厚み0.3cm。同6は欠損部分が大きく不明な点も多いが、厚さ0.18cmを測る。同7は幅2.4cm・厚み0.2cmを測るが、40%以上が欠損している。同8は幅2.3cm・厚さ0.13cm。同9は、幅2.4cm・厚さ0.2cmを測る。材質に関しては、今後、正確な鑑定を行う必要があるが、材質・全長・厚みから1・2と3・4・5・7と6・8・9の3種類に分類することができる。出土層位としては、1・2が最下層で、他が中間層である。曲物(10・14~23) 10は、底部で、全円周の4分の1程度残存している。厚み0.5cmを測る。14~23は、縦方向に細かく切り目が入っており、特に、15には、一部に桜皮が観察できる。出土状態から破損品を投棄したと考えられる。

用途不明木製品11(図版第14-3)は、木偶状を呈し、上部が両方から切り込まれ、

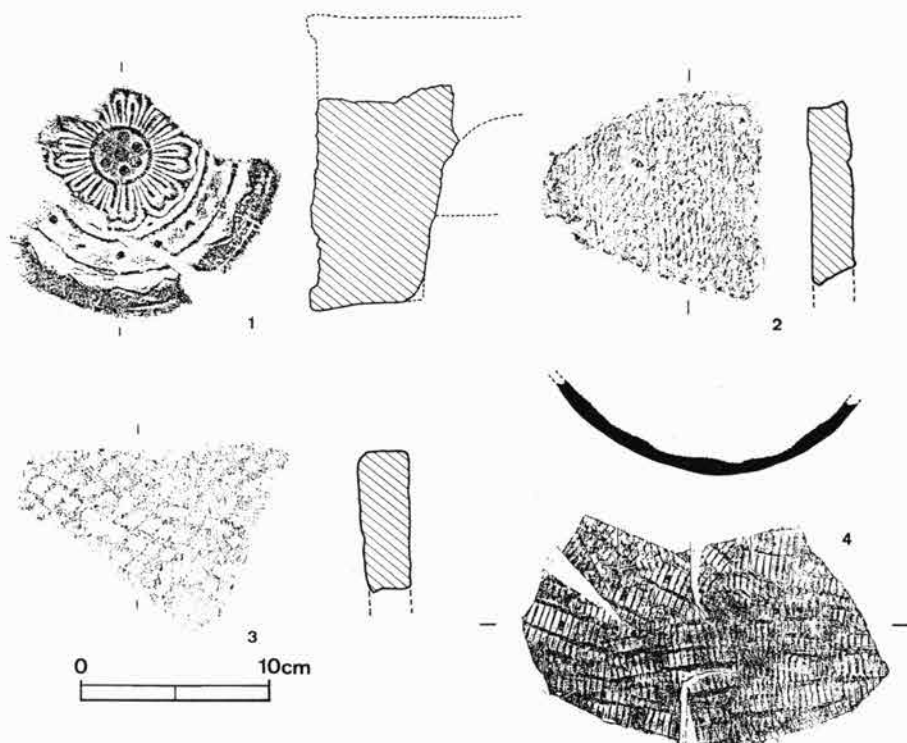


第62図 井戸内出土遺物実測図
(1:土馬, 2:磚, 3:鉄製品)

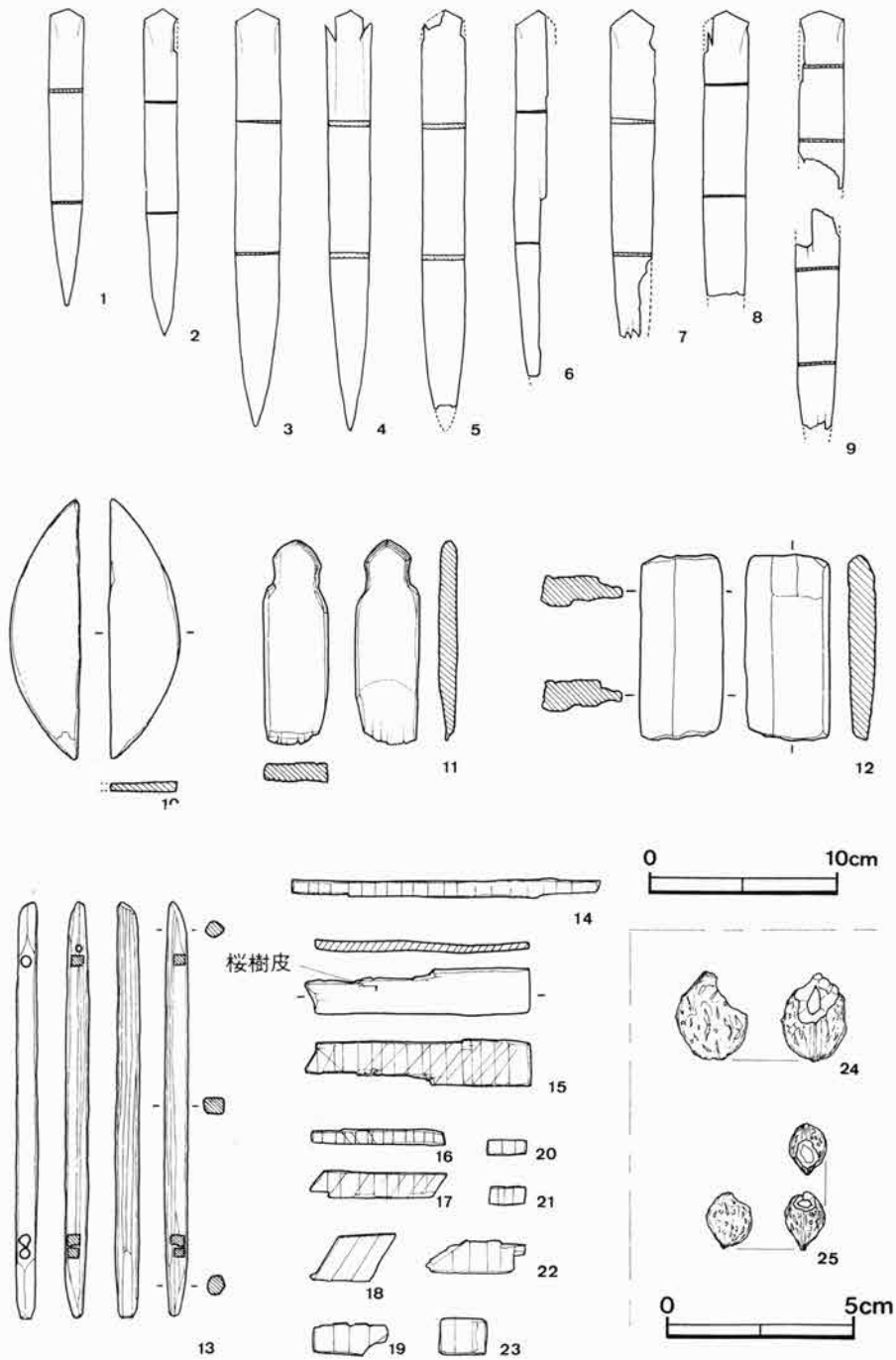
幅3.4cmを測る。下部は、片側が削られている。出土している楔には見られない削り痕であることから、井戸の祭祀との関連で考えることもできる。楔12は、全長9.8cm・幅4.4cm・厚さ1.4cmを測る。片側は木材の一部が剝離した状態である。また、端部の一方を削り込んでいる。紡績関係木製品13(図版第14-7)は、全長22.1cm・幅1.1cmを測る。一面は平らに削り、両端を尖頭状に削っている。平坦面には3か所に穿孔されており、その内の1か所には目隠の木を充填している。これは、穿孔部の間隔がずれたために充填したと考えられる。種子24は長さ4.8cm、25は長さ2.8cmを測る。井戸内出土の種子は、100点程度出土しており、20%の種子は、一部が欠損している。これについては多くの説があり、明らかに削り取られたものも散見できる。

井戸内の出土遺物についての概観は以上であるが、南山城地域における同時期の出土例としては、精華町畑ノ前遺跡等^(注48)しか知られていない。特に、軒丸瓦や磚等は、芝山遺跡の性格を考える上で、重要な遺物である。

溝2出土遺物(第65図) 須恵器・杯身1は、口径8.6cm・受部径10.5cm・器高3cmを測る。TK209前後に比定できる。土師器・甌は、口径26.4cmを測り、外面は縦ハケ、内面は、一部に縦ハケを観察できるが、大半は篋削りで調整されている。



第63図 遺物拓影図(1~3:井戸, 4:包含層)



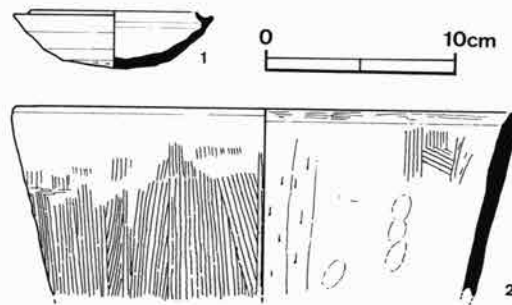
第64図 井戸内出土遺物実測図
(木製品, 種子)

溝5出土遺物(第66図) 須恵器・杯蓋1は、口径14.9cm・かえり径12.8cm。同2は、口径19.4cmを測り、天井部から下方に屈曲し、口唇部に面をもつ。同3は、口径19.6cm・器高3.15cmを測る。天井部につまみを有し、口唇部は2と同じである。杯身4は、口径17.7cm・高台径13.6cm・器高4.5cmを測る。同5は、口唇部を欠くが、復元口径19.6cm・高台径13cm・復元器高5.2cmと推定できる。甕8は口径24.8cm・頸径20.8cmで、肩部外面は叩き目、内面は青海波文が残る。一部、歪みが見られる。これらの須恵器の胎土は緻密、焼成は良好、色調は暗青灰色を呈している。MT21前後に比定できる。土師器・甕7は、口径22.5cm・頸径18.6cmを測る。胴部内外面はハケ目で調整している。9は、口径11.2cm・頸径9.2cm・胴部最大径が11.4cmを測る。内外面ともハケ目が観察できるが、胴部最大径部の直上に一条の凹線が見られる。10は、口径15cm・頸径11.6cmを測る。内外面ともハケ目で調整している。これらの土師器の胎土は粗、焼成は良、色調は淡赤褐色である。

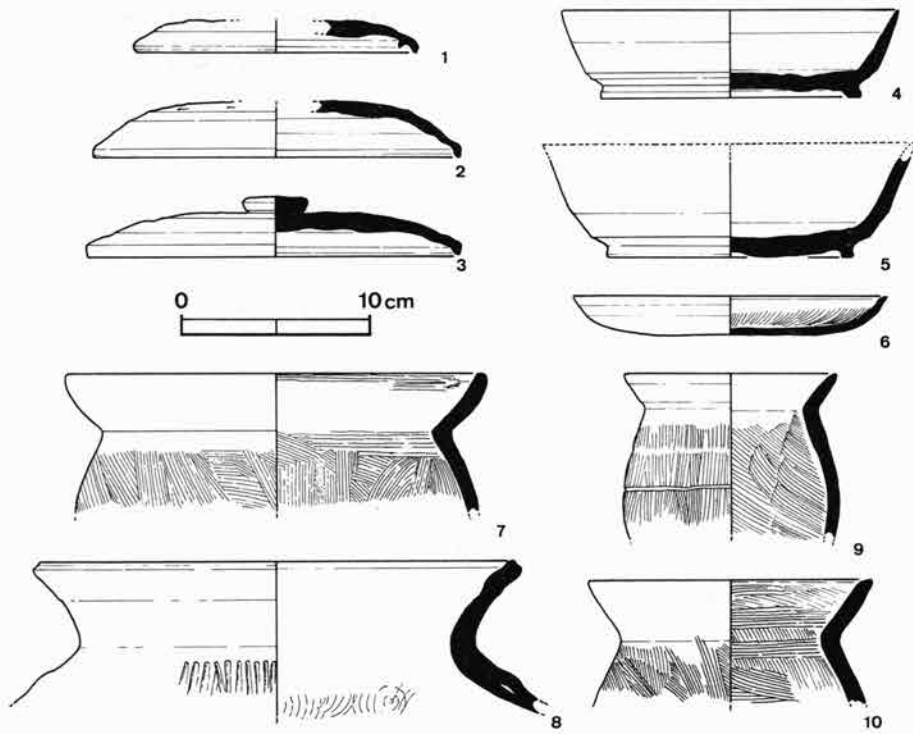
土塚3出土遺物(第67図) 須恵器・杯蓋1は、口径19cmを測り、平らな天井部から屈曲し、口唇部に面をもっている。同2は、口径17.6cmである。蓋3は、口径15.6cm・器高2.3cmを測る。天井部は極端に下がっており、扁平つまみをもつ。口縁部は、天井部から屈曲し、下垂する。杯身4は、口径13.2cm・底径9.4cm・器高3.4cmを測る。壺5は最大径21.1cm・台径12.8cmを測る。これらの須恵器は、概して焼成が良好である。鉄製品6・7は半環状を呈し、厚さ0.2cmを測る。用途は不明であるが、2点の両端を留め、開閉したと考えられる。

包含層出土遺物(第68図, 図版第14-9・10) 鉄製品・鍬1は、現存長10.7cm・刃長5.2cmを測り、木質が残っている。同2は、現存長12.7cm・刃長5.7cm, 同3は現存長12.2cm・刃長4.1cm, 同4は、現存長12.7cm・刃長6.3cmを各々測る。鉄釘3は、頭部が1.2cm×0.6cmを測る。勾玉は翡翠製で、全長1.35cmを測り、両面穿孔である。これらの遺物は、古墳の副葬品が後世の擾乱によって散在したものと考えられる。

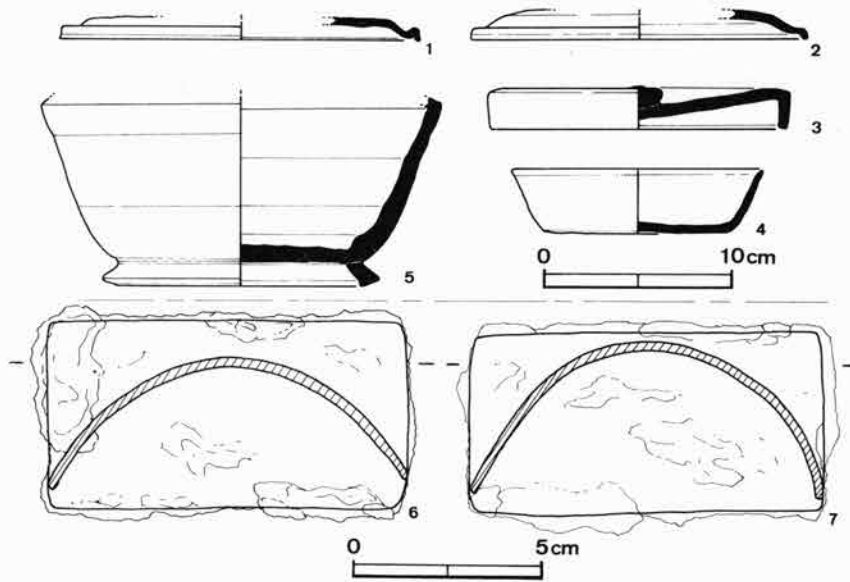
C・D地区遺物包含層出土遺物(第69図) 縄文土器1(図版第14-13)は、破片のため法量はわからないが、器表面・口唇部に縄文を施している。縄文は右上がりと左上がりの2方向から押圧されている。全体に、凹線により文様を区画した深鉢である。同2は、波状口縁であり、突帯の下



第65図 溝2出土遺物実測図



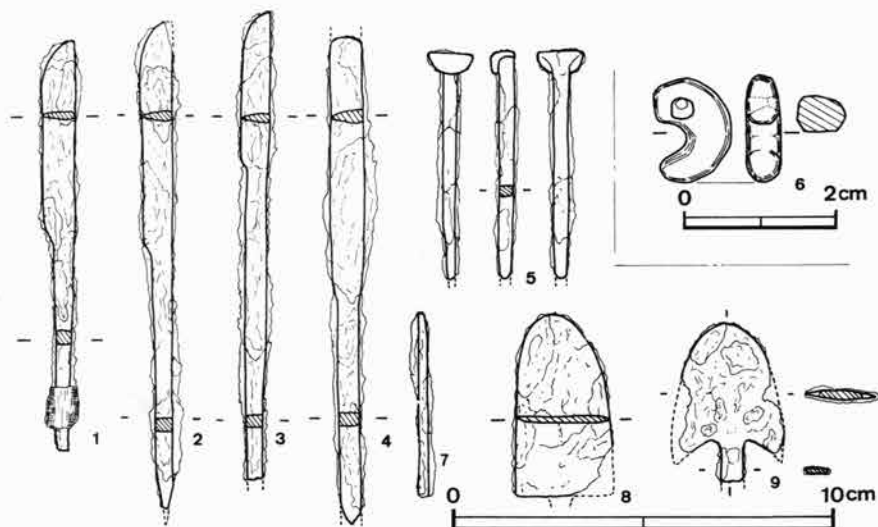
第66図 溝 5 出土遺物実測図



第67図 土塚 3 出土遺物実測図

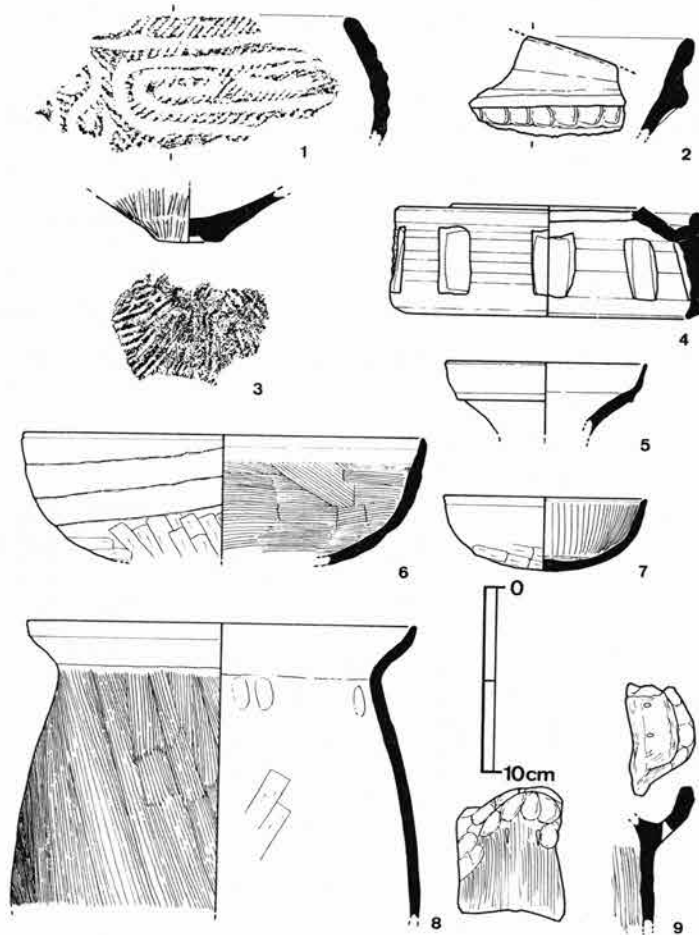
方を爪形圧痕によって凹部をつくっている。これらは、縄文時代中期末に比定できる。弥生土器3は、甕の底部で、外面を叩き目で成形している。いわゆる、底部輪台技法によるものであろう。縄文・弥生土器とも焼成は良好である。須恵器・円面硯4は、墨堂径が10cm・縁径が16.1cm・器高が5.8cmを測る。台部の窓は、長方形で八方に開けられている。台部はロクロナデ痕が残る。なお、墨堂部で墨痕は確認していない。甕5は、口径10.4cmを測り、鋭く外反し、屈曲した後直立する口縁部をもつ。屈曲部外面に稜が走る。土師器・椀6は、口径21.3cmで、外面底部は篋削りで、粘土の接合痕が顕著である。内面はハケ目で調整している。同7は、口径10.8cm・器高3.8cmを測る。底部外面は、篋削りで成形し、内面は、篋磨きを施している。甕8は、口径20.4cm・頸径17cmを測る。外面は縦ハケで、内面には一部に篋削りおよび指頭圧痕が残る。9は、甕の把手で、2か所に篋を差し込み穿孔しており、紐を通したと考えられる。これらの土師器は、概して胎土は密、焼成は良好である。C・D地区の包含層からは、多量の遺物が出土しているが、大半がローリングを受けたものである。

石器(第70図) 石鏃1は、長さ3.6cm・幅1.8cm・厚さ0.4cm・重さ2gを測る。基部がややくぼむ凹基無茎鏃である。素材は薄く、側縁部には表裏とも丁寧な剥離を施している。石材はサヌカイト製である。同2は、残存長2.1cm・残存幅2.1cm・厚さ0.4cm・重さ0.8gで、先端部および片側の基部先端は欠損している。全体の形状は、基部中央に明瞭な挟りをもつ凹基無茎鏃である。表裏面とも自然面を残さず、細かな剥離面で形成されている。石材は、サヌカイトである。削器3(図版第14-14)は、横形の素材を用い、上端

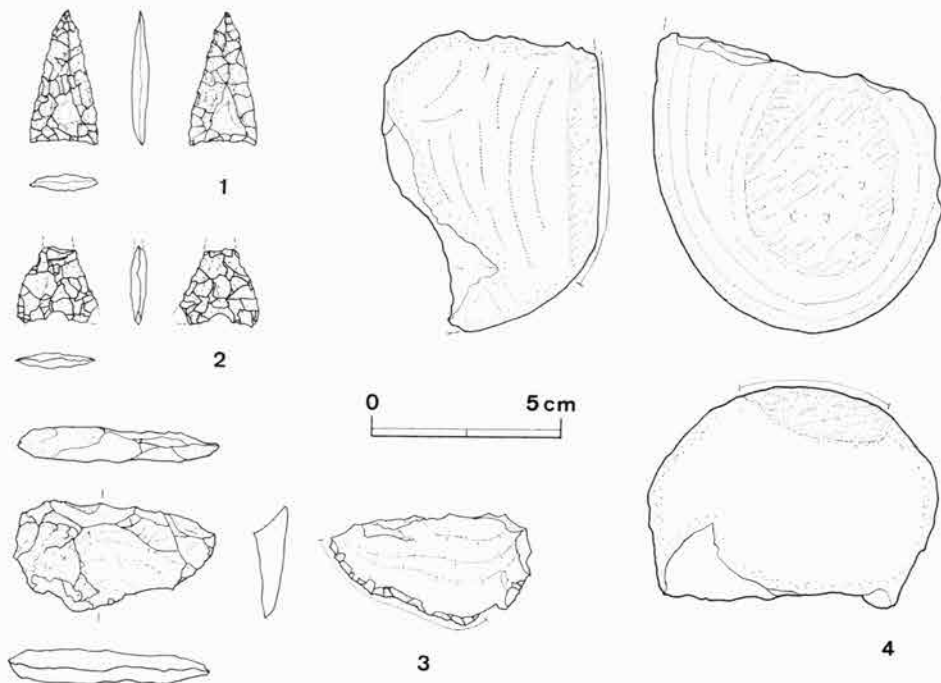


第68図 包含層出土遺物実測図

の打面部には節理面が大きく残されている。刃部は主要剥離面側の下端の薄い部分に、不規則的なスクレーピング・エッジが作り出されている。長さ3cm・幅5.4cm・厚さ0.8cm・重さ12.8gを測る。石材は二上山のサヌカイトである。磨石4は、河原石の円礫を用いているが、残存率は悪い。法量は長径7.9cm・短径5.8cm・重さ340gである。残存する礫面ラインから元の形状を復元すると、かなりの厚みをもった卵形を呈するものであろう。その長軸に沿う側面部に、明瞭な磨れ面が形成されている。使用頻度は、使用面と非使用面との境に稜線が認められるほど高く、滑らかではないが非常に平坦になっている。石材は比較的粗いチャート粒を多く含む砂岩である。破碎部の内側に赤化した部分を観察し得るが、被熱の有無は明らかではない。これらの石器の正確な年代については、共伴遺物がないため不明であるが、削器については、石材・技法上の巧拙からだけでは所属時期はわ



第69図 D地区包含層出土遺物実測図



第70図 出土石器類実測図

(1・2: 石鏃, 3: 削器, 4: 磨石)

からないものの、万能的な利器としての横形削器は、縄文・弥生時代の遺跡から多く出土している。

6. 小 結

事実報告では、古墳時代から平安時代までを時代順に記述した。本来ならば各問題点について総括する必要があるが、遺構を検出していないものの、出土遺物が、芝山遺跡の性格を知る上で重要な意味をもっているものも少なくない。ここでは、遺構・遺物について整理しながら、時代順に問題点を指摘していきたい。

縄文時代 遺構は検出していないが、土器・石器の出土が見られる。土器(第69図1・2)は、文様の構成から中期末に比定できる資料である。出土層位は、奈良時代の遺物包含層であるが、ローリングを受けた形跡もないことから原位置から大きくは移動していないと考えられる。芝山遺跡の南側に隣接する森山遺跡では、同時期のピット・土坑・溝等が確認されており、遺物も整理箱に10箱程度出土している。この森山遺跡を拠点として、同一丘陵内に遺物が広がりを見せることは十分考えてよい。最近、久津川古墳群の各所から、^(註49)同時期の遺物が出土しており、特に、丸塚古墳からは、前期に比定できる資料が確認され

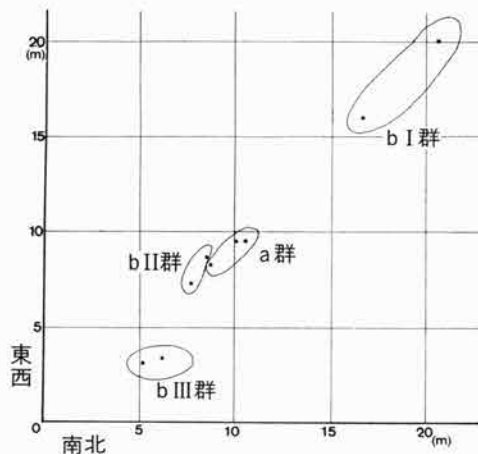
ている。今後、丘陵内において同時期の遺構・遺物が発見される可能性は高いと言える。

弥生時代 甕の底部(第69図3)と石器・スクレーパー(第70図3)が出土している。類例としては先述した森山遺跡にあり、縄文時代の遺物と同じ解釈が成り立つ。一方、木津川の沖積地に所在する塚本遺跡からは、同時期ないし先行する時期の遺物が、多数確認されている。完形に近い状態であったことが報告されているが、微高地であることから、集落が存在する可能性もあり、丘陵との関連を土器の時的な側面から、ある程度解明できると考えられる。今後の類例の増加に期待したい。

古墳時代 古墳時代の遺構としては、布留式併行の竪穴式住居跡や5・6世紀の群集墳・竪穴式住居跡等がある。布留式併行の竪穴式住居跡1(第25図)は、第1次床面と第2次床面を検出した。これを出土遺物から見ると、甕の外面に細かい叩きをもつもの・外面をハケ目で調整したものに分けられ、両方に若干の時期差があることから、より確実な資料として認識できる。また、共伴遺物についての時期設定が可能であることは大きな成果であった。土器の年代から第1次床面を布留0式前後^(注50)、第2次床面を布留3式前後に比定できる。検出した竪穴式住居跡は1基だけであるが、周辺では森山遺跡で同時期の竪穴式住居跡が確認されている。これらを一連の集落とするには、広範囲であるため、芝山遺跡が位置する丘陵には、少なくとも二つ以上の集落が存在すると考えられる。竪穴式住居跡1以北では同種の遺構を確認していないため、一つの集落の北限である可能性も指摘できる。

5世紀末葉になると、今まで、集落を営んでいた丘陵に古墳が造り始められる。その最初は、丘陵中央部以東に位置する方形墳群(第4図)である。1・3号墳は、ほぼ同じ規模であるが、2号墳は、墳丘規模・埋葬主体部が小さく、周溝も断続的に掘られていることから、1・3号墳よりも退化した形態と考えられ、出現時期も後出するものであろう。1号墳は、溝内に土坑を掘り、底部を穿孔した須恵器・甕が埋納されている。一方、3号墳は、溝内に壇状の施設をもち、陸橋状施設があること等から、いわゆる、弥生時代の方形周溝墓の系譜を引くものとして考えてよい。4世紀代には梅の子塚古墳群のように、定形化した前方後円墳や円墳が築造されており、これらが成立した後の方形墳(低墳丘)の築造は、各々を築造せしめた集団に何ら

付表2 古墳規模比較表



かの相違点があったことを窺わせている。1～3号墳のような方形墳は、芝山遺跡の昭和52年の調査や北方に位置する宮ノ平遺跡でも確認されており、芝山遺跡を中心とする丘陵に広がっている可能性が高く、5世紀末～6世紀初頭における一豪族の勢力の一端を物語っている。

方形墳の中でも、3号墳の陸橋状施設を挟むように穿たれたピットは注目できる。この古墳は、周溝をめぐるすことによって聖域(墓域)を区画しているが、陸橋状施設の部分は、概念上の聖域と俗域の区画ができず、相互に影響することを意図的に避けなければならない。そのため、陸橋状施設を挟んだ部分に聖域を表現しうるものを立てることにより、完全に聖域を概念の上からも区画できたと考えられる。その形態については、系譜自体にも多くの問題点があるが、結張等を考えておきたい。古墳時代の墳墓の研究は、土器・鉄器

遺構変遷図(太線が該当遺構)	年代設定基準資料	出土遺構・型式・備考
		竪穴式住居跡Ⅰ (第53図)
		布留式 1号墳周溝内(第45図) 3号墳埋葬主体部(第46図) 3号墳周溝内(第47図)
		a群 TK47前後 4号墳周溝下層 (第48図)
		bⅠ群 MT15前後 6号墳埋葬主体部
		bⅡ群 TK10前後 7号墳埋葬主体部 (第50図)
		bⅢ群 TK43前後 8号墳埋葬主体部
		c群 TK209前後 9号墳埋葬主体部 (第50図)
		土壇墓群(第52図) 竪穴式住居跡Ⅱ(第55図) 溝2-3(第65図) 土壇Ⅰ(第56図)
		c群 TK209前後 竪穴式住居跡3~7 (第57図)
		TK217前後

第71図 古墳～飛鳥時代遺構変遷図

などのように比較的、残りやすいものを中心になって行われてきた。また、祭祀についても同じである。しかし、外部施設に使用されたものが、すべて土や鉄によってできていたと考えることは無理がある。今回のように、そのもの自体は残存していないが、その形跡を丹念に調査することは、古墳時代の精神生活についての研究に大きな影響を与えるもの^(注51)と思う。

6世紀前半に入ると、方形墳の築造は行われず、尾根の先端に直径20m前後の円墳が出現する。規模の面で見ると、群を抜いて大きいことがわかる(付表2)。また、墳丘の形状も方形墳や後述する他の古墳が低墳丘であるのに対して、いわゆる、高塚であり、当地を掌握する豪族の勢力がそれ以前に比較して強大なものになったことを示している。4・5号墳より後出する長池古墳は、当丘陵の下段に位置する前方後円墳で、主体部から多くの須恵器とともに、鉄鏃・鉄刀・琥珀の褒玉・碧玉の管玉・空玉・櫛歯文鏡等が出土しており、周辺では類を見ない副葬品がある。この副葬品は、正に盟主墳としての位置付けを確固たるものにしており、1～4号墳築造時の勢力をさらに強大にした者の奥津城であると言える。^(注52)4・5号墳の次に築造された6・7号墳は、墳丘規模も小さくなり、低墳丘である。それ以後、古墳は8・9号墳のように小円墳化し、土塚墓群をもって造墓行為は終わる。おそらく、6世紀中葉に築造された6・7号墳から急激に小型化した傾向がある。その変遷(第71図)をみると、古墳と古墳の間に小型化したものが築造されており、群集墳として考えられる資料である。城陽市において、確実な群集墳としては初出であり、同丘陵の古墳時代の動態を考える上では良好な資料を得たといえる。なお、最近、柏平遺跡では、木棺直葬墳が確認され、多くの須恵器が出土しており、その中の鈴付きの須恵器・高杯が一点みられる。特異な遺物であり、今後の解釈が期待されている。時期は1～5号墳とほぼ同時期である。なお、今回の調査地は、丘陵のごく一部であり、遺跡内には数多くの古墳が存在するものと考えられる。

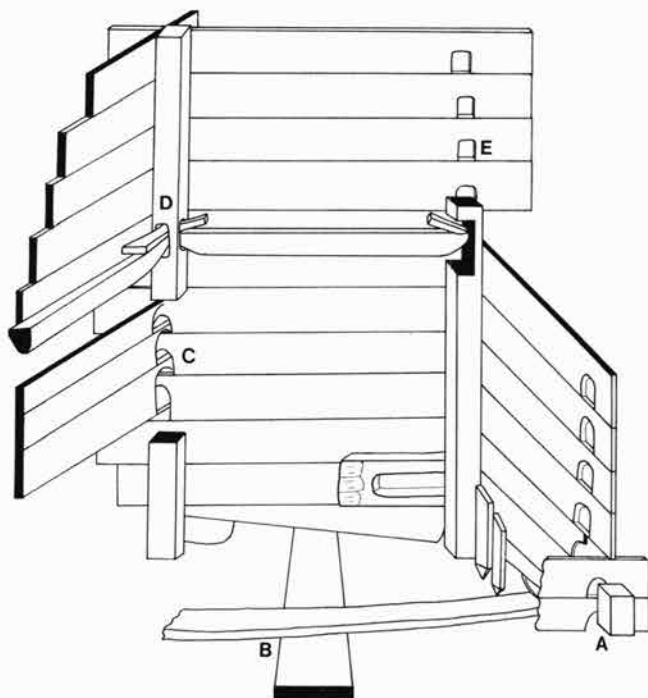
古墳時代後期の竪穴式住居跡は、周辺地域において若干の検出例がある。しかし、集落としては認識されていないのが現状である。今回の調査では、竪穴式住居跡2がその時期に相当する。この住居跡は、丘陵の奥の部分に位置しており、溝2～4の以西であることから、溝が墓域と住居域を区画していたと仮定すれば、同時期の集落は、A地区の一部とB地区に広がっていたと考えられる。しかし、高塚である4・5号墳が尾根の先端に築造されていることを勘案すれば、A地区より一段下がった部分に営まれた可能性もある。

飛鳥時代 古墳時代の造墓行為の終末を土塚墓群と仮定した場合、それより後出した段階に竪穴式住居跡群が造られ始める。これらの竪穴式住居跡群は、古墳群の内1～3号墳を削平しているが、尾根の先端部に位置する古墳群・土塚墓群は削平せず、溝1(第10図)

で区画し、造営されている。このことは、古墳群を築造した集団と竪穴式住居跡群を造営した集団が、密接な関係にあったことを物語っている。竪穴式住居跡は、合計5基確認しており、主軸線は異なっているものの、住居跡はほぼ円形状に配されており、中央に何らかの目的で広場があった可能性がある。同時期の集落としては、芝ヶ原遺跡・森山遺跡に類例があり、ある程度の間隔をおいて集落が形成されていたのかも知れない。今後の発見例が増加することにより、周辺地域の動態が明らかになるばかりでなく、奈良時代の平川廃寺・正道廃寺・久世廃寺の成立を考える上でも重要な資料になり得るものと言える。

奈良時代 奈良時代に入ると、この丘陵は、前代の集落とは比較にならないほど、大規模な集落が造られ始める。掘立柱建物跡は、現在、復元できたものだけで18棟を数える。しかし、調査地内においては、柱穴を200以上確認しており、棟数は確実にそれ以上になる。掘立柱建物跡は、主軸線の方から、少なくとも3時期に設定できる。特に、一辺1mを測る柱穴で復元できた掘立柱建物跡群は、ほぼ磁北と一致するもので、他の時期の建物跡群に比べて最も棟数が多いことが指摘できる。おそらく、この丘陵における集落としては、最も整備された時期を示していると考えられる。芝山遺跡の昭和52年に行われたEトレンチの調査では、

底をもつ掘立柱建物跡が確認されている。造営当時において、底をもつ掘立柱建物跡は、公的な建物跡か邸宅であることが多く、確認された掘立柱建物跡もその範ちゅうでとらえることができる。Eトレンチ周辺の地形は、標高60m前後の平坦面が続き、同種の掘立柱建物跡が、平坦面に広がる可能性は極めて高いと言える。今回の調査において、C・D地区の遺物包含層からは、多量の須恵器・土師器の他に、須恵器の杯身を燈明皿に転用したものや円



第72図 井戸枿、木組模式図(正面が東側面)

- ① 模式図縮尺は一定ではない。
- ② 構造的特徴を模式図に表現できるように、部分的に除外した部材がある。(黒塗り部分が断面)
- ③ ④ 板材組合せ部外側に設けられた角柱 ⑤ 井戸内最下部に設置された板
- ⑥ 板材組合せ部 ⑦ 枿穴と榫差し込み部 ⑧ 板材加工部

面硯等が出土している。この包含層は、上述の平坦面の北斜面に位置しており、平坦面から流出したものが再堆積したものとして考えられる。一方、A地区の井戸内からは、平城宮式6291A型式の軒丸瓦・磚・土馬・灰釉陶器・鉄鉢形土器・平城宮式の土師器・高杯等が出土している。これらの出土遺物の構成は、平城京や長岡京に代表される都城および寺院から出土する構成に酷似していると言える。確認された遺構・遺物から、Eトレンチおよび周辺に存在すると考えられる掘立柱建物跡群の性格は、一般的な集落以外で考える必要がある。仮に、官衙的な性格を有していたと考えた場合、A地区で検出した掘立柱建物跡群が、それらに付随する施設であったかもしれない。それゆえ、環境整備も含めて古墳が削平されたと考えたい。古墳を削平した部分には掘立柱建物跡が少ないことは、軟弱な地盤で凹凸が激しいことが原因であると既に述べたが、このような政治的な背景を想定した場合、削平当初から建物を建てることを目的とせず、環境整備に重点を置いていたとも考えられる。今後、同丘陵における調査が行われれば、掘立柱建物跡の棟数は激増し、新たな資料も追加され、建物跡の性格についてもより一層明らかにできるであろう。

以上が、事実報告をもとにした各時代の問題点の整理としたい。最後に、井戸の構造について簡単にふれておきたい(第72図)。

検出した井戸枠は、各部材とも残存状態がよい。ここでは、構築過程の復元をおこなう。まず、スロープを含めて一段目の掘形を掘り、次に、湧水層(砂利層)を貫通し、最下層で最も安定している青灰色粘土層直上まで井戸枠設置のための掘形を掘る。井戸枠設置は、まず、枠の四隅を決めるために、角柱を置く(A)、この時点で、湧水層である砂利層を側板で遮断しないように青灰色粘土層上に「十」字形に厚さ10cm前後の板材を敷き(B)、側板と青灰色粘土に一定の空間をつくっておく。四面の基底部材(建築部材を転用したもの)を設置し、それと前後する時点で、四本の支柱を棧で固定し(D)、板材を組み合わせながら(C)、掘形に砂利を充填し埋めていく。掘形を埋める際、幅20cm前後の板材を2回にわけて敷いている。その後、残存していないが、井戸に流入土が入らないように、井戸枠を組んだり、覆屋を構築したと考えられる。今後、構造等について再考したい。

7. お わ り に

今回の芝山遺跡の調査面積は、遺跡全体の10%にも満たないものであるが、検出した遺構・遺物は、芝山遺跡全体の性格・年代を決定できうるものと言っても過言ではない。調査成果から数々の問題提起ができた。今後、それらについての考察は、徐々にではあるが行う必要がある。二三列挙すると、(1)1～3号墳の用語に対する概念規定。(2)3号墳に見られる聖域区画のための結張の有無。(3)検出した群集墳と周辺に所在する梅の子塚古墳・

長池古墳・冢塚古墳等との関連。(4)奈良時代の掘立柱建物跡の性格等、どれを取り上げてみても同丘陵の周辺の歴史的環境を考える上で重要なことである。城陽市には、芝ヶ原12号墳・久津川古墳群・正道遺跡などの重要な遺跡が多数所在し、調査が行われる度に、学界に波紋を投げかけてきたと言える。今回の調査で確認した遺構・遺物は、非常に地味ではあるが、地域史を研究する上では、基本的な資料が提示できたと考えている。今なお多くの問題点が山積みではあるが、慎重に、そして、丁寧に基礎資料を蓄積していくことは、地域史研究における考古学の課せられたところであろう。

期間中、多くの方々の御指導・御協力を賜ったことに感謝の意を表したい。特に、石田真一・北埜善史・佐藤正之諸氏からは多くの協力を得た。また、当調査研究センター調査員黒坪一樹氏には石器について執筆願った。記して深謝する次第である。(小池 寛)

注1 調査指導者(順不同・敬称略)

福山敏男・樋口隆康・西谷真治・金関 恕・原口正三・近江昌司・都出比呂志・吉田金彦・山田良三・和田晴吾・堤圭三郎・高橋美久二・中谷雅治・平良泰久・奥村清一郎・近藤義行・中村孝行・吉村正親・杉本 宏・置田雅昭・泉 武・高野政昭・竹谷俊夫・日野 宏・伊賀高弘・秋山浩三・柏井光彦・梶本敏三・木原 滋・國下多美樹・猿向敏一・西畑佳恵・長友恒人・中尾 稔・土橋 誠・土生田純之・橋本清一・福永信雄・森田浩司・鷹野一太郎

調査参加者(順不同・敬称略)

石田真一・大谷正子・梶本真由美・北埜善史・郡 角治・古賀達也・小館美和・浜口和宏・林啓子・原田幸子・樋口絹子・福富 仁・和田 満・柳本喜美恵・頼娃ちか子

調査協力者(順不同・敬称略)

地上松一・上東克彦・石田雅晃・白川つる子

注2 芝山遺跡現地説明会資料(京埋せ現地説明会資料No.86-02) 昭和61年3月8日、「芝山遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986等の既刊の報告分では、すべて統一している。今後は、付表1の名称に準拠する。

注3 一般的に弥生時代の墓制には、方形周溝墓・方形台状墓などがあり、比較的広い地域に見られる。これらの墓制が古墳時代まで踏襲されたと考えれば、1～3号墳も名称としては、方形周溝墓と言うことになる。しかし、古墳時代の社会的背景を勘案すれば、方形墳の概念で捉えなければならない。類例も増加しており、概念規定が急がれる。

注4 芝山遺跡は、広範囲におよぶため、字名を冠して古墳群の名称を設定できない。また、遺跡内には梅の子塚古墳等が所在するため、遺跡名を古墳群の名称に使用すれば繁雑になり、今回の報告では、城陽市教育委員会等関係諸機関と協議し、各古墳の名称を与えるにとどめた。

注5 高橋美久二・平良泰久「宮ノ平古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1974)』京都府教育委員会) 1974

長谷川達・大槻真純「宮ノ平遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注6 近藤義行「森山遺跡発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第6集 城陽市教育委員会) 1977

注7 龍谷大学考古学資料室「城陽市梅の子塚古墳群測量調査略報」(『京都考古』第15号 京都考古刊行会) 1975

- 注8 乾 幸次『南山城の歴史的景観』古今書院 1987
- 注9 木原 滋・小池 寛「城陽市塚本遺跡採集の土器について」(『京都考古』第42号 京都考古刊行会) 1986
- 注10 近藤義行「芝ヶ原古墳」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第16集 城陽市教育委員会) 1987
- 注11 堤圭三郎「西山古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1964)』京都府教育委員会) 1964
- 注12 山田良三ほか「尼塚古墳群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1969)』京都府教育委員会) 1969
- 注13 元興寺仏教民俗資料研究所 考古学研究室「京都府城陽市上大谷古墳群の調査一試掘調査報告書一」(『考古学研究室調査報告』第1冊 元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室) 1977
- 注14 近藤義行・奥村清一郎「下大谷古墳群発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2冊 城陽市教育委員会) 1974
- 注15 近藤義行「平川廃寺・赤塚古墳発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第12集 城陽市教育委員会) 1983
- 注16 注5に同じ
- 注17 堤圭三郎「芝ヶ原古墳群分布調査ならびに発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967
- 注18 近藤義行ほか「車塚古墳発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第4集 城陽市教育委員会) 1976
- 注19 西谷真治「梶塚古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』京都府教育委員会) 1965
- 注20 堤圭三郎「青山古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』京都府教育委員会) 1967
- 注21 白木原和美「長池古墳発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1965)』京都府教育委員会) 1965
- 注22 高橋美久仁・近藤義行「正道遺跡発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会) 1973
- 注23 注22に同じ。
- 注24 近藤義行「芝ヶ原遺跡発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第14集 城陽市教育委員会) 1985
- 注25 注22に同じ。
- 注26 近藤義行ほか「平川廃寺発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集 城陽市教育委員会) 1975
- 注27 近藤義行「久世廃寺」(『京都府埋蔵文化財情報』創刊号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1981
- 注28 近藤義行ほか「芝山遺跡発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第7集 城陽市教育委員会) 1977
- 注29 各古墳の規模の計測は、残存する周溝の外側肩部で行った場合、その周溝の幅によって計測値が変わってくる。その計測値は、正確に古墳の規模を表現しうるものではあるが、4・5号墳と他の古墳では、明らかに周溝幅が異なり、比較する際に客観性を損なうことになるため、周溝の最深部間で計測した。
- 注30 類例としては、宮ノ平古墳(注5)にある。この古墳の場合は、周溝内に土壇を設けていないが、蓋杯・高杯・甕・壺・甕などの須恵器が据えられた状態で出土している。なお、これらの須恵器は、城陽市内出土の中で最も古い一群として考えられる。

- 注31 綾部市の野崎古墳群において、同じように周溝内に突出した部分があり、調査担当者は、「半陸橋状の掘り残し部分」と表現されている。今後、用語の規定をする必要があり、また、その施設の機能を考えていく必要がある。「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注32 4・5号墳の周溝上層および周辺の整地層から、第68図以外にも鉄銚・鉄刀・鉄釘などの破片が出土しており、また、周溝下層から出土している土器と同時期のものがある。
- 注33 焼土は、5cm程残存しているが、炭は確認していない。上部が削平によって消失したと考えられるが、ある程度の深さを仮定した場合、焼土塚として考えることも可能である。
- 注34 須恵器・蓋杯は、口縁部を底面に接する状態で埋納されており、棺上遺物が転落したとは考えられない。
- 注35 城陽市内において合口甕棺墓の例は多く見られる。山田良三「芝ヶ原遺跡発掘調査報告書」芝ヶ原遺跡調査会、単行本、1980など
- 注36 注8および城陽町教育委員会編『城陽町史』第1巻、1973などに推定地が掲載されている。
- 注37 中村孝行「西町北大坪遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第13集 綾部市教育委員会) 1986
- 注38 掘立柱建物跡の復元は、調査地の幅が20mであったため、不正確な復元となった。今後、周辺の調査が行われれば、今回の掘立柱建物跡自体の復元も改定されるべきであろう。
- 注39 本来の用途ではないが、石突を使用して砂岩を打ち割った可能性も指摘できる。
- 注40 給水口には厚さ7cm前後の木が使用され、中央を丁寧に削り取ったものである。井戸枠組みの類似例としては、奈良国立文化財研究所「藤原宮・左京六条三坊の調査(第47・50次)」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』17 1987)に掲載のSE4740等がある。
- 注41 正式名称は大河原川であるが、築留川と通称される場合もある。その通称から、護岸を施したと考えられる。文献調査によって、旧河道の年代を決められるのかもしれない。
- 注42 『陶邑古窯址群Ⅰ』(平安学園考古クラブ) 1966
- 注43 環状把手は、須恵器・提瓶によく見られるものである。本例の口縁部と把手の形態は、同時期の提瓶に似ており、何らかの関係があるのかもしれない。
- 注44 鉄滓の出土により、カマドの機能についての一側面が理解できる。
- 注45 『愛知県古窯跡分布調査報告(Ⅱ)(尾北地区・三河地区)』愛知県教育委員会 1983
- 注46 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』に提示された壺Hに入るが、この器種が祭祀に関係する可能性が指摘されている。奈良美穂「須恵器壺Hの一考察」(『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』) 1985。戸原和人「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
- 注47 城陽市内の各寺院から出土する軒丸瓦の中でも、比較的少ない型式である。
- 注48 定森秀夫氏の教示による。
- 注49 近藤義行「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第17集 城陽市教育委員会) 1987
- 注50 寺沢 薫「矢部遺跡」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第49冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1986
- 注51 聖域と俗域を区画する目的のためには、一般的に埴輪が使用される。3号墳のように木柱を立てた痕跡をもつ古墳の類例を現在、集成しており、文章化したいと考えている。
- 注52 長池古墳については、天理大学 西谷真治教授から多くの助言を賜った。また、出土遺物の実測についても快諾された。今後、資料紹介を行いたい。なお、遺物実測については、天理参考館 近江昌司氏・日野 宏氏にお世話になった。記して深謝したい。

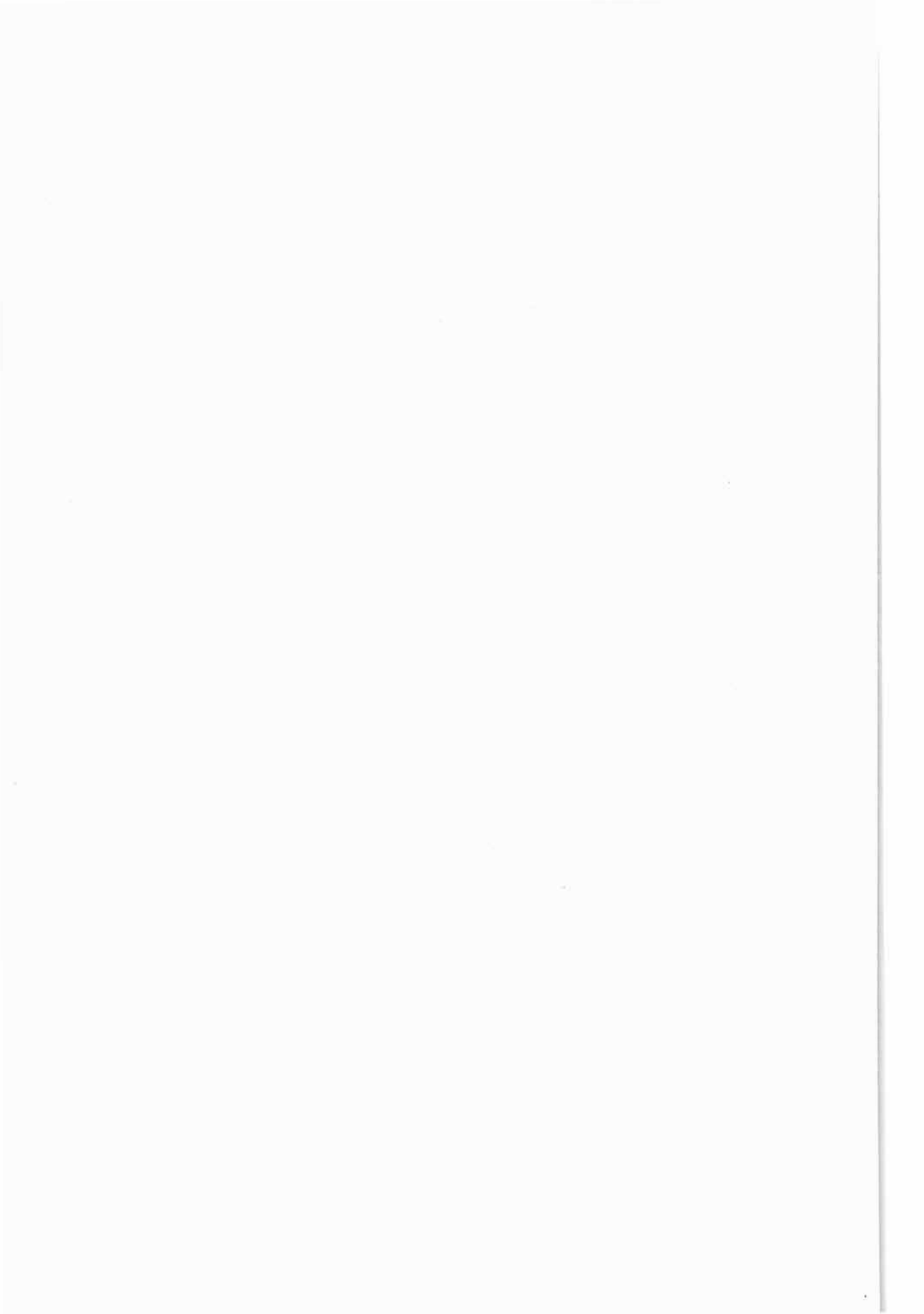


圖 版



(1) A地区調査前全景（東から）



(2) A地区完掘状況（東から）



(1) 1～3号墳(下方が北)



(2) 3号墳(下方が北)



(1) 4～9号墳ほか（上方が北）



(2) 6～9号墳ほか（南東から）



(2) 3号墳壇状施設遺物出土状況(南から)



(4) 土壇墓1(東から)



(1) 3号墳埋葬主体部(東から)



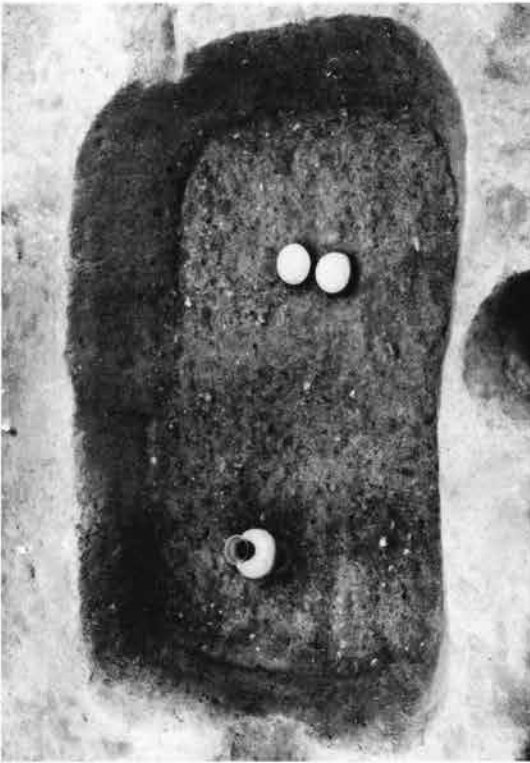
(3) 3号墳周溝内遺物出土状況(南から)



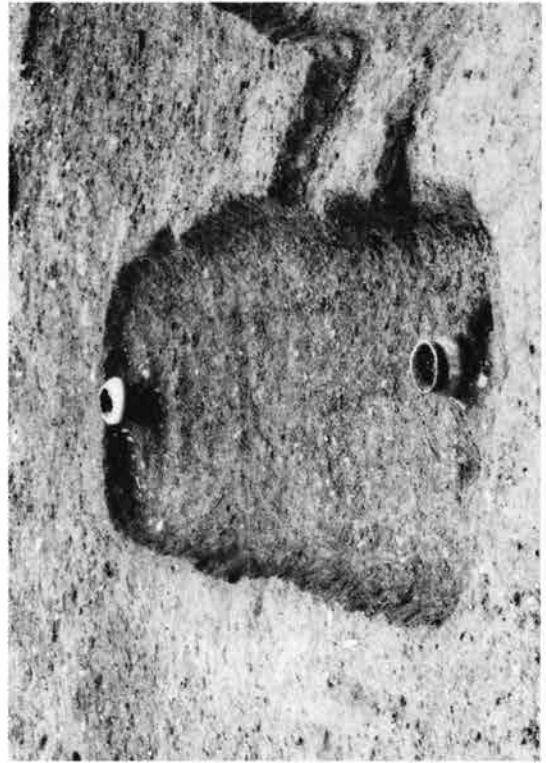
(2) 8号墳埋葬主体部遺物出土状況(北から)



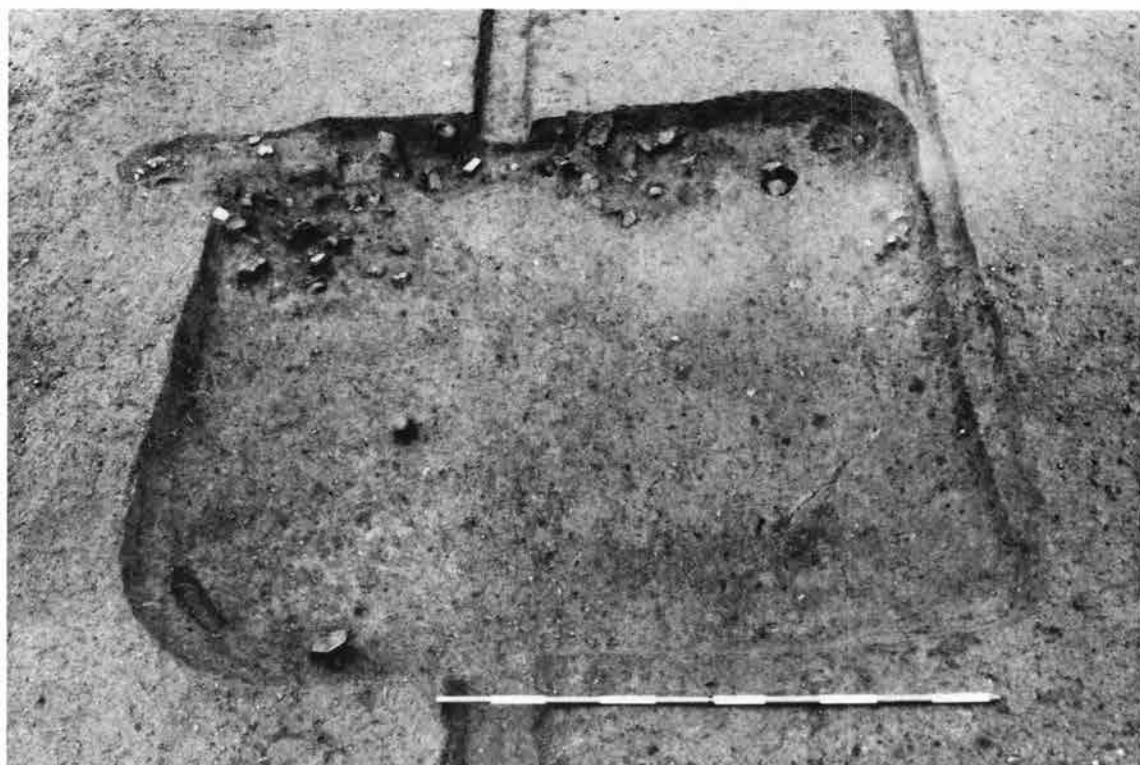
(4) 土壇墓5(南から)



(1) 6号墳埋葬主体部(西から)



(3) 9号墳埋葬主体部(北から)



(1) 竖穴式住居跡1 (南から)



(2) 竖穴式住居跡1 遺物出土状況 (東から)



(1) 8・9号墳，溝1，竪穴式住居跡群（下方が北）



(2) 竪穴式住居跡5（東から）



(1) 土壇1遺物出土状況(北から)



(2) 土壇4(北から)



(1) 井戸全景 (東から)



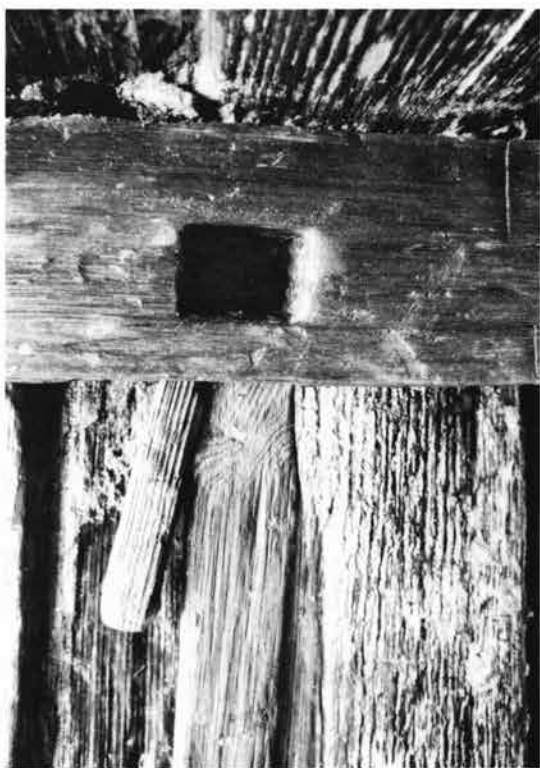
(2) 井戸完掘状況 (西から)



(2) 給水口 (西から)



(4) 井戸完掘状況



(1) 梢穴・棧・楔 (西から)



(3) 齋串出土状況



出土遺物 (1号墳：7, 3号墳：1~6, 4号墳：8)



1



2



4



3

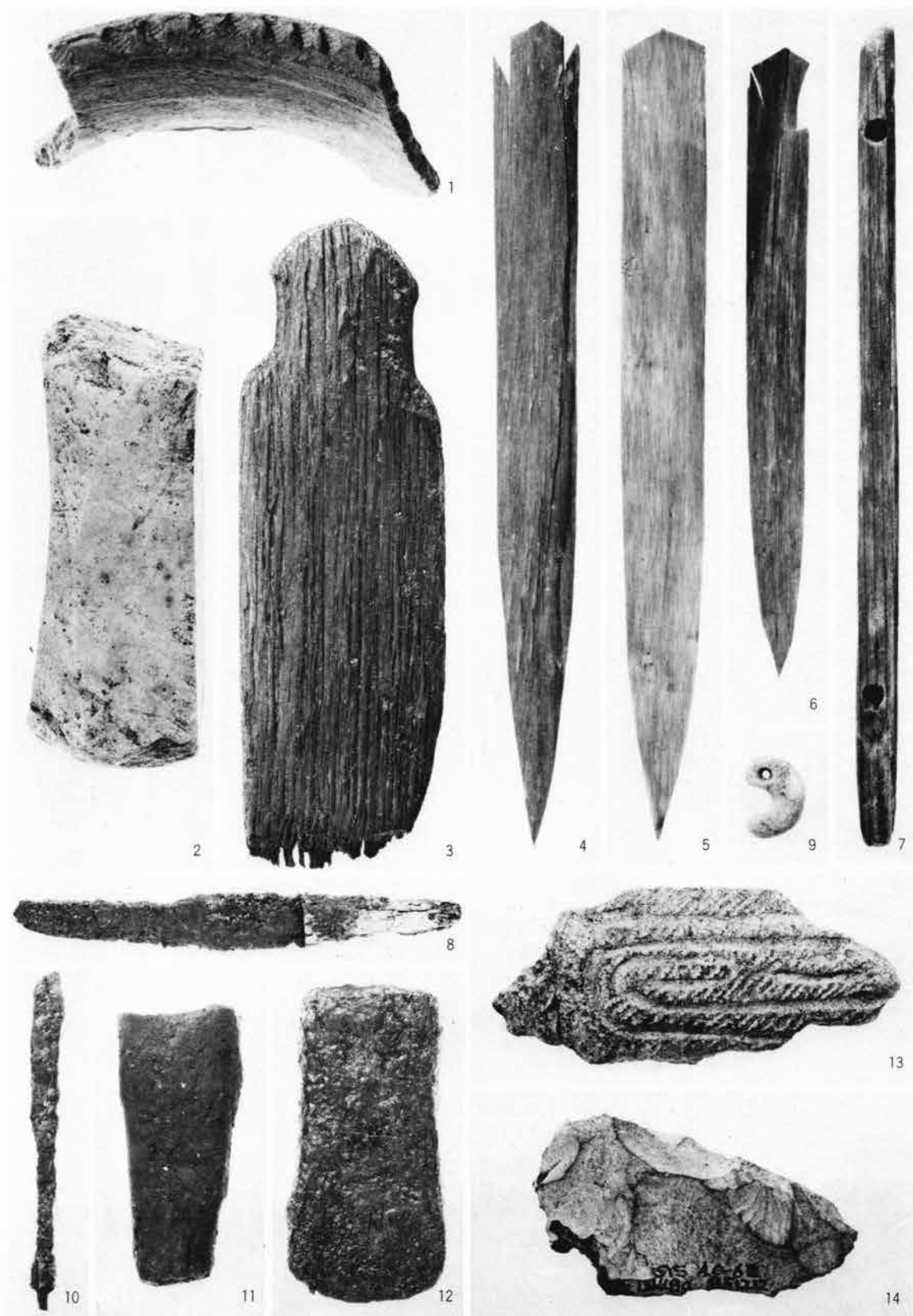


5

出土遺物（6号墳：1，7号墳：2，竪穴式住居跡1：3～5）



出土遺物（土塚4：1，井戸：2～6，D地区包含層：7）



出土遺物 (竖穴式住居跡1: 1・2, 井戸: 3~7, 7号墳: 8, A地区包含層: 9・10・14, 礫充填土塚: 11, 1号墳: 12, D地区包含層: 13)

京都府遺跡調査概報 第25冊

昭和62年3月20日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)